

生き物から見た名古屋の自然



なごやの環境指標種100
(改訂版)



【表紙の写真】

上段左から：アオスジアゲハ、ニホンタンポポ、カワセミ、キシノウエトタゲモ
（ 上記の種はいずれも中区三の丸付近で観察できる。）
各種の解説は本文参照。

下段：名古屋城上空から名古屋駅方面を望む

はじめに

わたしたちのまち名古屋市には、
わたしたちのほかに、
たくさんの生物がすんでいます。
まずは、彼らのことを知りましょう。
そして、彼らと友だちになってください。

2010年秋に、名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議が開かれます。生物多様性とは、簡単に言えば「生きるもの みんな違って みんないい」ということで、この地球上に、多種多様な生物が、多種多様なあり方で存在していることです。人類は、直立二本足歩行を始めてから今まで数百万年の間、自分たちの発展のために、他の生物の領土を奪い、自分たちの領土を拡張しようと努力してきました。人類の力がそれほど大きくなかった時代には、それで問題はなかったのです。

しかし人類は、あまりにも強大な生物になりました。たった1種の生物がこれほど繁栄したのは、地球の歴史の中で初めてのことです。限りある地球の上で、人類が限りなく発展することはできません。やがては必ず限界に達します。「トキが絶滅して何で困る。困ったのは仕事がなくなりそうになった保護センターの人だけではないか！」と開き直れば、それはそのとおりでしょう。けれどもその調子で限界に向かって突進し、壁に大激突という事態を招きたくなければ、少しは他者を思いやる気持ちを持つべきです。生物多様性を保全する意味は、ここにあります。

「他者を思いやる」第一歩は、他者の存在を知ることです。存在を知らない相手は、思いやりようがありません。そこで私たちは、名古屋市に生息・生育する生物の中から代表的なもの100種を選び、この本にまとめました。身のまわりに、こんな隣人がいる。そして彼らは、都市化された環境の中で、このような生の営みを続けている。そのことを知る手がかりとして、本書を活用していただければ幸いです。

本書は、名古屋市環境局生物多様性企画室の企画をもとに、三菱UFJ環境財団の援助によって2004年発行の旧版を改訂して作成したものです。巻末に記した方々にも多くの資料や情報を提供していただきました。ご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。

2010年10月

著者を代表して

芹沢俊介

【 目 次 】

1. 環境指標種とはどのような生物か	1
2. 各環境の概要	5
①市東部の丘陵地に多い樹林地	5
②市内には少ない草地	6
③様々な環境の含まれる水辺	7
④都市部の中にも残る自然	8
3. 名古屋市の環境指標種 ―各種の解説―	9
樹林地	10
草 地	35
水 辺	53
都市部	107
4. 生物の移入とその問題点	128
移入種、帰化種、外来種	130
代表的な移入生物	131
5. 観察記録をつけよう ―フィールドノートの使い方	136
6. 植物画を描く	140
資料	142
用語解説	142
名古屋市版レッドリスト2010	143
索引	158
執筆者・作成協力者	160

コラム

環境指標種の解説とは違う視点で生き物からみた名古屋の自然を紹介しています

名古屋城のお堀のモグラ	16	庄内川河口のヨシ原湿地の	
藤前干潟の野鳥たち	70	貝類とその保全	102
名古屋に棲むカメの変遷	76	外来タンポポとニホンタンポポ	110
ナゴヤダルマガエル	80	日本列島を北上する昆虫たち	120
都市化で増える魚と減る魚	86	トタテグモの仲間	124

1. 環境指標種とはどのような生物か

名古屋市の東側は、一昔前までは低い丘陵地が連なり、林や田畑、草지가広がっていました。現在では土地造成が行われて市街地化が進み、このような場所はずいぶん少なくなりましたが、それでもまだ森林公園、小幡緑地、猪高緑地、東山公園、牧野ヶ池緑地、島田緑地、大高緑地など、ところどころにまとまった緑地が残されています。また、市の北側から西側を流れる庄内川の河川敷には礫の河原や堤防の草地があり、河口付近には干潟やヨシ原が広がっています。西側の一部には水田地帯も残されています。古くからの市街地である市の中心部にも、名古屋城、鶴舞公園、熱田神宮などいくつかの公園や社寺林があります。そしてこれらの場所には、まだ多くの動・植物が生息・生育しています。しかしその一方で、名古屋市ではすでに絶滅してしまった動・植物、あるいは減少傾向が著しく、このままでは遠からず絶滅してしまいそうな動・植物もたくさんあります。名古屋市では、このような絶滅に瀕している動・植物の実態調査を行い、結果をまとめて2004年に「レッドデータブックなごや・動物編」、「レッドデータブックなごや・植物編」を刊行し、2010年にはその見直しを行って「レッドデータブックなごや2010」を作成中です。

しかしながら身近な自然環境を保全し、自然と調和のとれた生活環境を維持するためには、絶滅に瀕している生物だけでなく、まだまだたくさんある／いる生物にも目を向ける必要があります。市街地に囲まれた場所では、生物はちょっとしたことですむ場所を失い、衰退してしまいます。多くの人の目で、そこにすんでいる生物を継続的に観察していく必要があります。

そこで本書では、名古屋市の環境を大きく樹林地、草地、水辺、都市部の4つに区分し、それぞれに生息・生育している動・植物の中からその環境を代表し、環境変化を反映しやすい種で、似たものが少なくて容易に識別でき、しかも比較的多く見られるもの、または個体数は少なくともよく目立ち観察しやすいものを中心に100種を選定し、身近な自然環境の状態を指標する「環境指標種」として、写真とともに紹介しました。次頁に、今回選定した種を、生息・生育環境要素毎にまとめて示しました。オオゴキブリ、キシノウエトタテグモ、ヒルゲンドルフマイマイは希少で観察もしにくい種ですが、都市部に残存する自然要素の象徴として、特にとりあげました。

各種の解説頁の外側には、それぞれの環境、および生物群を示すインデッ

生息・生育環境区別の環境指標種一覧

生息・生育環境	植 物	哺乳類	鳥 類	は虫類・両生類
樹林地 雑木林 照葉樹林 針葉樹林 竹林	ツブラシイ アベマキ フモトミズナラ コバノミツバツツジ ニオイタチツボスミレ	ヒミズ アカネズミ ニホンリス ムササビ	オオタカ コゲラ エナガ	カスミ サンショウウオ アズマヒキガエル
草地 畑地 堤防 河川敷(川原)	ノアザミ チガヤ クズ ツリガネニンジン ノコンギク ススキ	カヤネズミ	キジ ケリ ヒバリ	ニホントカゲ
水辺 河川 水路 池沼 水田 休耕地 湿地 塩湿地 干潟	マメナシ ハルリンドウ トウカイコモウ センゴケ スイラン カワヂシャ シロバナサクラタデ オギ ココニタピラコ ヨメナ オグラノフサモ ウラギク		カイツブリ チュウサギ カルガモ コアジサシ シロチドリ ハマシギ カワセミ セグロセキレイ オオヨシキリ	クサガメ ヒバカリ トノサマガエル
都市部 社寺林 住宅地 小公園	ウラシマソウ ハハコグサ ニホントタンポポ		アオバズク コシアカツバメ ウグイス	ニホンヤモリ ニホンアマガエル
計	25種	5種	18種	8種

魚 類	昆虫類	クモ類	カニ類・貝類	計
	オオカマキリ コロギス ニイニイゼミ マイマイカブリ オオスズメバチ ムラサキシジミ テングチョウ サトキマダラヒカゲ	サツマノミダマシ トリノフンダマシ		24種
	キアゲハ ツマグロキチョウ ツマキチョウ ウラナミシジミ ヒメジャノメ	コガネグモ		17種
ウナギ スナヤツメ タモロコ モツゴ メダカ	ハグロトンボ ウチワヤンマ サラサヤンマ ハッチョウトンボ ケラ ヒメタイコウチ ヘイケボタル ミドリシジミ	アシナガグモ	ウモレベンケイガニ ヤマトオサガニ ヒロクチカノコ カワザンショウガイ マルタニシ イシガイ ドブガイ	44種
	オオゴキブリ タマムシ アオスジアゲハ クマバチ	キシノウエトタテグモ ジグモ	ヒルゲンドルフ マイマイ	15種
5 種	25種	6 種	8 種	100種

クスがついています。種子植物は今回他の植物群を選定しなかったため、単に「植物」と表示してあります。

生息・生育環境区分別：

樹林地、**草地**、**水辺**、**都市部**

生物群別：

植物、**哺乳類**、**鳥類**、**は虫類**、**両生類**、**魚類**、**昆虫類**、
クモ類、**カニ類**、**貝類**

社寺林は、丘陵地にあるものは樹林地、市街地に残存するものは都市部に含まれます。草地は比較的乾いた草地や砂礫地という意味で、水辺の湿草地は水辺に含まれます。湿地林も水辺です。水辺には河川や溜池、そのまわりの低湿地、水田、河口部の干潟や塩湿地、あるいは丘陵地の湧水湿地などさまざまな場所が含まれますが、各種がどのような場所を指標するかについては解説を参照してください。また都市部の指標種は、都市部だけに見られる、あるいは都市部に特に多い種という意味ではなく、都市部にも見られる、あるいは都市部にもまだ残存している種という意味です。そのためこれらの種の大部分は、市内の他の環境でも観察できます。

それぞれの種の解説には、種名、分類上の所属、学名(世界共通の生物名)、一言で示す特徴、どのような種でどのような環境を指標するかなどが書かれています。青枠内には、形態的特徴、分布と生態、さがすポイント、よく似た種類(一部の種のみ)、名古屋市、愛知県および全国のレッドリスト評価が示されています。※の用語は、巻末に簡単な解説がつけてあります。写真はなるべく名古屋市内で撮影したものを使いましたが、やむを得ず隣接地で撮影したものを使った場合もあります。

本書で環境指標種として選定した種の一部は、名古屋市のレッドデータブックに掲載されている希少種です。しかし大部分のものは、かなり少なくなってきましたが、それでもまだ残された自然の中で懸命に生きている種ですから、思わぬ場所で発見できるかもしれません。これらの種の観察を通して、身近な自然への関心を深め、地域の自然環境の状態や変化を把握し、人間活動と自然環境の関わりについて考えてください。

2. 各環境の概要

①市東部の丘陵地に多い樹林地

市内東部の丘陵地には、少し前まで、コナラ、アベマキなどの落葉樹やアラカシなどの常緑樹を中心とした里山の雑木林がひろがっていました。また、丘の上のやや乾燥する場所には、アカマツの林が点在していました。林の中では、春になるとコパノミツバツツジ、ミカワツツジ、ガマズミ類などの低木がたくさん花をつけました。現在では市街地化が進みましたが、それでも東山公園周辺、平和公園、猪高緑地、相生山緑地、大高緑地など、あちこちに大きな緑地が残されています。

市の北東端にある東谷山は、市内の他の丘陵地と異なり地形が急峻で、かなりリスギ、ヒノキの造林が進んでいますが、部分的にはツブラジイやカシ類からなる自然林に近い林が残されており、林の中には本来ならもっと深い山に生える植物もいくつか生育しています。

良好な樹林があるところには、ムササビ、ニホンリス等の哺乳類、アオバト、アオバズク、コゲラ、サンショウクイ、オオルリ等の鳥類、カラスアゲハ、アカシジミ、ムラサキシジミ、ヒカゲチョウ、サトキマダラヒカゲ等のチョウ類、ハルゼミ、ニイニイゼミ等のセミ類、コロギス、サトクダマキモドキ等のバッタ類、ヒラタグモ、キシダエビグモ等のクモ類がみられます。カブトムシ、カナブン、コクワガタ、ヒラタクワガタ等のコウチュウ類、オオスズメバチ、キイロスズメバチ等のスズメバチ類、コシロシタバ、マメキシタバ等のガ類など様々な昆虫類が樹液に集まってきているのも観察できます。林床では、ヒミズ、アカネズミ、キツネ等の哺乳類、ニホンアカガエル、アズマヒキガエル等の両生類、カナヘビ、ジムグリ等のは虫類、モリオカメコオロギ、ミカワオサムシ、センチコガネ等の昆虫類、イオウハシリグモ等のクモ類が観察できます。沢沿いには、サワガニががくれています。春先にはわき水がたまった場所で、カスミサンショウウオの卵塊が、見つかることもあります。



ウ類、オオスズメバチ、キイロスズメバチ等のスズメバチ類、コシロシタバ、マメキシタバ等のガ類など様々な昆虫類が樹液に集まってきているのも観察できます。林床では、ヒミズ、アカネズミ、キツネ等の哺乳類、ニホンアカガエル、アズマヒキガエル等の両生類、カナヘビ、ジムグリ等のは虫類、モリオカメコオロギ、ミカワオサムシ、センチコガネ等の昆虫類、イオウハシリグモ等のクモ類が観察できます。沢沿いには、サワガニががくれています。春先にはわき水がたまった場所で、カスミサンショウウオの卵塊が、見つかることもあります。

②市内には少ない草地

丘陵地に雑木林が続いていた時代には、ところどころに、共同の草刈り場となっているススキ草地がありました。特に土地がやせた場所は、貧弱なアカマツやオキアガリネズ、ネジキなどが生えるやせ山になっていました。谷間の水田の周りにも、小規模な草地が点在していました。そのような場所には、夏から秋にかけて、カワラナデシコ、オミナエシ、キキョウ、ワレモコウなど、たくさんの野の花が咲きました。しかし現在では市街地化が進み、残された緑地は草刈りがされなくなったために森林化が進行して、このような草地は市内ではほとんど見られなくなっています。



現在市内で草地的環境が残されているのは、庄内川、矢田川などの堤防や河川敷だけです。これらの草地にはススキ、ノアザミ、ツリガネニンジン、チガヤ、クズ等の植物が生育しており、カヤネズミ等のネズミ類、キジ、ヒバリ、ツグミ、セッカ等の鳥類、トカゲ等のは虫類、キイトトンボ、ナツアカネ、ウスバキトンボ、ホシササキリ、クサキリ、マルカメムシ、ホンハリカメムシ、カワラゴミムシ、アオゴミムシ、ミズギワゴミムシ、キアゲハ、モンシロチョウ、ウラナミシジミ等の昆虫類、コガネグモ、ハナグモ等のクモ類が見られます。しかし河川敷は、公園として整備されている場所も多く、一部はゴルフ場、自動車練習場、畑地などとしても利用



されており、動・植物が生活できる場は次第に狭くなっています。市街地を流れる天白川、山崎川等の小河川では、堤防もコンクリートで護岸され、動・植物の生活には適さない環境が増加しています。

安定した環境ではありませんが、土地造成後しばらく放置された場所も一時的に草地になります。帰化植物のアレチケツメイが群生する場所には、一時あまり見られなくなったツマグロキチョウが発生することがあります。畑地の周辺の小規模な草地にも、ニホントカゲ、カナヘビ、シマヘビ等のは虫類、オンブバッタ、マメコガネ、モンシロチョウ、キアゲハ等の昆虫類が見られます。

③様々な環境が含まれる水辺

市内を流れる河川は改修が進み、水質もかなり改善されたものの、まだ清流とは言い難い状態です。しかしそのような河川でもボラ、アユ、ウナギ、オイカワ、コイ等の魚類が見られ、カワウ、カルガモ、ゴイサギ、コサギ、カワセミ等の鳥類、カワトンボ、ハグロトンボ、イトトンボ類、ギンヤンマ、アメンボ、コオイムシ等の昆虫類、クサガメ、スッポン等のは虫類、ドブガイ、イシガイ等の貝類も生息しています。市東部の丘陵地にあるため池にもさまざまな動・植物が生活していますが、水質が悪化している上にオオクチバス（ブラックバス）、ブルーギル、ミシシッピアカミミガメ、スイレン等が放流・移入され、本来生息している種に重大な影響を及ぼしています。



庄内川河口部周辺には、干潟や塩性湿地が見られます。それらの周辺にはヨシやオギの原がひろがり、シバナ、シオクグ、ウラギク等の植物が生育しており、マガモ、カルガモ、オナガガモ、スズガモ等のカモ類、シロチドリ、ハマシギ、イソシギ等のシギ・チドリ類、ユリカモメ、ウミネコ、コアジサシ等のカモメ・アジサシ類のほか、カワウ、ヨシゴイ、ミサゴ、オオヨシリ等の鳥類、アオヤンマ、ジュウサンホシテントウ、ナカスジキョトウ等の昆虫類が見られます。ヨシ原の下に隠れている流木や転石下にはヒロクチカノコ、オカミミガイ等の貝類も生息しています。干潟にはハクセンシオマネキ、コメツキガ二等が見られます。



水田は市内南西部に残っており、コギシギシ、カワヂシャが生育しています。また、シマヘビ、ヒバカリ等のは虫類、トノサマガエル、ナゴヤダルマガエル等の両生類、アキアカネ、タンボコオロギ等の昆虫類が生息しています。

守山区、千種区、天白区の一部に残っている湧水湿地には、シラタマホシクサ、ヘビノボラズ、マメナシ、トウカイコモウセンゴケ等、東海地方に固有な湿地性植物が生育しています。ハッチョウトンボ、サラサヤンマ、コバナササキリ、ヒメタイコウチ等の昆虫類も見られ、ハンノキの樹上ではミドリシジミが飛び回っています。

④都市部の中にも残る自然

都心部ではビル、マンション等のコンクリートの高層建築物が次々と建設されています。道路は全て舗装され、土壌面が見られなくなっています。このような、動・植物の生息・生育に適した場所がほとんどない地域でも、注意して観察すると、公園、社寺林などに自然が残されています。

市内には、名城公園、鶴舞公園、白川公園等の都市公園があり、小公園も各地にあります。そのような公園では、帰化植物にまじってニホンタンポポ、シロバナタンポポ、スミレ、ヒメスミレ、アリアケスミレ、ナズナ、ハハコグサ等の草本が生育しています。ムクドリ、ヒヨドリ、カワラヒワ、ジョウビタキ、キジバト等の鳥類もみられ、ツバキの花の咲く頃には、メジロが花から花へ飛び回っています。特に名城公園は、規模が大きく歴史も古く、また石垣や堀など人が近づきにくい場所も多いため、都心部では希少な植物がいろいろ生育しています。名城公園の堀に棲むモグラは、体が大きく、特に重要です。



熱田神宮、八事興正寺、城山八幡宮などの社寺林も、市内に点在しています。クスノキ、クロガネモチ、ムクノキなどに混じってカゴノキやシロダモが見られ、林内にはウラシマソウ、アズマガヤ、フモトシダなども生育しています。また熱田神宮には、自然度の高い照葉樹林の指標となり、最近では見る機会が著しく減少しているオオゴキブリ、市内の他の場所ではほとんど観察されていないヒルゲンドルフマイマイが生息しています。



都心部はヒートアイランド化により温暖化、乾燥化が進行しており、見られる生物も少しずつ変化しています。セミ類では、湿った土地を好み以前は公園や社寺林でもよく見られたニイニイゼミは減少し、最近では乾燥に強いクマゼミが、時には街路樹に鈴なりになるくらい見られるようになっています。幼虫が街路樹のクスノキを食べるアオスジアゲハ、歩道脇や分離帯に植栽されているパンジーを食べるツマグロヒョウモンなども、都心部で増加が目立ちます。

3. 名古屋市の環境指標種

— 各種の解説 —



(守山区, 2001-9-23, 芹沢俊介 撮影)

ツブラジイ 離弁花類 プナ科 *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky

自然の林の代表種

【形態】

高さ 20 m、直径 1 m に達する常緑性の高木。葉は長さ 5~10 cm、幅 1.5~3 cm、裏側はうす茶色になる。花期は 5 月、雄花は 8~10 cm の穂につき、強い香りがある。果実は咲いた翌年の秋に熟し黒褐色で長さ 8~12 mm、短いとげのある皮に包まれる。コジイともいう。

【分布と生態】

関東地方から屋久島まで分布し、丘陵地に多い。自然林の構成種であるが、若木は萌芽力があるため、薪炭林として利用されることもある。

【さがすポイント】

丘陵地の社寺林。常緑樹なので、冬にさがすとみつけやすい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

ツブラジイは西南日本の代表的な樹木です。名古屋市の近くでは、岐阜市金華山などにツブラジイを中心とした自然の林があります。金華山の名は、ツブラジイの花が咲く時期に山全体が黄色に見えるからです。名古屋市市内でも、神社の裏山などそれなりに自然が守られてきた場所にはこの木の林があります。

シイの実は苦味がなく、食べられます。大昔の日本人にとっては、重要な食料の一つだったようです。平野部の神社などには、よく似て葉も実も大きいスタジイが植えられていることがあります。

【形態】

高さ 15 m、直径 50 cm に達する落葉性の高木。樹皮は縦に不規則に割れ、コルク層が発達する。葉は長さ 10～18 cm、幅 3～5 cm、縁には先がとげ状に伸びる鋸歯があり、裏側は毛が多くて灰白色になる。花は 4 月に咲き、雄花は長さ 8～10 cm の穂になって垂れ下がる。果実は咲いた翌年の秋に熟し、球形で直径 15～20 mm、下側に太いひげのついた皿がある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布し、朝鮮半島や中国大陸にもある。コナラとともに、愛知県の二次林*の代表樹種である。

【さがすポイント】

丘陵地のやや平坦な場所に多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>



(千種区, 2001-9-23, 芹沢俊介 撮影)

アベマキ 離弁花類 ブナ科

Quercus variabilis Blume

里山*の雑木林の王様

愛知県の里山の雑木林の中で大きく立派な木は、たいていこのアベマキです。里山の林は、一昔前まで、人間の生活と密接に結びついてきました。何十年かに 1 回木を切って燃料とし、切り株から伸びる芽を育てて、次の代の木を育てました。木が育つまでの間は、落ち葉を集めて堆肥にしました。アベマキは、そのような林の象徴です。

アベマキの実は大きな丸いドングリで、コマにするとよく回りまわります。樹皮は厚く、第二次大戦中はコルクの代用にされました。



(みよし市, 1992-4-15, 芹沢俊介 撮影)

フモトミズナラ 離弁花類 プナ科

Quercus crispula Blume var. *mongolicoides* (H. Ohba) Seriz.

氷河時代の生き残り

【形態】

高さ 15 m くらいになる落葉性の高木。葉は倒洋梨形、長さ 12~22 cm、幅 5~15 cm、短柄で縁に 10~15 の丸みを帯びた大きな鋸歯がある。花は 4 月に葉の展開と同時に咲き、雄花は穂になって垂れる。果実は初秋に熟し、長さ約 2 cm、下側にうろこのついた皿がある。

【分布と生態】

愛知県や岐阜県東濃地方の、やせた丘陵地の中腹や尾根に生育する。沢沿いにはほとんど生育しない。関東地方北部にも似たものがある。以前はモンゴリナラと呼ばれていたこともある。

【さがすポイント】

右の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外）

愛知県や岐阜県東濃地方の丘陵地には、他の地方では見られない特徴的な植物がいくつか生育しています。その一つがフモトミズナラです。高さ 1,000 m 以上の山地に生えるミズナラの一型で、昔地球が寒かった時代に山から下りてきたものが、形を少し変えて現在まで生き残っているのです。

愛知県では瀬戸市を中心に豊田市西部から日進市、春日井市に多く、名古屋市守山区まで見られます。若芽は黄緑色で、この時期には遠くから見ても若芽が白緑色のコナラとは区別できます。



(尾張旭市, 2001-4-14, 村松正雄 撮影)

コバノミツバツツジ 合併花類 ツツジ科

Rhododendron reticulatum D. Don

春の丘陵地を飾る紅紫色のツツジ

【形態】

高さ 2~3 m の落葉性低木。葉は枝先に 3 枚ずつつき、卵形、長さ 3~5 cm、幅 2~3 cm、裏面は網目状の細脈が目立つ。花は 3 月末~4 月に、葉が伸びる前に咲き、一つの芽に 1~2 個つき、紅紫色、漏斗形で直径 3 cm くらい、先は 5 つに分かれ、上側内面に濃色の斑点がある。おしべは 10 本で、長短がある。

【分布と生態】

東海地方から九州北部にかけて分布。

【さがすポイント】

愛知県の丘陵地では最も目につくツツジである。林縁や明るくまばらな林内ではよく花をつけるが、林が茂るとあまり咲かなくなってしまう。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

名古屋市やその周辺の丘陵地は、一昔前までは大きな木はほとんど生えていませんでした。そして春先には、山全体がピンクになるくらい、たくさんのツツジが咲きました。そのツツジが、コバノミツバツツジです。現在でもあちこちに咲いていますが、里山*の森林化が進んだため、昔に比べればずいぶん少なくなりました。

「山、高さをもって貴からず、木あるをもって尊し」と言います。しかし、木がありすぎることによって失われる自然もあります。



(名東区, 2004-4-1, 近藤洋一朗 撮影)

【形態】

多年生草本。茎は春先には短い、夏には高さ 30 cm くらいにまで伸びる。葉は花期にはハート形で長さ 1.5~3.5 cm、夏に出る葉は三角状で長さ 3~4 cm。花期は 4~5 月、花はやや濃い紫色で中心部は白く、通常芳香がある。花弁は比較的幅が広く、長さ 12~15 mm、下弁には長さ 6~7 mm の距がある。花柄には短毛が密生することが多い。

【分布と生態】

北海道の西南部から九州にかけて分布する日本固有種。山地や丘陵の林縁、草地など、明るい場所に生える。

【さぐすポイント】

雑木林のヘリなどに多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

ニオイタチツボスミレ 離弁花類 スミレ科

Viola obtusa (Makino) Makino

山路にゆかしい紫のスミレ

ニオイタチツボスミレは、名古屋市の丘陵地で見られるスミレの代表です。

スミレの仲間には、大きく分けて葉や花が根元から束になって出る無茎類と、地上茎が伸びる有茎類があります。ニオイタチツボスミレは有茎類です。一方、集落の中や田畑のまわりには、無茎類のスミレ、ヒメスミレ、アリアケスミレなどが多く見られます。それぞれの種類がどのような場所に生えているか、しっかり観察してみましょう。



地上で目撃された死亡個体（名東区明徳池緑地, 2008-4-1, 小木曾学 撮影）

ヒミズ トガリ(モグラ)目 モグラ科

Urotrichus talpoides Temminck

黒い毛の小型のモグラ

【形態】

成熟した個体は体重 26 g、頭胴長 104 mm、尾長 38 mm 程度になる小型のモグラである。体毛は背面が黒く、尾は頭胴の 1/3 程度の棍棒状で剛毛が生え、吻部が突出し、眼球はごま粒大である。

【分布と生態】

本州、四国、九州、淡路島、隠岐諸島などに生息する日本固有種である。低山帯の草原から 1,000 m 程度の山地や丘陵地の広葉樹林*に生息し、半地下性で、昆虫類、ミミズ類、種子を食べる。

【さがすポイント】

コウベモグラより二まわり小さい坑道が生活空間として利用されている。直径 3 cm 程度の坑道を見つけるとよい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧 I B 類（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

ヒミズは千種区（東山の森）、名東区（猪高緑地）、守山区（上志段味、下志段味）の丘陵地や平地林で生息が確認されています。今回の調査で新たな生息地として明徳池緑地で確認されました。

ヒミズが生息できる環境は腐植土が比較的厚く、さまざまな昆虫や土壌動物がいます。しかしながら守山区の平地林や田畑の開発が進み、宅地化されている現状では、東谷山地域を除くと生息が危ぶまれます。平地林、丘陵地、里山*の保全がますます大事になっています。

コラム：名古屋城のお堀のモグラ

地球上にはモグラ科に分類される種が40種程生息しているといわれています。そのうち、日本には地下生活型のモグラ亜科6種（ミスラモグラ、サドモグラ、エチゴモグラ、アズマモグラ、コウベモグラ、センカクモグラ）と、半地下生活型のヒミズ亜科2種（ヒミズ、ヒメヒミズ）の4属8種（阿部 2005）が分布しています。北海道にはモグラはいませんが、日本はモグラ

においてホットスポットの島といえます。モグラ亜科で分布域が広い種を挙げると、静岡県、長野県南部、岐阜県西濃、石川県嶺南を境とする西日本全域と東海地域の平野部にコウベモグラが、東北部全域にアズマモグラが分布しています。西南部でも紀伊半島南部や山地にはパッチ状にアズマモグラがいます。



市街地に島状となって残る名古屋城の緑地(北側の名城公園を除く南北約760m、東西約1350mが調査対象)(名古屋市 提供)

愛知県ではコウベモグラが優占しますが、三河山間部ではアズマモグラもみられます。

名古屋市内は前頁のヒミズ（東山の森、猪高緑地、明德池緑地、上志段味、下志段味）とコウベモグラ（牧野が池緑地、東山の森、東谷山、名古屋城の外堀、内堀）の生息が確認されています。レッドデータブックなごや2004には掲載されなかったコウベモグラですが、文献調査や実地調査の結果に加え、生息域の分断がすすんでいる（上図）ことが考慮され、名古屋市版レッドリスト2010に新しく掲載されました。名古屋は2010年で開府400年ですから、周辺市町村の個体群とはかなり長い年月を隔離されて生息していることになります。

現地へ赴くと名古屋城の内堀や外堀、その斜面周辺にモグラ塚をみることができます（次頁右図）。愛知学院大学の植松先生は2002年5月

に名古屋城の外堀（水は無く、雑草地）で、雄4個体、雌5個体を捕獲しました（下図）。これらのコウベモグラを計測した結果、大きい個体で体重195.3g、頭胴長185.7mm、尾長25.0mm、後足長23.7mm、前足幅25.0mm、頭骨全長43.1mm、下顎長27.9mmでした。平均値で



コウベモグラが利用した穴(上)とモグラ塚(下)
(名古屋城内堀, 2009-12-26, 織田鉄一 撮影)

みても、今まで日本で捕獲された中で最大の個体群であった上伊那産のコウベモグラよりも大きく、最も大きなコウベモグラということになりました。名古屋城のコウベモグラ個体群は、周辺が市街化されたために、ほぼ完全に隔離された状態にあるため、愛知県のレッドデータブック2009では地域個体群としてリストに掲載されています。名古屋市内の他の地域（例えば牧野が池緑地、東山の森）では捕獲できていないため、まだ比較対照ができていません。一般的に哺乳類の島集団は、シカのような中大大型動物は小型化し、ネズミ類のような小型動物は大型化することが知られています。このような現象が起こる理由はよくわかりませんが、東京の皇居内で捕獲されたアズマモグラについても周辺個体と比べて大型であることが



腹側が繁殖期を示す黄色になったコウベモグラの捕獲個体 雌
(名古屋城外堀, 2002-5-23, 植松 康 撮影)

報告されています。イギリスのエジンバラ域内に生息するモリアカネズミも大型化が報告されており、レッドリストに掲載されています。名古屋城のコウベモグラは、お城に生息する個体群がレッドリストに掲載された、世界でも2例目ということになります。



自動カメラのフラッシュ光で反射し目が白く見える（守山区竜泉寺, 2006-8-31, 名和 明 撮影）

アカネズミ 齧歯(ネズミ)目 ネズミ科

Apodemus speciosus (Temminck)

オレンジ色の美しい精悍なネズミ

【形態】

体重 20～50 g、頭胴長 90～120 mm、尾長 80～110 mm。尾は頭胴と同じかやや短い。成長すると背面の毛はオレンジ色になる。腹面は白い。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州とそれらの属島に分布し、最南端はトカラ列島の中之島。広葉樹林やススキなどの背の高いイネ科の草地にみられる。年に2回、春と秋～初冬に仔を産む。草の種子、ドングリ、蛾の幼虫やクモを食べる。

【さがすポイント】

河川敷、雑草地、林縁部に生息するが夜行性で目視は困難。無人ビデオによる撮影などの観察がのぞましい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類<愛知県：リスト外、全国：リスト外>

アカネズミは、市内では庄内川の河川敷、守山区小幡緑地、千種区の東山の森など、ススキの草地や、コナラなどの広葉樹林*などに生息しています。これらの緑地は、ネズミに食物や繁殖場所を提供し、さらにネズミを食べるイタチなどの捕食者の生活も支えます。アカネズミはドングリを運ぶ植林者です。かれらが生活できる緑地は、都市の中では比較的良い自然が残された場所です。しかし名古屋市では緑地が市街地に囲まれ、分離と隔離がすすんでおり、将来アカネズミは姿を消してしまう危険があります。



給餌台のニホンリス（守山区東谷山, 2010-5-16, 守山リス研究会 撮影）

ニホンリス 齧齒(ネズミ)目 リス科 *Sciurus lis* Temminck

松などの木にフットボール大の巣をかける

【形態】

体重 250～310 g、頭胴長 16～22 cm、尾長 14～17 cm。背面の毛は褐色である。

【分布と生態】

本州、四国、九州、淡路島に分布する。広葉樹林やマツ林にみられ、昼行性である。アカマツなどの樹上に枝を用いて、フットボールくらいの大きさの巣をかける。春から秋にかけて 1～2 回、2～6 頭の仔を産む。ドングリや松などの木の実、キノコ、昆虫などを食べる。

【さがすポイント】

松かさの食痕跡（エビフライ）、または巣を見つけて生息を確認するようにしたい。驚かすようなことは厳禁。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠA類（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

ニホンリスは、市内では緑区（大高緑地、齋山）、守山区（小幡緑地、大森緑地、八竜緑地、東谷山、森林公園）のみで見られます。しかし東谷山を除けば極めて少数が生息しているだけです。

ドングリやマツなどの木の実を食べますが、その食べあとは独特で、松の球果（マツボックリ）は、エビフライのような形になります。また、オニグルミは殻を半分に割って中身を食べるので、半分に割れた殻が地面に落ちています。リスの生活には木の実のなる広い面積の林が必要です。今ある林を大切にしたいものです。



人工箱から外をのぞくムササビ（守山区東谷山, 2010-5-16, 守山リス研究会 撮影）

ムササビ 齧歯(ネズミ)目 リス科

Petaurista leucogenys (Temminck)

杉やシイの大木の幹などに巣穴がある

【形態】

体重 700~1500 g、頭胴長 27~49 cm、尾長 28~41 cm。飛膜が前後の脚と尾の間にあり、木の間を滑空する。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。杉やシイなどの大木のある林に棲み、これらの大木の幹に孔をあけ巣を作る。あるいは神社の屋根裏の板に孔をあけ、棲みつく。夜行性である。木の芽、葉、花、果実やドングリ、松の実を食べる。春と秋に 1~4 頭の仔を産む。

【さがすポイント】

社寺林の森や寺社の建物の壁に注目。直径 8 cm くらいの穴をみつけたら、懐中電灯を持って夜を待つとよい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧 I A 類（愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外）

ムササビは、市内では守山区の東谷山にだけみられます。しかし昭和 6 年頃まで中川区の庄内川堤防の松林にムササビが生息していたので、かつてはもっと広い地域にいたようです。彼らの生息地は、杉やシイなどの大木のある、広い面積の広葉樹林です。日没後に巣を出て、木から木へ飛び回り移動します。その後食事をし、日の出少し前に巣に戻ります。ギャーギャーとか、グルグルッと鳴きます。東谷山の集団を絶滅させないような手だてが必要です。



(西区庄内緑地, 2007-3-2, 後藤悠輔 撮影)

オオタカ タカ目 タカ科

Accipiter gentilis (Linnaeus)

里山*の生態系の頂点に立つ

【形態】

全長 50~57 cm。雌が雄より大きい。成鳥の背面は暗い灰色で、目から後方は黒く、白い眉斑が目立つ。腹面は白地に黒く細い横縞模様があり、尾には上下面とも黒っぽい4本の横帯がある。若鳥は背面が褐色で、腹面は淡褐色地に黒褐色の縦斑がある。

【分布と生態】

本州以北の低地から山地の林で繁殖し、秋冬には人里近くにも姿を見せる。

【さがすポイント】

ハト、ムクドリなどが捕らえやすい林縁部を飛ぶ姿。

【よく似た種類】

ほぼ同大のサシバ、ハチクマは翼が長く、尾が短め。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：準絶滅危惧、全国：準絶滅危惧）

オオタカはタカの中のタカともいえる精悍な鳥で、古来“鷹狩り”の主役を演じてきました。山に棲むイヌワシやクマタカと違って人里に棲む鳥なので、最近都市周辺での道路建設計画等がこの鳥のすみかを壊さないかよく話題になります。生き物の世界は、食う者と食われる者との複雑な関係（食物連鎖）で成り立っているのです。その頂点に立つタカが棲んでいることは、そこに豊かな自然がある証拠なのです。市内で見られるのは主に秋冬ですが、東部にはまだ少し繁殖環境が残っています。



雌 (昭和三十二年鶴舞公園, 2009-10-13, 後藤悠輔 撮影)

コゲラ キツツキ目 キツツキ科 *Dendrocopos kizuki* (Temminck)

スズメくらいのかわいいキツツキ

【形態】

全長 14~16 cm。背と翼の上面は黒褐色と白の横縞模様。頭部と尾も黒褐色。顔には白い過眼線と顎線があり、雄には側頭後部に小さな赤い点がある(見えないこともある)。腹面は汚白色で、胸部と脇に褐色の縦斑がある。

【分布と生態】

全国の低山や山麓の林に生息し、大きな移動はしない。5~6月頃枯れ木に袋状の孔を掘って繁殖する。地面近くから木の幹をらせん状に登って、小昆虫やクモを食べる。翼を羽ばたいてはたんで、深い波形を描いて飛ぶ。

【さがすポイント】

林や人家近くの立木でギー、キツキツと鳴く声を聞いたら木の幹を探す。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

木の幹に縦にとりつき、両脚と尾羽で体を支えて、嘴で虫をあさりながら昇っていく姿はキツツキ独特のもので。

じっとしていると、目の前で熱心につつく動作を見せてくれることもあります。昔は冬だけ都会へ下りてくる郊外の鳥でしたが、最近はそのまま居着いて都会の林で子育てをするものも出てきました。名古屋市の東部4区のほか、昭和三十二年、熱田区、北区にも近年繁殖記録があります。巣孔に出入りしている親鳥を見かけたら、少し離れて短時間だけそっと観察してください。



(千種区平和公園, 2008-3-6, 後藤悠輔 撮影)

エナガ スズメ目 エナガ科 *Aegithalos caudatus* (Linnaeus)

綿のかたまりに柄をつけたような

【形態】

全長 12~15 cm。体は小さく尾が長い。過眼線が太く黒い。頭上、頬、胸~腹は白い。背は中央が黒く、左右は淡い赤紫色。翼は黒と白、尾は中央が黒く左右が白い。

【分布と生態】

九州以北の低地~低山の林に広く生息し、繁殖する。ヒナの巣立ち後は数羽~数十羽の群れをなし、秋冬にはカラ類やコゲラ、メジロなどと混群をなすことが多い。人をあまり恐れず、じっとしているとすぐ近くまで来ることもある。チーチーチー、ジュリリ、ジュリリと鳴く。

【さがすポイント】

木の葉が舞うように、枝先を飛び回って餌を探る。鳴き声で気付くことも。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、全国：リスト外

体重が 7.5 g くらい (スズメの約 1/3) しかなく、ひとちぎりの綿に細い羽の柄を付けたような鳥です。繁殖期以外はいつも群れをなし、枝先にぶら下がったり、垂直の幹にとりついたりして、小昆虫やクモを捕りながら、にぎやかに枝移りしていきます。巣は子供の頭くらいある長球形で、表面にクモの糸を使ってウメノキゴケを張り付けた精巧なものです。春、尾の先が曲がっているエナガを見たら、狭い巣の中で抱卵していた証拠です。市内ほぼ全域に生息していますが、西部には少ないようです。



卵塊 (豊田市, 2003-3, 山上将史 撮影)
左上:成体 (豊田市, 2004-3, 山上将史 撮影)

カスミサンショウウオ 有尾目 サンショウウオ科 *Hinobius nebulosus* (Temminck et Schlegel)

ひっそり消えつつある林の住人

【形態】

体長 80~130 mm。黄褐色~暗褐色で淡黒色の微小な斑点がある場合もある。尾の上側に黄色のすじがあることが多い。

【分布と生態】

愛知県以西の本州、四国、九州に分布し、山麓部~低山地に生息する。生態は右の説明参照。小型サンショウウオは移動力が小さく、地域ごとに多くの種に分化している。愛知県の本種は最近までは関東地方などに分布するトウキョウサンショウウオの一型だと思われていた。

【さがすポイント】

早春に卵囊を探す。それ以外の時期は偶然発見できるだけである。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠA類（愛知県：絶滅危惧ⅠB類、全国：絶滅危惧Ⅱ類）

サンショウウオというと大型のオオサンショウウオを思い浮かべる人が多いのですが、本種は体長 10 cm ほどの小型の種類です。いつもは樹林の中の朽ち木や石の下などで生活してほとんど目にすることはありませんが、早春産卵のために丘陵地の湧き水のある水たまりに集まってきて、バナナ形をした透明な 10 cm ほどの卵囊を産みます。

名古屋では東部丘陵地のところどころにいたのですが、開発により激減し、今ではほとんど見られなくなりました。



(豊田市, 2000-3-26, 山上将史 撮影)

アズマヒキガエル 無尾目 ヒキガエル科

Bufo japonica formosus Boulenger

人里から消えた哲学者

【形態】

体長 80～160 mm。手足は短く、頭が大きい。体色は茶褐色、黄土色、黒斑があるものなどさまざまである。

【分布と生態】

広い意味のヒキガエルは本州、四国、九州に分布するが、西日本のものと東日本のものは少し違って、名古屋を含む東日本のものはアズマヒキガエルという。人里から高山までさまざまな場所に生息している。繁殖期には多くの個体が集まり、その様子はカエル合戦と呼ばれる。後頭部の耳腺から毒液を出す、人間から危害を加えない限り危険はない。

【さがすポイント】

右の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

日本に昔からいたカエルの中で最も大きくなるのが、このヒキガエルです。ちょっとグロテスクなようですが、よく見ると鼻が丸く、とても温かな顔です。カエルなのにほとんど跳ねず、繁殖期以外は陸で暮らし、夜になると出てきて昆虫などを食べます。

両生類が生きていくためには、水と陸の調和のとれた環境が必要です。本種は早春に古寺の池などに集まり産卵しますが、最近はそのような場所が少なくなり、産卵場所に行くまでの交通事故も増加して、人里ではほとんど見られなくなりました。



(豊川市, 2002-10-17, 岡田正哉 撮影)

オオカマキリ カマキリ目 カマキリ科 *Tenodera aridifolia* Stöll

鎌(カマ)のような大きな前脚を振り上げる

【形態】

体長は雌 75~95 mm、雄 68~90 mm。
体色は焦げ茶色からうす茶色~緑色であり、顔は逆三角形である。複眼は大きく、体色と同じ色であるが、夜間は黒色になる。中脚と後脚は細長く、歩くのに適した形になっている。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州、小笠原諸島に分布する。

普段は草木に紛れて身を隠し、獲物が近寄るのを待っているが、空腹になると獲物を探して活発に歩き回る。

【さがすポイント】

雑木林の周辺の道沿いの草地や、林縁のマント群落*の植物上によく見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外<愛知県：リスト外、全国：リスト外>

市内では、平和公園(千種区)、小幡緑地、東谷山(守山区)、大高緑地(緑区)等、北部から東部の丘陵地で、里山*的な明るい雑木林とその周辺を好みますが、河川敷の林などにも見られます。

肉食性で、各種の昆虫類を捕食します。交尾中の雌が、相手の雄の頭部や胸部を食べてしまうこともあります。

本種は、昆虫食物連鎖の上位にいます。本種の多い所は、餌となる各種昆虫類も多い所であり、生態系としても良好な環境といえます。



(豊田市, 1985-7, 岡田正哉 撮影)

コロギス バッタ目 コロギス科

Protopogryllacris japonica (Matsumura et Shiraki)

夜間、長い触角を振りながら樹幹を歩いていたら…

【形態】

体長は雌 30~36 mm、雄 31~36 mm。
体は全体に淡い緑色で、畳んだ翅の背面は褐色である。顔は大きく大顎は頑丈で、触角は体長の4倍程度はある。雌には長く(20~25 mm)ゆるやかに上方に反る産卵管がある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。
草や木の葉を囓って切れ目を入れ、これを口から吐き出した糸で綴って巣を造り、昼間はこの中に隠れている。

【さがすポイント】

広葉樹主体の雑木林の林縁を注意して巣を探す。成虫は夜行性のため、夜間灯火をつけて林を見回る。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

平和公園(千種区)、東谷山(守山区)等市内の北部から東部の丘陵地の広葉樹林*で見られます。

木の上に棲む昆虫ですが、密生した森林よりも、里山*的な一定程度の空間をもった広葉樹林を好みます。

肉食性で、主に夜間に活動し、他の昆虫類を捕らえて食べますが、樹液や果実等も好みます。

コロギスの多い環境は、その獲物となる各種昆虫類にとっても良好な環境であり、またそうした環境がずっと続いてきたことを示しています。



(千種区平和公園, 1995-8, 岡田正哉 撮影)

【形態】

体長20～26mm、翅端まで32～40mm。体は主に緑褐色で、黒色の斑紋があり、淡黄色の微毛でおおわれる。前翅には暗褐色の雲状紋がある。後翅は黒色、外縁は無色透明である。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州、奄美大島、沖縄本島等に分布する。以前は各地の平地や市街地に普通であり、果樹園で大発生する事もあったが、市街地では少なくなった。小型のセミでアブラゼミより少し早く6月下旬から8月に見られる。

【さがすポイント】

公園や緑地の樹上を鳴き声で探す。市東部丘陵には多く、夜間灯火にもよく飛来する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外<愛知県：リスト外、全国：リスト外>

ニイニイゼミ カメムシ目 セミ科
Platypleura kaempferi (Fabricius)

夏便りの使者

梅雨が明ける頃、チーチーと連続して静かに鳴き、セミの中ではあまり目立たない種です。市内の残された小さな林でも発生していますが、近年いつのまにかその姿を見るのが少なくなりました。少なくなった理由として、発生場所の地表の乾燥化とともに、近年市街地で増加したクマゼミとの競合関係も考えられます。今でもニイニイゼミがよく見られる場所は、比較的大規模な緑地公園など、市街化による影響をあまり受けていない、豊かな樹林のある場所といえます。



(豊田市猿投山, 1982-2-25, 岡田正哉 撮影)

マイマイカブリ コウチュウ目 オサムシ科 *Damaster blaptoides* Kollar

孤独な、林を漂う虫

【形態】

体長 26～65 mm。体は非常に細長い。大あごは長く、頭部、前胸背板は細長く上翅は楕円形に強くふくらむ。頭部と前胸背版の色は産地により変異があり、上翅は光沢のない黒色であることが多い。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州、主要な島嶼に分布し、平地から高山まで広い範囲で見られる。後翅が退化して飛ぶことができないので、地表を歩き回って餌を探す。幼虫もカタツムリだけを食べて成長する。

【さがすポイント】

鎮守の森や緑地などの、ある程度湿度のある森林の日陰の地表に見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、全国：リスト外

餌であるカタツムリの殻に頭部を突っ込んでいる姿から、この名前が付けられました。以前は市内の至るところで見られましたが、カタツムリの減少、森林の減少などの環境変化によって減少しました。地域ごとの体形の変化に加え、藍色から緑色に変化する体色は見事ですが、名古屋周辺では黒く目立たない個体ばかりです。

名古屋市内では、マイマイカブリの見られる落葉や下草の豊富な良好な環境の森は、めっきり少なくなりました。今では、残された林に細々と生活しています。



(千種区平和公園, 1996-8-19, 岡田正哉 撮影)

オオスズメバチ ハチ目 スズメバチ科

Vespa mandarinia japonica Radoszkowski

暴れ者ではあるが、自然の警告者

【形態】

体長は雌 40~45 mm、雄 27~40 mm、働きバチ 27~38 mm。日本産のハチでは最大の種である。頭部は黄色、胸部は黒色、腹部は黄色と黒色が交互に現れる。

【分布と生態】

日本全域に分布し、台湾、中国からインドまで見られる。5月~11月頃活動し、比較的大きな昆虫類を餌としている。時にミツバチの巣を襲うことがある。樹液にもよく集まり、他の昆虫類を追い払って独占しようとする。巣は、土の中や木の洞に造り、働きバチが多いときには、1,000頭以上いることもある。

【さがすポイント】

コナラやアベマキの樹液に集まる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

オオスズメバチは、日本で最も大きく攻撃性もあり、毒性も強い黒と黄色の縞模様をしたハチです。刺されると大変で、人によっては死の危険があります。巣に近づいたり壊したりして怒らせないようにしなければなりません。このように強いハチでも、餌となるチョウやガなどの幼虫、樹液の出る落葉広葉樹などの減少のため徐々に少なくなっています。

彼らが生きて行くためには、豊富な餌、そして巣の材料となる木の皮などが容易に集められる、緑豊かな環境が必要です。



雌（千種区平和公園，2004-1-4，田中多喜彦 撮影）

ムラサキシジミ チョウ目 シジミチョウ科 *Narathura japonica* (Murray)

薄暗い照葉樹林*で青く光る宝石

【形態】

前翅長 16～18 mm、雄雌とも裏面は濃褐色で斑紋は同じ。翅表の藍色部の形は雄雌で異なり、雌では外縁の黒帯は幅広く、上方で中室端に接する。雄の藍色部は雌よりも紫色を帯びる。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。南方系の種類で東北地方ではまれ。成虫で越冬し、第1化は5月下旬頃発生、10月までに年3化程度を繰り返す。幼虫はアラカシ、イチイガシなどの常緑性ブナ科の樹木を主に食べ、クヌギやコナラなども食べる。

【さがすポイント】

鎮守の森などの社寺林や、市東部の緑地の林内に棲む。訪花性は弱い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、
全国：リスト外

平和公園（千種区）、東谷山（守山区）等の東部丘陵の森の林内や林縁に多いのですが、市街地でも名古屋城付近や中村公園などの森には発生します。照葉樹林的な環境を代表するチョウの1つです。

昼間はカシ類などの葉上に静止していることが多く、夕刻にやや活発に活動します。

写真のように、越冬個体は、厳冬期でも暖かい日は活動し、翅を広げて日光浴をすることがあります。また越冬前後にはキク科やアブラナ科などの花で吸蜜することもあります。



(千種区平和公園, 2004-10-16, 田中多喜彦 撮影)

テングチョウ チョウ目 テングチョウ科

Libythea lepita Moore

チョウの「生きている化石」

【形態】

前翅長 22~26 mm。特徴のある翅型と橙色紋をもつ。下唇鬚（しゅ）が長く突き出しテングチョウの和名があるが、その機能はよく分かっていない。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布し、低山地の広葉樹林とその周辺に好んで生息している。通常年 1 化で、5 月下旬から 6 月に出現して夏眠、秋に活動して再び冬眠、翌春交尾産卵して長い一生を終える。食樹はエノキで、ゴマダラチョウと競合する。

【さがすポイント】

初夏の新成虫は、道路の湿地でよく吸水し汚物にも来る。最もよく見られるのは春の越冬成虫で、雑木林の林縁を飛び回る。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、全国：リスト外

テングチョウの仲間は世界に広く分布しますが、系統的に古いものと考えられ、北米の第三紀層から化石がでています。タテハチョウ科に含めることもあります。

市東部丘陵の雑木林の里山*的な環境に多いですが、市街地でも食樹のエノキのある熱田神宮や名古屋城周辺の森には、現在でも生息しています。

越冬前には写真のようにキクやヒヨドリバナなどの白い花でよく吸蜜します。越冬後の成虫はアブラナ、レンゲ、ウメなどさまざまな花に来ます。



(千種区平和公園, 2010-5-25, 田中多喜彦 撮影)

サトキマダラヒカゲ チョウ目 ジャノメチョウ科 *Neope goschkevitschii* Ménétrières

森の酒場の常連客

【形態】

前翅長 26~39 mm。翅の地色は黄褐色で黄色斑がある。一見ヒョウモンチョウ類に似るが、斑紋が異なる。近似種のヤマキマダラヒカゲとは、翅の裏面の地色や眼状紋の形等で区別できる。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布する。平地から低山地の雑木林に生息し、夕方活発に飛翔する。5~6月に春型、7~8月に夏型が発生する。幼虫はササ類のメダケ、ネザサ等を食草としている。

【さがすポイント】

里山*的環境を代表する種で、雑木林のコナラ、アベマキの樹液や腐果に集まるが、花にはあまり訪れない。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

東山公園をはじめ東部丘陵地に残る雑木林の樹液が出て甘酸っぱい発酵臭を漂わせている所では、まだこの地味で複雑な模様のジャノメチョウを発見することができます。この様な所は、しばしばスズメバチ、クワガタムシ、カブトムシ、カナブンと一緒にいて、それぞれに吸汁に余念がありません。

このチョウの生息条件は、成虫の食物の樹液と、幼虫の食草であるイネ科メダケ属の植物がセットになっている場所です。この環境の微妙なバランスの場所に限って生息しているのです。



(豊門市沓掛町, 2002-5-5, 緒方清人 撮影)

サツマノミダマシ クモ目 コガネグモ科

Neosucona scyllioides (Bösenberg et Strand)

黄緑色の、美しいクモ

【形態】

体長は雌9~11mm、雄8~9mm。背甲は褐色。腹部は背面から両側下面にかけて緑色。腹背前方から側方にかけて黄緑色の線がある。歩脚は黄褐色で各節末端は赤褐色。

【分布と生態】

本州から南西諸島まで広く分布。山林や丘陵地の林などに生息する。夜間に30cmほどの円網を張り、網の中心部にとまっている。朝に網をたたみ、昼間は葉上に潜んでいる。曇天の日には昼間でも網にいるときがある。

【さがすポイント】

昼間は葉の中に隠れているので、空の円網があれば周囲を探す。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

黄緑色の美しいクモで、夏に成体になります。名はサツマ（ハゼ）の実に体色が似ているためで、ちょうどこの頃、ハゼの実も大きくなります。このクモは夜行性で、夕方から網を張りますが、昼間は植物の葉に隠れています。林縁部を注意して歩けば、たいてい見つけることができます。

サツマノミダマシを見かけたら、多くの小動物が生きているということです。東部地域の小幡緑地、東谷山周辺、大高緑地、平和公園などでは個体数が多く、よく本種に出会えます。



(緑区, 2000-7-30, 緒方清人 撮影)

トリノフンダマシ クモ目 コガネグモ科

Cyrtarachne bufo (Bösenberg et Strand)

鳥の糞に似ているので名がついた

【形態】

体長は雌 8~12 mm、雄 1~2 mm。雄は極端に小さい。雌は背甲・歩脚・腹部ともに黄白色、腹部前方のみ灰褐色で、両肩に浅い隆起があり、その周縁は白線でふちどられる。雄は全体に赤褐色。

【分布と生態】

本州から南西諸島まで広く分布。山林や丘陵地の林など、比較的明るい場所に生息する。昼間は大型草本類や樹木の葉裏に身を隠し、夜間に同心円網を張る。

【さがすポイント】

昼間は葉裏に隠れているので、下から覗くようにして探す。ススキを好むので特に注意。1 cm ぐらいの白っぽいクモを見つけたら本種。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外）

トリノフンダマシは夏に成体になります。夜間、雌は8時ごろから同心円網を張り始めます。横糸の粘着力は強力で、ガヤバツタなどかなり大きな昆虫もひっかかります。網は夜明けまでにはたたんでしまい、昼間は葉裏に静止しています。成体になった雄は自分の網は張らず、雌の網に侵入し交接の機会をうかがっています。名は、雌の体色が鳥の糞に似ていることからつけました。市内での生息地域は限られていて、主に東部地域の東谷山周辺、小幡緑地、平和公園、大高緑地などで見られます。



(清須市, 2003-5-3, 芹沢俊介 撮影)

【形態】

多年生草本。茎は1~数本が束生し、まばらに枝を分けて、高さ50~100cmになる。茎の基の葉は羽状に深く切れ込み、長さ13~20cm、表面に毛があり、辺縁には鋭い刺があって触れると痛い。茎につく葉は基部で茎を包む。花期は5~6月、頭花は枝の先端に上向きにつき、紅紫色で直径4~5cm、総苞は幅約2cm、総苞片は細くて6~7列に並び、さわると粘る。

【分布と生態】

本州から九州に分布し、土手などの草地に多い。

【さがすポイント】

アザミ類には多数の種があるが、春から初夏にかけて咲くのはこの種だけである。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

ノアザミ 合弁花類 キク科

Cirsium japonicum DC.

初夏の野に咲く紅紫色のアザミ

日本列島のアザミは、たくさんの種類に分かれています。アザミの種類をきちんと見分けるのは、とても困難です。しかし、大部分のアザミは秋に咲きます。春~初夏の、日当たりのよい土手に赤い花を咲かせているアザミは、この種だけです。

ノアザミのような多年生の草党性植物は、しばしば土地が掘り返されるような場所では生きていけません。土地そのものは安定していて、しかも時々草刈りが行われる場所が、ノアザミの好きな場所です。

【形態】

多年生草本。根茎は、地中を長くはう。茎は、高さ30～70 cm、基部に枯れた葉が残る。葉は茎の下部につき、線形、長さ20～50 cm、幅7～12 mmである。花期は5～6月、花序は長さ10～20 cm、小穂は長さ約4 mm、基部に白色の長毛がある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布し、日本全土のほか、アジア、オーストラリア、アフリカに広く分布し、北アメリカにも帰化している。日当たりのよい草地にはえる。

【さがすポイント】

河川の堤防などやや乾いた場所に多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外〈愛知県：リスト外、全国：リスト外〉



(守山区, 2003-6-6, 近藤洋一朗 撮影)

チガヤ 単子葉類 イネ科

Imperata cylindrica (L.) Beauv.

初夏の野原に並ぶ白い穂

道ばたに咲く春の花は多いのですが、もう少し自然度の高い草地に咲き、しかもあちこちで見かけるものとなると、春の花はそれほど多くありません。ここではノアザミのほかにもう一つ、チガヤをとりあげてみました。

チガヤはイネ科の植物ですが、白い毛におおわれた穂は似たものがなく、誰でもすぐ見分けられるでしょう。若い穂は甘味があり、ツバナと呼ばれます。



(大治町, 1996-10-1, 芹沢俊介 撮影)

クズ 離弁花類 マメ科 *Pueraria lobata* (Willd.) Ohwi

大きな3枚葉のつる植物

【形態】

大型のつる植物。茎は長さ 10 m に達する。葉は長さ 12~20 cm の柄があり、3 小葉に分かれ、長さとともに 10~18 cm、裏面は白色を帯びる。花期は 8~9 月、葉のもとから出た柄の先に、紅色の花が多数つく。果実は扁平で長さ 6~8 cm、さやには褐色の毛が多い。

【分布と生態】

北海道から九州、アジア南東部に広く分布し、北アメリカにも帰化している。林縁や土手などに繁茂する。

【さがすポイント】

丘陵地の林縁部、河川敷の荒野などに多く見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

秋の七草の一つ。地下には太い根があって多量のでんぷんを蓄えています。そのでんぷんで作るのが本物のくず餅です。

よく見れば水墨画のような風情のある花ですが、とにかく豪快につるを伸ばして草地を覆ってしまいますから、どちらかといえば嫌われ者です。しかしそんなクズも、繰り返す草刈りが行われる昔の草地ではそれほど茂れませんでした。しばしば土地が掘り返される都市域でも生きていくことができません。クズの天下となるのは、適度に放置されている草地です。

【形 態】

多年生草本。太い根茎がある。茎は高さ 40~100 cm になり、切ると白い乳液が出る。茎葉は卵状楕円形~披針形*、長さ 4~8 cm、3~4 枚が輪状につく。花期は 8~10 月、茎の上部の枝の先に、1~数個ずつ花をつける。花は淡紫色で鐘形、長さ 15~20 mm、先は 5 裂し、裂片は 3 角形でやや反り返る。花柱は花から少し突き出す。

【分布と生態】

北海道から九州に生育し、南千島、サハリンにも分布する。土手などの日当たりのよい草地に多く見られる。

【さがすポイント】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>



(名東区, 2001-9-9, 芹沢俊介 撮影)

ツリガネニンジン 合弁花類 キキョウ科

Adenophora triphylla (Thunb.) A. DC. var. *japonica* (Regel) H. Hara

薄紫色のベルをたくさんつける

一昔前まで、丘陵地の谷戸田*のまわりには必ず小規模な草地がありました。農家の人たちは毎年草を刈って家畜の餌や堆肥にしました。そのような草地には、秋になるとこのツリガネニンジンやオミナエシ、キキョウなど、たくさんの野の花が咲きました。

しかし、牛馬が化石燃料を使うトラクターにかわり、化学肥料が普及するにつれて、草刈りは不要なものになりました。刈られなくなった草地には低木が茂り、野の花も今ではすっかり少なくなっていました。



(天白区, 2001-10-13, 芹沢俊介 撮影)

【形態】

多年生草本。茎は高さ 50～100 cm になり、よく枝を分ける。葉は互生し、短い柄があるかほとんど無柄、葉身は長楕円形～長卵形で長さ 5～10 cm、辺縁にまばらな鋸歯があり、両面には短い毛があってざらつく。花期は 8～11 月、直径 2.5 cm ほどの淡青紫色の頭花を数個から多数つける。そう果は長さ 2～3 mm で、4～6 mm の汚白色の冠毛がある。

【分布と生態】

本州から九州に分布する。人里近くの草地に、最も普通にみられる野菊である。

【さがすポイント】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

ノコンギク 合併花類 キク科

Aster ageratoides Turcz. ssp. *ovatus* (Franch. et Sav.) Kitam.

秋の野に咲く薄紫色の野菊

野菊の中で最も普通にみられるのが、このノコンギクです。多年生草本ですが、地下につる状の枝を伸ばして繁殖するため多少掘り返されるような場所でも生育できるようで、ツリガネニンジンやスキの生える場所だけでなく、道ばたなどの草地にも生えています。

ヨメナ (61 頁) に比べると茎はしっかりしていて上部でよく枝分かれし、やや小さい頭花をたくさんつけます。そう果には冠毛があり、風に吹かれてあちこちに運ばれます。

【形 態】

大型の多年生草本。茎は束生して株になり、高さ 1~2 m になる。葉は茎の下部に多くつき、長さ 50~80 cm、幅 0.7~2 cm、辺縁は手が切れるほどざらつく。花期は 8~10 月、花序は長さ 20~30 cm で、数本~多数の枝がある。小穂は長さ 5~7 mm、長い芒があり、基部の毛は小穂と同じかそれよりやや長い程度である。秋の七草の一つで、オバナとも呼ばれる。

【分布と生態】

日本全土のほか、南千島、朝鮮半島、中国大陸に分布する。やや乾いた草地に多い。

【さがすポイント】

丘陵地の土手、河川の堤防などに見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>



(緑区, 2001-9-17, 芹沢俊介 撮影)

ススキ 単子葉類 イネ科

Miscanthus sinensis Anderss.

代表的な秋の風物詩

日本の自然草地で優占する植物はススキです。昔の人にとっても、ススキは牛や馬の餌料や屋根葺きの材料として、とても重要な植物でした。そのため、山の尾根などではわざわざ火入れをして木が育つのを防ぎ、ススキ草地を維持してきました。

このような見渡す限り一面のススキ原は、最近ではずいぶん少なくなりました。しかし、ばらばらとススキが生えている場所なら、今でもあちこちにあります。そのような場所は、自然度の高い草地の断片です。



球巣（港区藤前日光川河口, 2003-12-30, 名和 明 撮影）

カヤネズミ 齧歯(ネズミ)目 ネズミ科 *Micromys minutus* (Pallas)

草地で草の葉で作られた球形の巣をみつけたら…

【形態】

体重 6~8 g、頭胴長 55~62 mm、尾長 58~70 mm。背の毛はオレンジ色、腹の毛は白いとても小さいネズミである。尾が頭胴より長く、尾を茎に巻きつけ草を上りおりする。

【分布と生態】

本州、四国、九州と属島にみられる。ススキやヨシなど背の高いイネ科の草地にいる。イネ科の葉を細くさき、丸めて巣を作り、この中で出産・仔育てをする。7月、10~12月に出産し、仔の数は3~7頭である。イネ科の草の種子や昆虫類を食べる。飼育室では2年を超える場合もあるが、野外では1年を超えて生きる個体は少ない。

【さがすポイント】

カヤ、ススキ、イネなどにつくる球巣を見つければ出会えるきっかけとなる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠB類（愛知県：絶滅危惧Ⅱ類、全国：リスト外）

カヤネズミは、市内では守山区などの、耕作をやめた水田、庄内川の河川敷、ため池周辺のイネ科草地などにいます。イネ科植物の葉を使って地上から高さ20~80 cmの所に小鳥の巣のような小さな球巣をつくれます。

仔を育てる時期には大変神経質になります。人が巣をいじると、親は別の場所に巣を作り、仔をくわえ避難してしまいます。巣を見つけたら、静かに見守ってあげましょう。

イネ科の草地は、市内ではとても少なくなりました。ため池や河川敷にはあまり手を加えずに、雑草を残していきたいものです。



雄（弥富市鍋田, 2007-6-6, 後藤悠輔 撮影）

キジ キジ目 キジ科 *Phasianus colchicus* Linnaeus

ケッケーンと鳴く、日本の国鳥

【形態】

全長雄約 80 cm、雌約 60 cm。雄の頭部、背、胸、腹は光沢のある暗緑色で、顔は赤く、後頭部に小さい冠羽がある。長い尾は灰褐色地に多数の黒い横斑がある。雌は雄より小さく（特に尾が短く）、全身黄褐色地に黒褐色の斑紋がある。

【分布と生態】

北海道と沖縄を除くほぼ全国に、留鳥*として生息し、草の種子・果実、昆虫、ミミズ等を餌としている。主に歩いて移動し、驚いたときなど短距離を飛ぶ。

【さがすポイント】

低地～山地の林縁部や草地・農地などで見かけるが、春には雄の鳴声で気付くことが多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

昔から日本人に愛され、桃太郎等の民話にも出てきます。1980年頃までは市内でもよく見かけ、市による生息調査では2009年にも周辺部の区で広く記録されていますが、農地や空き地が減るにつれ、いつのまにか見る機会が少なくなりました。作物を食べるので農家の方からは好かれませんが、私達人間より先住者ですし、日本の国鳥にもなっている鳥ですので、保護していきたいものです。雄のケッケーンと鳴く声に注意してみてください。地震の微動を感じて鳴く、とも言われています。



(愛西市立田, 2005-2-22, 後藤悠輔 撮影)

ケリ チドリ目 チドリ科 *Vanellus cinereus* (Blyth)

地上では地味、空中では派手に

【形態】

全長約 33~38 cm。ハトよりやや大きく脚は黄色で長い。頭部から胸にかけては青みを帯びた灰色で、背は茶褐色。腰と尾は白く、尾の先端が黒い。腹は白く胸に黒帯がある。翼の先は尖り、先端部の黒と基部の白が対照的。

【分布と生態】

本州の関西以東で繁殖するが、関東以北では稀である。耕地や川原に棲み、昆虫等の小動物を食べている。3~6月頃、地面に皿形の巣を作って繁殖する。フ化前後の卵やヒナに外敵が近づくと、傷ついたような動作(=擬傷)をする。

【さがすポイント】

広い畑など開けた場所に棲み、地上では見つけにくいですが、空中では姿・声ともよく目立つ。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、全国：リスト外

地上にいる時、まるで目立たなかった体が、飛び立つと白・黒・茶褐色のコントラストも鮮やかに空中を舞います。そしてケリッ、ケリッと聞こえる鋭い鳴き声が名の起こりです。外敵に空中戦を挑む攻撃性ゆえに、巣がカラス等に襲われる被害が少ないようです。特異な分布を示し、東海・近畿地方には沢山いるのに、他には関東・東北地方に少しいるだけです。なぜ局地的に分布するのか？謎を解き明かしたい鳥の一つです。畑地を主なすみかとしていますが、水辺でも見かけます。



(愛西市立田, 2008-3-11, 後藤悠輔 撮影)

ヒバリ スズメ目 ヒバリ科

Alauda arvensis Linnaeus

空に広がる春の歌声

【形態】

全長 16~17 cm。スズメより一回り大きい。体は淡い黄褐色で、黒褐色の縦斑がある。外側尾羽は白い。後頭部に短い冠羽がある。

【分布と生態】

九州以北で、低地から低山の草原、畑、川原等に棲み、3~7月頃、草蔭の地上に枯草で碗形の巣を作って繁殖する。繁殖期には空中で(時に地上でも)、ピーチュルピーチュルチーチーチュルチュルチー・・・と、息長くなわばり宣言の歌を歌う。

【さがすポイント】

開けた草地に棲み、林に入ることはない。地味な色なので、鳴声を発している時以外は見つけにくい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

ウグイスとともに春の歌い手の代表です。西洋でも人々に親しまれ、「ロミオとジュリエット」では朝を象徴する鳥として扱われています。こんなに息長く歌えるのは、鳥が吐く息だけでなく吸う息でも声が出せるからです。冬の間はピュル、ピュルッと地味な声でしか鳴きませんから、光あふれるような囁り(さえずり)はまさに“春の便り”という感じです。2009年には市内16区内中10区で記録されていますが、畑や草地在宅地化されてヒバリがいなくなった所がたくさんあるのは、ちょっと寂しいことです。



幼体（守山区上志段味東谷山, 2006-9-15, 矢部 隆 撮影）

ニホントカゲ 有鱗目トカゲ亜目 トカゲ科 *Plestiodon japonicus* (Peters)

姿を消したスマートな麗人

【形態】

全長200~250mm、頭胴長60~96mm。ずんぐりとした体型と滑らかなうろこが特徴である。成体は茶褐色または暗褐色で体側に黒褐色の縦条が1本ある。幼体は黒色の体に5本の黄色縦条があり、尾は鮮やかな青色。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州の平地から高地まで生息し、市街地にも見られる。日当たりの良い場所を好み、畑、庭、石垣等の周辺に生息する。肉食性で昆虫類、クモ類、ワラジムシ等を食べる。

【さがすポイント】

公園や庭の石垣の上など、日当たりの良いところ。夏ならば朝か夕方が見つけやすい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外<愛知県：リスト外、全国：リスト外>

敵に襲われた時の「シッポ切り」で有名な動物です。1960年代までは、市内の至るところで普通に見られ、市の中心部でも緑藍色に輝く姿を見ることができました。それが急激に少なくなったのは、道路整備や宅地造成等によって生息域が分断され、繁殖機会が減少したからでしょう。

河川敷に残された草地や畑地は、ニホントカゲにとって良好な生息地になっています。これ以上彼らの生活できる場所を減らさないようにすることが保護につながります。



樹林地
草地
水辺
都市部
植物
哺乳類
鳥類
は虫類
両生類
魚類
昆虫類
クモ類
カニ類
貝類

左:木陰に休息中の雌,右:セリに産み付けられた卵 (千種区平和公園,2003-6-21,田中多喜彦 撮影)

キアゲハ チョウ目 アゲハチョウ科

Papilio machaon hippocrates C. et R. Felder

ゼブラ模様のいもむしを見つけたら・・・

【形態】

前翅長 36～70 mm。アゲハチョウに似るが、翅の地色は黄色、前翅表の基部が黒色である。春型は小型で黄色が淡く、夏型は大型で特に雌は雄より大きい。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布し、平地から高山帯に生息する。4～11月頃に年3～4回発生する。雄は、山頂に集まり占有行動をとる傾向がある。幼虫はセリ科のシシウド、セリ等の野生種、ニンジン、ミツバ、パセリ等の栽培種を主な食草としている。

【さがすポイント】

日当たりのよい草地や畑で、アザミ、ユリなど各種の花に集まる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

黄色っぽいアゲハの仲間で、ナミアゲハよりも開けた場所に多く、いろいろな草花に集まります。市内では、庄内川や天白川の河川敷と周辺の耕作地などでよく見られます。アゲハチョウの仲間では、草地に生息する代表的な種です。

ニンジン畑や野生のセリ科の生えている田畑のまわりが幼虫の主な生息地です。セリ科植物に黒と黄緑の縞模様の「いもむし」がついていたら、それが本種の幼虫です。農薬がまかかれているような場所には見られません。



(千種区平和公園, 2004-10-11, 田中多喜彦 撮影)

ツماغロキチョウ チョウ目 シロチョウ科

Eurema laeta (Boisduval)

永遠の漂泊のチョウ

【形態】

前翅長夏型 18~20 mm 秋型 19~22 mm
季節的差異は明確で、秋型は大型、前翅外縁は直線状で先端がとがる。秋型の後翅裏面には平行な褐色2条がある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布し、宮城県及び福井県以南に分布する。多化性で第1化は5月下旬に発生、越冬する秋型は9月以降に発生する。平地の河川敷や草地に生息する。食草はマメ科のカワラケツメイとアレチケツメイ。

【さがすポイント】

夏型は、食草群落の周辺を離れない。秋型は、移動性、分散性があり、セイタカアワダチソウなどの花で吸蜜する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧〈愛知県：リスト外、全国：絶滅危惧Ⅱ類〉

今世紀に入り、守山区志段味や名東区などの宅地造成地に、帰化植物のアレチケツメイ（下図）が侵入し、群落を作っています。これを食草として、ツماغロキチョウが多く発生しています。しかし5年も経つと、クズなどの丈の高い雑草に覆われ、アレチケツメイは見られなくなります。不安定な植生に依存するチョウです。





左:カラシナに吸密に来た雌 (千種区平和公園, 2004-5-4, 田中多喜彦 撮影)
右:タネツケバナに産み付けられた卵 (千種区平和公園, 2004-4-10, 田中多喜彦 撮影)

ツマキチョウ チョウ目 シロチョウ科

Anthocharis scolymus Butler

早春の可憐な天使

【形態】

前翅長 20~30 mm。前翅端が鋭く尖り、後翅裏面に緑色の唐草模様がある。雄の前翅端は橙色、雌は白色である。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布し、平地から山地まで広く見られる。年1回3月下旬~4月の早春にだけ姿を現す。幼虫は、アブラナ科のイヌガラシ、ナズナ、タネツケバナ等の野生種、ダイコン、カラシナ等の栽培種を食草とし、特に花や果実を好んで食べる。

【さがすポイント】

日当たりのよい林縁や、河川敷の草地などを、水平にゆるやかに飛び、タンポポやアブラナ科の植物などで吸蜜する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

雑木林を囲んで、水田や堀割の側溝が残っている、昔ながらの田園のなごりがみられる場所が彼らの生息場所です。そこには、主要な食草のタネツケバナが多く、写真のような卵も見つかります。

守山区、千種区、天白区などの東部丘陵地で、陽春4月頃にだけ現れます。川沿いに生息することも多く、庄内川や天白川、山崎川等の流域では、近年野生のセイヨウカラシナの群落が広がっていて、これを食草として本種も分布を拡大し、かなり下流域まで見られるようになってきました。



(千種区平和公園, 2004-10-11, 田中多喜彦 撮影)

ウラナミシジミ チョウ目 シジミチョウ科 *Lampides boeticus* (Linnaeus)

栽培マメを求めて飛来する南の使者

【形態】

前翅長 13~18 mm。翅の裏面の地色は褐色で、縦のざざ波模様がある。後翅の亜外縁に白帯をもち、後角には黄色斑がある。翅の表面は雄が青紫色、雌は基半部が青紫色で外縁は黒褐色帯となる。

【分布と生態】

本州（関東以西）、四国、九州、南西諸島、小笠原諸島に分布し、土着地では年6回ほど発生し、冬期でも卵、幼虫、成虫が見られる。幼虫は、マメ科のエンドウ、インゲン、ハギ類、クズ等を食草とし、おもに花や実を食べる。

【さがすポイント】

マメ類（フジマメを好む）の畑周辺、公園草地など明るい環境に生息する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

紀伊半島、四国、九州等の暖地で冬を越し、毎年暖かくなる頃に北上する南の使者です。市内では夏頃から次第に個体数が多くなり、10月頃が最も多く見られます。

以前は市内のどこでも見られました。今では食用の豆類栽培がほとんど行われなくなりましたが、まれに家庭菜園でインゲンやフジマメを自給している場所があり、そのような所で本種を見ることができます。近年では、クズの生育している環境にも多く見られます。



(名古屋市, 1973-10-10, 佐藤正孝 撮影)

ヒメジャノメ チョウ目 ジャノメチョウ科

Mycalesis gotama fulginia Fruhstorfer

昔は水田の害虫だったのに・・・

【形態】

前翅長 18~31 mm。翅の表面は茶褐色、裏面は黄褐色で眼状紋がある。雄の後翅表の前縁に褐色の性標（毛束）がある。雌は大型で翅は丸みを帯びる。

【分布と生態】

北海道（渡島半島南部）、本州、四国、九州に分布する。明るい草地環境に生息し、市街地でも見られる。5~10月に年3~4回発生し、ゆるやかに飛翔するが、すぐに地上や葉上に止まる。訪花性は弱く、樹液や腐果に集まる。幼虫はイネ科のススキ、チガヤ等を食草とする。

【さがすポイント】

市東部の緑地の林縁の草地や畑周辺に見られる。河川敷の草地にも多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

どこにも水田があり、それに続く草地が連続していたときは、最も普通のジャノメチョウでした。今は、草地に富んだ河川敷と、東部丘陵の草地や畑周辺に主として見られるだけです。同属のコジャノメは森林性で陰地を好み、明らかになすみわけが見られます。

食草は主にイネ科の草本ですが、カヤツリグサ科やタケ類も食草とすることが、コジャノメより分布範囲が広い理由です。イネの害虫として記録されているチョウですが、農業の影響が水田で見るとは少なくなりました。



(長久手町, 1984-8-29, 須賀瑛文 撮影)

コガネグモ クモ目 コガネグモ科

Argiope amoena L. Koch

黒と黄色の段だら模様！草地の王者コガネグモ

【形態】

雌の体長は20~25mm。雌は、頭胸部は灰色がかった白色、腹部は3本の黄色と黒色の横縞が交互にならぶ。雄は5~6mmで全体に黒っぽい。

【分布と生態】

本州、四国、九州、南西諸島に分布。草地やその近くの樹木などに大型の垂直円網を張る。網の中心部にX状のかくれ帯をつける。普段は円網の中央に静止し、脚を2本ずつそろえている。

【さがすポイント】

ススキやヨモギなど大型草本が生育する日当たりのよい場所を好むので、そのような場所をさがす。腹部に3本の黄金色の筋があれば本種である。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外）

コガネグモは日当たりのよい草原を好みます。どちらかというところ、海岸から遠くなるほど、個体数は少なくなるようです。市内の都心部でもかつては名古屋城とその周辺部などで多数見られましたが、生活に適した草地が年々少なくなり、今では多くの場所から姿を消してしまいました。庄内川の河川敷や守山区などでは、現在でも見ることができます。

コガネグモやよく似たナガコガネグモを見かける場所は、たくさん的小動物が生きている草地です。



(守山区, 花:1992-4-5 果実:2001-9-23, 芹沢俊介 撮影)

マメナシ 離弁花類 バラ科

Pyrus calleryana Decne.

名古屋を代表する貴重な樹木

【形態】

高さ8~10mになる落葉性の小高木。若い木にはとげが多い。葉は広卵形、長さ4~9cm、縁には細かい鋸歯がある。花は4月に数個が房になって咲き、白色で直径2.5cmくらい、果実は球形で黄褐色、直径1cmくらいである。

【分布と生態】

日本、朝鮮半島中部、中国大陸中南部、ベトナムにとびとびに分布する樹木。日本では愛知県と三重県北部に分布し、湧水のある湿った場所に生育する。

【さがすポイント】

自然状態ではないが、守山区蛭池が観察しやすい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠB類〈愛知県：絶滅危惧ⅠA類、全国：絶滅危惧ⅠA類〉

名古屋市に生育している植物の中で最も重要なのが、このマメナシです。日本全部でも100株を少し超えるくらいしかなく、その半数近くが名古屋市内に生育しています。名古屋の自然の象徴として、今ある木の全部に番号をつけ、毎年状態を記録してもよいほどです。

そんなに貴重なら人間の手で若木を育てようと思う人もいるでしょう。しかしそれは本当の自然ではありません。彼らが昔から生きてきた場所で、彼ら自身の力で子孫を残す。それができる環境を残すことが、私たちの努めです。



(守山区, 2001-4-28, 芹沢俊介 撮影)

ハルリンドウ 合弁花類 リンドウ科 *Gentiana thunbergii* (G. Don) Griseb.

春の湿地を彩る青い花

【形態】

小型の越年生草本。茎は高さ 5~20 cm。茎の下部数対の葉は節間がつまってロゼット状になり、卵形で長さ 4.5 cm、幅 2 cm に達する。花期は 3~5 月、花は枝の先に 1 個ずつつき、花冠は青紫色で中心部が白く、晴れた日の日中だけ開き、長さ、直径とも 2~3 cm、5 裂し、各裂片の間にも小型の突起がある。

【分布と生態】

本州~九州に分布し、朝鮮半島、中国大陸にも分布する。丘陵地の日当たりのよい湿地に生育している。

【さがすポイント】

湿地のほか、山あいの水田のあぜ道などにも見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

愛知県の丘陵地は、昔この地方にあった東海湖という湖の底に、粘土と礫が交互にたまって形成された地層からできています。この地層は水に溶ける成分が少なく、降った雨はそのままわき水となり、ところどころに小さい湿地を作ります。春先にそのような湿地を歩くと、枯れ草の間に、たくさんハルリンドウが咲いています。

ハルリンドウは、全国的には少ない植物ですが、愛知県ではあちこちに見られます。彼らが咲き続けることができる場所を、いつまでも残したいものです。

【形態】

食虫性の多年生草本。葉は株の根元から出て、直径2.5~5.5 cmのロゼット状になり、葉身はさし形、長さ5~10 mm、表面と縁に昆虫類を捕らえる腺毛がある。花は5月中頃から咲き始め、高さ8~30 cmの茎の上部に多数ならんでつく。つぼみの部分は渦巻き状に巻く。花弁は5枚で淡紅色である。モウセンゴケは花が白く、葉の柄が長く、より湿った場所に生える。

【分布と生態】

東海地方と近畿地方の丘陵地に分布する。湧水湿地*周辺部の裸地状の場所に生育する。

【さがすポイント】

湿地のほか、水のしみ出す粘土質の崖などにも見られる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>



(みよし市, 2000-5-26, 芹沢俊介 撮影)

トウカイコモウセンゴケ 離弁花類 モウセンゴケ科 *Drosera tokaiensis* (Komiya et C. Shibata) T. Nakamura et Ueda

赤い花と赤い葉の食虫植物

トウカイコモウセンゴケは、やせた丘陵地の湿地を指標する植物です。肥料分のない場所に生えているため、虫を捕らえて消化し、窒素を補っています。「肥料分がないなんてかわいそうだ、肥料を入れてやろう」と思う人がいるかもしれませんが、とんでもない話。肥料分が多くなればもっと大型の植物がたくさん入り込んできて、トウカイコモウセンゴケのような小型の植物はその陰になり、生きていくことができません。やせた土地こそ、彼らの命の網です。



(長久手町, 2003-10-21, 近藤洋一朗 撮影)

【形態】

多年生草本。ちぎると白い乳液が出る。茎はまばらに枝を分けて、高さ50～120 cmになる。茎の基部から出る葉は線状披針形[※]で長さ15～50 cm。花期は9～10月、頭花は黄色で直径3～3.5 cm、総苞は細い筒状で長さ10～12 mm、その下には披針形の小さい苞葉がならぶ。小花はすべて舌状花で17～30個つく。そう果は長さ7～9 mmで、淡褐色の冠毛がある。

【分布と生態】

本州から九州に分布し、愛知県では湧水湿地のほか、ため池の岸、丘陵地の休耕田などに生育している。

【さがすポイント】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

スイラン 合弁花類 キク科

Holeoleion krameri (Franch. et Sav.) Kitam.

秋の湿地に咲く黄色の花

ハルリンドウやトウカイコモウセンゴケが咲く湧水湿地[※]の秋の指標種は、本当はヌマガヤとミカツキグサです。しかし、どちらも花の目立たない植物なので、かわりにこのスイランをとりあげました。

スイランは、肥料分の少ない湧水湿地の周辺部に生えるほか、ため池の岸、丘陵地の休耕田などにも見られます。しかし、平野部の低湿地には分布していません。和名は水蘭で、水湿地にはえ、葉が細長くランに似ているからです。

【形態】

秋に芽を出し、翌春が咲いて枯れる越年生の草本。茎は柔らかく、高さ 10~50 cm になる。葉は 2 枚ずつつき、柄がなく、長さ 2.5~8 cm、幅 0.5~2.5 cm。花は 5~6 月に咲き、花弁はほとんど白色で 4 裂し、直径 3~4 mm、葉のもとから出た細い柄にたくさんならんでつく。

【分布と生態】

本州中部から琉球列島まで見られ、中国大陸、東南アジア、インドまで分布している。水田や河川敷の低湿地などに生育する。

【さがすポイント】

湿田状態が多少なりとも残されている場所では、しばしば春の水田雑草になっている。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：国リスト〈愛知県：国リスト、全国：準絶滅危惧〉



(守山区, 2003-6-6, 近藤洋一朗 撮影)

カワヂシャ 合弁花類 ゴマノハグサ科
Veronica undulata Wall.

目立たない植物にも注意しよう

カワヂシャは低湿地性の雑草です。この植物が生えているのは、低湿地本来の自然がかろうじて残されている河川敷、あるいは一昔前の状態が多少なりとも残されている水田です。

低湿地性の植物は、河川改修や農地改良、除草剤の使用などにより急激に減少しています。しかしカワヂシャは比較的環境の変化に耐えられるようで、名古屋市内でもまだところどころで見ることができま。このような目立たない植物にも、注意の目を向けてください。



(岩倉市, 1995-10-17, 芹沢俊介 撮影)

シロバナサクラタデ 離弁花類 タデ科

Persicaria japonica (Meisn.) H. Gross

白い花が目立つ湿地性のタデ

【形態】

多年生草本。茎は高さ 50~100 cm、葉身は披針形*、長さ 8~15 cm、幅 1~2 cm、托葉鞘の縁毛は長い。花期は 8~10 月、花は長さ 4~10 cm の穂につき、花被は白色で 5 深裂し、長さ 3~4 mm である。

【分布と生態】

北海道~琉球に見られ、朝鮮半島南部や中国大陸にも分布している。主に平野部の水辺に生育している。

【さがすポイント】

水田のあぜ、水路周辺、河川敷など。

【よく似た種類】

サクラタデ(右下写真)は花が淡紅色。名古屋市では絶滅危惧Ⅱ類とされる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外 全国：リスト外

タデの仲間では比較的大きな目立つ花をつけるのが、シロバナサクラタデとサクラタデです。どちらも低湿地に生育する植物ですが、水田の宅地化がどんどん進行している名古屋市では、このような一昔前まで雑草扱いだった植物も、どこにでも見られるものではなくなりました。





(岩倉市, 1995-10-17, 芹沢俊介 撮影)

オギ 単子葉類 イネ科

Miscanthus sacchariflorus (Maxim.) Benth.

秋の水辺に揺れる白銀の穂

【形態】

ススキに似た大型の多年生草本。地下茎は長くはい、株にならず、面的に広がる群落を作る。茎は高さ 1~2.5 m になる。葉は茎の中部に多く、長さ 40~80 cm、幅 1~3 cm。花序は長さ 20~40 cm、多数の枝があり、小穂は長さ 5~6 mm、芒はなく、基部の毛は小穂の 2~3 倍の長さがあり、銀白色で柔らかい。

【分布と生態】

北海道から九州、朝鮮半島、中国大陸、ウスリーに分布する。水辺に大きな群落を作ることが多い。

【さがすポイント】

河川敷、休耕田などに多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

日本列島の平野部は、人間が住む前は一面の低湿地で、ヤナギ、ハンノキなどの林やヨシ、オギなどの原が広がっていたと思われます。しかしそのような場所は、現在では河川敷などに断片的に残されているにすぎません。

オギは、この低湿地の自然を指標する植物です。ヨシに比べるとやや水から離れた場所に生え、名古屋市では庄内川河口部にかなり大きい群落が残されています。小さな群落ならまだあちこちに見られます。穂はススキより白く、やわらかい感じがします。



(一宮市, 1995-5-17, 芹沢俊介 撮影)

コオニタビラコ 合弁花類 キク科

Lapsana apogonoides Maxim.

春の七草のホトケノザはこれ

【形態】

越年生の草本。根出葉はロゼット状に広がり、長さ 4~10 cm、羽状に分裂する。莖は長さ 4~20 cm になり、葉が 1~3 枚つく。花期は 3~5 月、頭花ははじめ集まってつくが、やがて柄が伸び、花後は下に垂れる。総苞は円柱形で長さ 4~5 mm、内片は 5 個ある。小花はすべて舌状花で 6~9 個、花冠は長さ 5~6 mm、そう果は長さ 3~4.5 mm、淡黄褐色、先端にかぎ状突起が 2 個（まれに 4 個）ある。

【分布と生態】

本州から九州に分布し、平野部や丘陵地の水田やあぜに生育する。

【さがすポイント】

耕起前の水田でさがすとよい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外
愛知県：リスト外
全国：リスト外

秋の七草が観賞用なのに対し、春の七草は食用です。春先の田畑に生える若草は、昔の人にとって大切なビタミン源だったのでしょう。セリ、ナズナ、オギョウ（ハハコグサ）、ハコベと来て 5 番目がホトケノザ、これは今日普通にホトケノザと呼ばれているシソ科の植物ではなく、このコオニタビラコです。

コオニタビラコは主として耕起前の水田に生えます。ホトケノザの名は、仏様の台座のように葉を平らに広げた草という意味です。タビラコも漢字で書けば田平子で、同じ意味です。

【形態】

多年生草本。茎は高さ50～120cmになり、上部でまばらに枝を分ける。葉は卵状長だ円形、長さ8～10cm、辺縁にはまばらな大きい鋸歯があり、表面はやや光沢がある。花期は7～10月、頭花は枝の先に1個ずつつき、直径約3cm、舌状花は淡紫色、冠毛は0.5mmほどでほとんど目立たない。

【分布と生態】

本州から九州に分布し、西日本に多い。

【さがすポイント】

平野部の水田のあぜや水路の周辺に多く見られる。河川敷などにも生育している。

【よく似た種類】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）



(清須市, 2003-7-31, 芹沢俊介 撮影)

ヨメナ 合弁花類 キク科
Kalimeris yomena Kitam.

水田のまわりにつつましく咲く野菊

日本列島の平野部は、現在ではほとんど水田になっています。水田を特徴づける植物もいろいろありますが、その一つがヨメナです。乾いた草地の指標種であるノコンギク(40頁)によく似ていますが、茎は長く伸び、ほっそりしていて、花もまばらにつくだけです。一番はつきりした違いは、冠毛(タンポポのわた毛に相当)がごく短く、ほとんど目立たないことです。ヨメナの名はムコナ(シラヤマギク)に対するもので、里にはえ、姿がやさしいことから名付けられました。



(守山区, 2000-7-8, 芹沢俊介 撮影)

オグラノフサモ 離弁花類 アリノトウグサ科 *Myriophyllum oguraense* Miki

さらさら流れる小川の水草

【形態】

多年生でほぼ沈水性の水草。茎は長さ1 mくらいになる。水中葉は4枚が輪のようにつき、長さ2~5 cm、幅1~3.5 cm、糸状に切れ込む。花期は5~7月、花のつく枝は水面から出て、淡緑白色の葉のもとに小さな白い花をつける。晩秋に細長い棒状の殖芽をつけ、越冬する。

【分布と生態】

本州（茨城県、新潟県以西）、四国、九州に分布し、丘陵地や平野部の、汚染のない富栄養な池沼、水路に生育する。

【さがすポイント】

才井戸流れのほか、堀川、庄内川本流などに生育している。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：絶滅危惧Ⅱ類、全国：絶滅危惧Ⅱ類）

「春の小川はさらさら行くよ」という小学校唱歌がありますが、そのような澄んだ小川は、名古屋ではすっかり少なくなってしまいました。辛うじて残っていた守山区の才井戸流にも、開発が迫っています。流れに揺らいでいた水草も、今ではほとんどがレッドデータブックに掲載されるようになっています。

オグラノフサモが育つようなさらさら流れる小川を、岸のスマレやレンゲソウとともに残すこと。それは私たちの心のふるさとを、次の世代に伝えることです。

【形態】

越年生の草本。茎は高さ40～80 cmになる。葉は細く、長さ6.5～15 cm、肉質で無毛、柄はない。頭花は10～11月に、茎の上部に多数つき、直径2.5～3 cm、周辺部の舌状花の花弁は淡青紫色で、長さ7～10 mmである。ハマシオンとも呼ばれる。

【分布と生態】

アジア、ヨーロッパ、アフリカ北部に広く分布し、日本でも北海道東部から九州まで見られる。内湾の塩湿地や河口部の河川敷などに生育するほか、埋め立て地の水路などに生育することもある。

【さがすポイント】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：リスト外、全国：絶滅危惧Ⅱ類）



(港区, 2001-10-23, 芹沢俊介 撮影)

ウラギク 合弁花類 キク科
Aster tripilium L.

秋の海岸湿地を飾る花

河口部の河川敷や海岸の入り江の奥などにできる塩湿地は、全国どこでも埋め立てなどが進んでいます。塩湿地に生育する植物の多くは、絶滅の危機にさらされています。

名古屋市では、大都市としては珍しく庄内川河口付近にかなり広い塩湿地が残されています。ウラギクは、この湿地を特徴づける植物です。庄内川以外では南区加福町の貯木場跡地にも生育していましたが、この場所は廃棄物処分場建設のため埋め立てられてしまいました。



夏羽（名東区牧野ヶ池, 2007-2-21, 後藤悠輔 撮影）

カイツブリ カイツブリ目 カイツブリ科 *Tachybaptus ruficollis* (Pallas)

八丁潜りの異名をもつ潜水の名手

【形態】

全長 25~28 cm。体は丸く、尾は短い。頬~首は夏羽では赤褐色、冬羽では黄褐色。頭上~背・翼は夏羽では黒褐色、冬羽では褐色。四季を通じて嘴基部の黄白色が目立つ。

【分布と生態】

全国に広く分布する。低地の池、湖、河川に生息し、頻りに潜水して小魚や昆虫類等を捕食する。4~7月頃、水面上に水草を集めて浮巢（“にほの浮き巢”という。“にほ”はカイツブリの古名）を作り、ヒナを育てる。キリキリキリ…と高い声で鳴く。

【さがすポイント】

池や川で、一度に数十秒潜る小さな水鳥。鳴き声で気付くことも多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

“八丁潜り”の異名がある程、潜水の名手です。コガモよりずっと小さく、バンやオオバンとは色の違いや泳ぐ姿（バン、オオバンは前のめり姿勢）でも区別が付きません。水面を蹴って離水し、1 m ぐらいの高さを数 10 m 飛ぶことはありますが、高空を飛ぶ姿は見たことがありません。池が凍った時など、どうやって他所へ移動するのでしょうか？

市の東部と北区では独特な浮巢を作って繁殖しています。しかし池や川がコンクリート護岸化され、ヨシ等の植物が消えたら、この鳥もいなくなってしまう。



夏羽（弥富市, 2008-5-20, 後藤悠輔 撮影）

チュウサギ コウノトリ目 サギ科 *Egretta intermedia* (Wagler)

くちばしが短めのシラサギ

【形態】

全長 63～72 cm。体は純白で繁殖期（夏羽）には胸と背に飾り羽が出る。嘴は黒く（非繁殖期には先端部を残して黄色）、目先は黄色。脚は指まで黒い（ダイサギは首が特に細長く、コサギは嘴が長めで脚指が年中黄色）。

【分布と生態】

夏鳥*として渡来し、低地の水田、湿地、農地等でカエル、ザリガニ、昆虫類等を食べている（干潟へはあまり出ない）。少数越冬するものもある。他のサギ類と共に集団で樹上に営巣する。

【さがすポイント】

水辺で普通に見る脚長の白い鳥はシラサギ3種とアマサギ(冬羽)のどれか。全体の形、嘴・脚・目先の色等で識別。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：リスト外、全国：準絶滅危惧）

シラサギの仲間3種のうち中間大の種で、首と脚はダイサギより短くコサギより長いのですが、嘴が3種中最短なことと、その嘴が秋には先端の黒を残して黄色になること、脚全体が年中黒いこと等で見分けます。アマサギとともにサギ類の中では草地を好む種類です。近年、なぜか目立って数が減ってきました。その原因を探るためには、詳しく現状を知ることが必要です。冬羽では白くなるアマサギも含め4種の白いサギを注意して観察してください。最近では主に市の東部や南西部で記録されています。



(千種区名古屋大学構内, 1994-5-29, 小笠原智子 撮影)

カルガモ カモ目 カモ科

Anas poecilorhyncha (Forster)

雌雄同色、夏もいるカモ仲間の変わり者

【形態】

全長 53~63 cm。体は褐色で暗褐色の斑がある。顔は白っぽく、過眼線とその下にもう一本黒褐色の線がある。嘴は黒く先端が黄色。脚は橙色。飛ぶと翼下面の白黒の対比が鮮明。

【分布と生態】

全国の低地~山地の湖沼、河川、水田等に生息し、草の種子や葉、水生昆虫等を食べる。4~6月頃水辺の草むらに巣を作って繁殖する。冬期は群れをなし、海上で休むこともある。グエッグエッグと鳴く声はマガモに似る。

【さがすポイント】

夏の低地で見えるカモはほとんど本種。冬も雌雄同色は本種だけ。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

カモでは珍しい雌雄同色。しかもほとんどが冬鳥*である他のカモ仲間と違って留鳥*です。白鳥庭園や名古屋大学構内等、町の中で親子連れを見ることが出来る唯一のカモです。

フ化後まもなく母親の後を一列に並んで泳ぐヒナの数には10羽前後と賑やかですが、何に食べられるのか、事故死するのか、成長途中で1羽また1羽と減っていくのが厳しい現実です。

市内のほとんどの区に生息し、この鳥がいなくなったらかなりの環境破壊が進んでいると考えられる指標種です。



夏羽（港区藤前干潟, 2009-5-26, 後藤悠輔 撮影）

コアジサシ チドリ目 カモメ科

Sterna albifrons Pallas

空中から小魚をねらうスマートな白い鳥

【形態】

全長21~31cm。翼が長く、尾が深く切れ込んでいる。背と翼の上面は淡い青灰色で、上尾筒と尾と下面は純白。夏羽では頭上~後頭と過眼線が黒く、額や頬は白い。嘴は黄色で先は黒く脚は橙黄色。冬羽では頭頂が白く、脚が褐色になる。

【分布と生態】

本州以南の低地の水辺に夏鳥*として渡来し、集団で砂礫地の地面に産卵して繁殖する。

水面上を軽やかに飛びつつねらいを定め、急降下して嘴で小魚をはさみ取る。キリッ、クリッと鳴く。

【さがすポイント】

水上を軽やかに飛び、水面の小魚をねらう白い鳥。姿、鳴声とも印象的。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：準絶滅危惧、全国：絶滅危惧Ⅱ類）

ツバメを一段とスマートにした白い鳥という印象です。水上で停空飛翔*して、その後ダイビングする姿も爽やかです。数10~数100つがいの集団で繁殖する鳥で、それが可能な砂礫地は近年極めて少なくなっていました。どこかが埋め立てられると、追われるまでの1~2年間だけそこで繁殖し、また次を捜す流浪生活が続くのです。市内各地で観察され、港区や天白区では少数繁殖記録があります。首都圏ではピルの屋上に砂を敷いて誘致に成功した例もあります。カラスによるヒナの食害が深刻です。



冬羽（弥富市, 2010-2-21, 後藤悠輔 撮影）

シロチドリ チドリ目 チドリ科

Charadrius alexandrinus Linnaeus

海辺を好み、内陸へは入らない

【形態】

全長 17~19 cm。背面は灰褐色で腹面は白色。夏羽の雄では前頭と過眼線と胸側の斑が黒いが、冬羽や雌ではこれらが褐色。頭上も夏羽の雄だけ橙褐色で、冬羽や雌では灰褐色。飛ぶと翼に白い線が出る。嘴と脚は黒い。

【分布と生態】

ほぼ全国に留鳥*として分布する。昆虫類、トビムシ、ゴカイなどを食べる。砂礫地に目立たぬ巣を作り3~4卵を産んで繁殖する。ピルッ、ピルッと鳴く。

【さがすポイント】

海岸や河口部を足早に走って餌を採る。小型のシギ、トウネンやミュビシギとは餌の採り方が異なる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

頭を下げて連続的に餌を採るシギ類と違い、一走りしてはヒョイ、ヒョイといつばむチドリ類の動作にはどこか愛嬌があります。国内に生息する代表的な小型のチドリ類3種のうち、イカルチドリは河川の上・中流部、コチドリは上流~下流部及び海岸、シロチドリは河川の下流部と海岸だけに棲みます。かつて伊勢湾周辺に多数いたシロチドリも、繁殖地の環境が変化したためか、急激に数が減りました。市内での主な生息地は港区の庄内川、南区の天白川河口付近で、現在はごく少数が繁殖しています。



冬羽（港区藤前干潟, 2010-1-15, 後藤悠輔 撮影）

ハマシギ チドリ目 シギ科 *Calidris alpina* (Linnaeus)

冬の干潟にきらめく群飛

【形態】

全長 19～23 cm、黒く長めの嘴は少し下に曲がっている。夏羽の上面は赤褐色と黒の斑模様、胸には白地に細い黒褐色の縦斑があり、白い腹の中央は大きく黒い。冬羽の上面は灰色、下面は白く胸側は灰褐色。飛ぶと翼に白い線が出る。

【分布と生態】

春と秋、旅鳥としてほぼ全国を通過するほか、本州中部以西では越冬もする。干潟や河川等の水辺に群生し、ゴカイ、小型甲殻類、昆虫類等を捕食する。干潟で餌を採る鳥の中で最も数が多い。

【さがすポイント】

内陸の川や池でも少数見かけるが、干潟や河口部で見る大群が印象的。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：地域個体群、全国：リスト外>

シベリアの極北部やアラスカで繁殖し、旅鳥または冬鳥*として日本を訪れます。干潟の鳥の代表種で、多数が群れて忙しく採餌し、飛び立つとまるで群れ全体が大きな生き物のように、右に左に上に下に、めまぐるしく方向転換しながら群飛します。一斉に腹面を見せて白く光る時など宝石を見るような美しさです。

守山区、西区等でも少数観察されたことはありますが、主な生息地は港区、南区の河口付近で、多い年には5,000羽も越冬していたのに、近年、訪れる数が減ってしまったのが心配です。

コラム：藤前干潟の野鳥たち

名古屋市の南西端、庄内川・新川・日光川が合流する地点に藤前干潟があります。干潟には多くの生き物が棲んでいます。光合成をする藻の仲間から、カワグチツボやエドガワミズゴマツボなどの巻貝類、ヤマトシジミ・アサリなどの二枚貝類、ゴカイ・スピオなどの多毛類、ヨコエビ・アナジャコ・ヤマトオサガニなどの甲殻類、トビハゼ・マハゼ・ボラ・スズキなどの魚類、それに200種近い鳥類など多様な生き物たちが、独特な生態系を形造って生活しています。

干潟は遠浅で埋め立てがしやすいため、経済の発展とともに日本各地



キアシシギ（港区藤前干潟, 2007-8-26, 後藤悠輔 撮影）

で埋め立てが進行し、次第に消失してきました。ここ藤前干潟も1981年に名古屋市の廃棄物最終処分場（ゴミ捨て場）候補地となりました。しかし、干潟は人間だけの土地ではありません。上記の様々な生き物たちは、この干潟が無くなれば死に絶えてしまいます。さらに地球上を広く移動している渡り鳥は、餌場である干潟が減ればそれだけ生き残れるものの数が減り、彼らの繁殖地（シベリア・カムチャツカ・アラスカなど）や越冬地（東南アジア・オーストラリア・ニュージーランドなど）である外国にも影響が及びます。

“この貴重な干潟を守ろう！”という市民の強い要望が実って、1999年に廃棄物処分場の計画は撤回され、2002年にはラムサール条約（正式名：特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約）の登録地になりました。

それと同時に、庄内川河口部左岸に環境省の「稲永ビジターセンター」が、対岸の新川・日光川河口部に「藤前活動センター」が設置されて、

湿地の役割・生態系の仕組み・ゴミ処分場を含む都市の環境問題などを学ぶことができるようになったほか、ピジターセンターに隣接する「名古屋市野鳥観察館」では、備え付けの30台の望遠鏡を使って干潟の鳥を観察することができます。春と秋にはシギ・チドリ類、冬にはカモやカモメ



ハマシギ（港区藤前干潟, 2010-1-15, 後藤悠輔 撮影）
類、四季を通じてサギ類・カワウ・ミサゴなど、近年の調査によれば190種以上もの鳥が記録されているのです（より多くの鳥を観察するには、満潮時刻の前後2時間ずつくらいは外した方がよいでしょう）。

日本の大都会でこれだけ多様な生物を観察できる水辺は他にありません。大雨後の増水による砂泥の移動などで干潟の状態が変わることがあります。干潟を後世に残すには、今後もきめ細かな保全対策が必要です。



ミサゴ（港区藤前干潟, 2009-12-1, 後藤悠輔 撮影）



雌（西区庄内緑地, 2009-4-15, 後藤悠輔 撮影）

カワセミ ブッポウソウ目 カワセミ科
Alcedo atthis (Linnaeus)

宝石に名を貸した美しい鳥

【形態】

全長 16~18 cm。頭が大きく、嘴が長く、尾が短い。背は鮮やかな青色。頭と翼は青緑色。喉は白く、胸、腹は橙赤色。脚は赤い。嘴は黒く、雌は下嘴の基部が赤い。

【分布と生態】

全国の低地~山地の水辺に生息し、棒くい等の止まり場から、または空中に停空飛翔*してねらいを定め、水中に飛び込んで小魚を捕らえる。3~8月頃、土の崖に横孔を掘って繁殖する。チッピーと鳴き、水面上を低く直線状に飛ぶ。

【さがすポイント】

川や池に単独または番い（つがい）で生息する。鳴声で気付くことが多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

背の色からこの鳥の中国名翡翠（ひすい）が宝石の名に転用されました。温帯には珍しい美しい彩りで、頭が大きく形が可愛いこともあって、探鳥会の人気者です。垂直または少しオーバーハングした土の崖に、嘴で巣孔を掘り、その奥に産卵しますが、そういう崖が少なくなったため、土木工事の際、直径4~5 cmのパイプを水平または少し上向きに埋め込んで、巣作りを手助けしようとの試みもされています。

市内のほとんどの区に生息し、主に東部や北部で、少数が繁殖しています。



(千種区茶屋ヶ坂公園, 2007-12-24, 小笠原智子 撮影)

セグロセキレイ スズメ目 セキレイ科 *Motacilla grandis* Sharpe

細い尾を振るスマートな小鳥

【形態】

全長 20~22 cm。頭部・胸・背は黒く、翼の大部分と腹は白い。肩と喉にも白い部分がある。若鳥は灰色で腹側は淡色。

【分布と生態】

日本特産種。ほぼ全国で繁殖している。池や川などの水辺に生息し、水生昆虫を主食としている。チー、チーと濁った声で鳴く。波形を描いて飛び、地上で長めの尾を上下に振る習性は、セキレイ類共通の特徴。

【さがすポイント】

平地から山地まで水辺で普通に見られる白黒の小鳥。2羽でいることが多い。

【よく似た種】

ハクセキレイは顔が白っぽく、チュチュと澄んだ声で鳴く。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、
全国：リスト外

日本で普通に見られる3種のセキレイの1つで、アジア~ヨーロッパに広く分布するハクセキレイから分化した種です。ほぼ日本全土に生息しますが、かつて北日本を中心に生息していたハクセキレイが近年分布域を南に広げてきたため、両種のすみわけが不明確になってきました。さらに当初は海岸沿いで稀にしか繁殖しなかったハクセキレイが、内陸の各地でも繁殖するようになり、セグロセキレイとの種間関係が複雑化しつつあります。キセキレイはこの2種とはやや縁遠く、全国での分布も安定しているようです。



(中川区万場大橋緑地, 2009-5-9, 後藤悠輔 撮影)

オオヨシキリ スズメ目 ウグイス科

Acrocephalus arundinaceus (Linnaeus)

初夏のヨシ原 にぎやかな歌声

【形態】

全長 17~19 cm。上面は褐色で腰はやや淡色、下面は淡褐色で胸側~脇は茶褐色を帯びる。顔に淡色の眉斑がある。

【分布と生態】

夏鳥*として4月下旬から5月上旬頃、全国の低地~低山のヨシ原に渡来する。雄は賑やかにギョギョシギョギョシ…と鳴きたてる(渡来当初は夜も)。ヨシの茎数本を支えに椀形の巣を作って子育てをする。一夫多妻の例もある。カッコウに托卵*される事もある。主に昆虫の成虫・幼虫、クモなどを捕食する。

【さがすポイント】

水辺でやかましく鳴きたてる声。ヨシの茎で大きく口を開いて鳴く姿。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

ヨシの茎に縦に止まって鳴きしきる姿と声は独特のものです。俳句では鳴き声から“行々子(ぎょうぎょうし)”と呼び、初夏の季語になっています。稀にはヨシ以外に巣を作ることもありますが、ほとんどヨシ原を舞台に生きる鳥ですので、ヨシ原の存続がこの鳥の命脈を握っているといえます。河川敷等に現在残っているヨシ原は、他にもヨシゴイやオオジュリン、ツリスガラなどの命を支えています。

市内で広く記録され、守山区、天白区、緑区、西区、中村区、港区では繁殖記録もあります。



(北区新川, 2003-1-13, 荒尾一樹 撮影)

クサガメ カメ目 イシガメ科 *Chinemys reevesii* (Gray)

甲羅干しをする池の主

【形態】

甲長は雄 18 cm、雌 25 cm。体色は黒褐色で、側頭部、頸部に黄緑色の不規則な斑紋や線がある。背甲は黒褐色で3本の隆条がある。成熟した雄からは斑紋が消失し、全身が黒色になる。

【分布と生態】

本州、四国、九州及び朝鮮半島、中国東部、台湾に分布し、主に平地の池沼や河川に生息する。魚類、オタマジャクシ、ザリガニなどの甲殻類、タニシなどの貝類、水草等の生きたものから死んだものまで餌としている。

【さがすポイント】

春から秋にかけて、池や川の岸で日光浴をしている個体が観察しやすい。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧〈愛知県：リスト外、全国：リスト外〉

「クサガメ」という名前は、腋の下と脚の付け根の甲板に臭腺があり、そこからくさい臭いを出すことからつけられました。

外来のミシシippアカミミガメが同じ池に放されると、生息空間や食物を巡る競合が生じ、在来の方のクサガメの方が徐々に少なくなっていくます。

カメ類の生活には越冬や採餌のための水域、産卵や日光浴のための陸域、そしてそれらをつなぐ水辺エコトーンが必要です。彼らが安心して生活できる環境を創りだせば、減少をくい止められるかもしれませんが。

樹林地
草地
水辺
都市部
植物
哺乳類
鳥類
は虫類
両生類
魚類
昆虫類
クモ類
カニ類
貝類

コラム：名古屋に棲むカメの変遷

愛知県の縄文時代から中世にかけての遺跡から出土するカメの遺体は、ほぼすべてがニホンイシガメ(右図)で、他にはニホンスッポン(下図)が見つけれられる程度です。名古屋市北区の志賀公園遺跡や隣接する清須市の清洲城下町遺跡からはニホンイシガメが多数出土しています。かつては名古屋にはニホンイシガメが優占的に分布していたでしょう。



ニホンイシガメ (名東区, 2006-10-7, 矢部隆 撮影)

ところが近世以降は、名古屋市西部では前頁のクサガメが増え、東部にニホンイシガメが多いという分布になったようです。クサガメは平地の開けた環境を好む傾向があり、発達した顎でそこに棲むタニシやカワナなどをバリバリと食べてしまいます。一方ニホンイシガメは平地にも棲めますが、丘陵地から山地にかけての川や溪流にも生息することができ、ほっそりとした頭部を隙の間に入れて、トビケラやサワガニを



ニホンスッポン (南区, 2006-5-29, 矢部隆 撮影)

ついはむことができます。近世に入ると木曾三川が形成した濃尾平野あるいは市の南部で新田開発が進み、開けた環境が増えたので、クサガメが進出してきたと考えられます。結果としてニホンイシガメは昭和区や千種区、名東区や守山区といった丘陵地の多いところに主に生息するようになりました。

ところが最近では、名古屋市で最も目に付くカメはミシシippアカミミガメ（下図）です。市内の池や川のいたるところで日光浴をしたり泳いだりしているのが見られ、場所によっては在来のカメがいなくなつて、ミシシippアカミミガメのみが生息しているほどです。このカメは北アメリカのミシシipp川下流が原産地ですが、ペットとして多数の稚ガメが流通しています。1980年代から1990年代にかけては年間100万頭近くが日本に輸入されていました。ところが、成長して飼いきれなくなつたり、サルモネラ菌の宿主として有名になつたりして野外に放逐され、最近では野外で繁殖し急増しています。

ミシシippアカミミガメは在来のカメたちと同じようなものを食べ、同じような場所で日光浴、越冬、産卵、休息をします。このカメはニホンイシガメやクサガメよりも体が大きく、活動的で、産卵数が多くて繁殖力も強いため、同所的に生息すると在来のカメを追いやってしまいます。強い繁殖力が特に脅威とされ、世界のワースト100外来生物、日本のワースト100外来生物に挙げられており、特定外来生物[※]にはなっていませんが、要注意外来生物[※]に指定されています。

異郷でけなげに、しかもしたたかに生きているミシシippアカミミガメには申し訳ないのですが、在来のカメの生息を保証するために、野外からは取り除く努力をしなければなりません。



ミシシippアカミミガメ（天白区荒池, 2010-7-25, 矢部隆 撮影）



(山梨県韮崎市, 2001-7-7, 荒尾一樹 撮影)

ヒバカリ 有鱗目ヘビ亜目 ナミヘビ科 *Amphiesma vibakari vibakari* (Boie)

その日ばかりの生活を強いられる可憐なヘビ

【形態】

体長 40~60 cm。小型で頭部は比較的小さく、胴体は細長い。背面は褐色~茶褐色であり、口角から頸部にかけて淡黄色の帯がある。腹面は黄白色で、その両側に黒褐色の点が見られる。

【分布と生態】

本州、四国、九州や佐渡島、隠岐などの島の草地や森林に生息し、特に水田や湿地に多く見られる。水の中によく入り、小魚、オタマジャクシ等を餌とする。攻撃性はないが、追いつめられると首をもちあげて威嚇行動をとることもある。

【さがすポイント】

池や川の岸や水田の畦の草むらなどの水辺。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

水辺など湿った環境を好み、林の中の路傍で見かけたりする小型の暗褐色のヘビです。水の中から首を出しているのを見かけることもあります。無毒ですが、昔は毒をもっているともいわれ、咬まれるとその日ばかりで死ぬというところから「ヒバカリ」という名前がつけました。

水辺が好きで、小魚、オタマジャクシなどを好んで餌にします。水辺の環境が悪化し、小魚も減ってきたため、現在ではあまりヒバカリを見かけなくなってしまうました。



雄成体（大治町, 1996-6-15, 芹沢俊介 撮影）

トノサマガエル 無尾目 アカガエル科

Rana nigromaculata Hallowell

田んぼの殿様、今はよいが…

【形態】

体長 50~90 mm。雄は黄緑色~茶褐色、雌は灰白色~暗灰色で、背中に黒色の連続した斑紋があり、中央に白いすじがある。幼体は背面に小さい黒斑がある。後肢が長く、よく跳ねる。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布するが、関東地方から東北地方南部にかけては分布していない。平野部~丘陵地の、水辺に接した陸地に生息し、昆虫類などを食べる。4月下旬~5月に水田に水がたまると、すぐに多くの個体が集まってガッガツと鳴き交わし、繁殖する。

【さがすポイント】

右の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

最近の名古屋近郊では、やや増加傾向にあるカエルです。ナゴヤダルマガエル（次頁）と違って繁殖期以外は水辺から離れて生活するため、平野部が一面の水田地帯だった時代には集落のまわりや丘陵地の谷戸田[※]でしか見られませんでした。ところが水田があちこちで宅地化され、水と陸がモザイク状態になるにつれて、どんどん分布を拡大しました。

しかしそのようなトノサマガエルも、水田が全くない市街地では生きていけません。増加は、一時のむなしい現象かもしれません。

コラム：ナゴヤダルマガエル

30～40年前まで、濃尾平野の水田地帯で最もよく目につくカエルはナゴヤダルマガエルでした。ナゴヤダルマガエルは、前頁に掲載したトノサマガエルによく似ていますがやや小型で、成体の雌は体長45～70mm、雄は体長40～60mmです。背中中の斑紋は丸くて数が少なく、背中中央を通るすじはあることもないこともあります（トノサマガエルは常にある）。体つきはトノサマガエルに比べてずんぐりしていて、足が短く、あまりはねません。捕まえてバケツに入れておくと、トノサマガエルはすぐに飛びだしますが、ナゴヤダルマガエルはなかなか逃げません。「トノサマガエルに比べると家来みたいだ」と悪口を言った人もいました。

日本産のカエルは、明治時代にはすでにほとんど区別されていたのですが、ダルマガエルは昭和になってから名古屋近郊で、トノサマガエルと違うものであることが認識された種類です。そのため名古屋周辺のもの単に「ダルマガエル」と呼ばれていたのですが、関東地方にいるトウキョウダルマガエルと区別するため、最近はナゴヤダルマガエルと呼



左：顔を出したナゴヤダルマガエル（港区西福田, 2010-6-12, 上原佳祐 撮影）
右：背中中の斑点が独立し、手足が短い（港区西福田, 2010-6-12, 上原佳祐 撮影）



ナゴヤダルマガエルが棲む水田（港区新茶屋, 2010-6-12, 花井隆晃 撮影）

ばれます。ナゴヤダルマガエルは日本産のカエルの中では最も水との結びつきが強い種類で、親になっても水辺からほとんど離れずに生活しています。「あまりはねない」という性質は実はこのことと関係していて、外敵が来ても跳ねて逃げず、こそっと水中に隠れてしまいます。卵の生み方もトノサマガエルとは違って、トノサマガエルが年に1回だけ産卵するのに対し、ナゴヤダルマガエルは冬眠からさめて産卵し、1ヶ月ほどしてからもう一度産卵します。

ところが、水田の耕地整理が進み水はけがよくなるにつれて、ナゴヤダルマガエルは冬眠からさめてもなかなか産卵できなくなりました。水田に水が引かれやっと1回目の産卵ができて、2回目の卵が準備できる頃には水がなくなってしまいます。小さい水路はコンクリート張りになり、サギなどの外敵から身を隠す場所がありません。いつも水がある大きな水路には、アメリカ原産で大型のウシガエルが入り込み、ナゴヤダルマガエルを食べてしまいます。そのためナゴヤダルマガエルは急速に減少し、現在では絶滅が心配されるほどになってしまいました。

生物は、環境条件との微妙なバランスのもとで生活しています。現在たくさんいる生物も、条件が少し変わるだけで激減してしまうかもしれません。



麻醉下の幼魚・成魚個体（天白区天白川, 2007-8, 谷口義則 撮影）

ウナギ ウナギ目 ウナギ科

Anguilla japonica Temminck et Schlegel

海と川を行き来する魚

【形態】

最大 1 m 程度。成魚の背中側は黒く、腹側は白や黄色。レプトケファルス幼生(海を浮遊移動しやすい扁平な葉状形)期を経て変態し、円筒形の稚魚シラスウナギ(ほぼ透明、体長 5 cm 程度)となる。

【分布と生態】

日本全国に分布。成魚は河川全域、河口のほか溜め池、海(内湾)にも生息する。降海した成魚はマリアナ諸島沖で産卵、2~3日で孵化し、幼生は河口に到達後、遡河して小動物を捕食して成長し、5年から十数年ほどで成熟する。

【さがすポイント】

幼魚は下流部の砂地。成魚は河川内構造物の隙間や水際植物の影に潜む。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧<愛知県：リスト外、全国：リスト外>

市内では、主に天白川と庄内川水系に分布していますが、個体数や密度は市外の河川の平均値と比較すると半分程度です。これは、海から仔魚がなんとか遡上できて、川には十分な餌や生息場所が確保されていないことを意味しています。市内の多くの河川では、改修工事によって餌となる小魚やエビ類、隠れ場となる石の隙間などが減っています。河川生態系で重要な位置を占めるウナギが生息できる川を再生することができれば、他の多くの淡水生物にとっても居心地のよい川が復元されるはずですよ。



麻酔下の幼生個体（名古屋市内、2009-9、谷口義則 撮影）

スナヤツメ ヤツメウナギ目 ヤツメウナギ科

Lethenteron reissneri (Temminck et Schlegel)

生きた化石：ウナギと似て非なる魚

【形態】

最大 20 cm 程度。体側に 7 つのエラ穴が開き、目と合わせて 8 つの目（ヤツメ）があるように見える。幼生（アンモシーテス幼生）には目が無い。

【分布と生態】

非寄生性のヤツメウナギで、一生を河川で過ごす。生まれてから数年間の幼生期を経て変態し、成魚になる。その後は消化管が機能を失い、まったく餌を採らず、翌春に産卵して死ぬ。清澄で低水温の湧き水の出る小河川に生息する。

【さがすポイント】

緑地近くで豊富な湧水が出ている水路等。コンクリート張りでも砂底なら見つかる可能性がある。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠA類（愛知県：絶滅危惧Ⅱ類、全国：絶滅危惧Ⅱ類）

本種が属するヤツメウナギ科は、ウナギと名が付いても似ているのは細長い体型だけです。口にはアゴが無く、2万種以上の魚類の中でもきわめて原始的な姿を留めた古代の生き残りです。幼生期は河床や川岸に溜まった砂泥に潜り、分解された落ち葉や藻類などを食べます。本種は水質の悪化に弱く、また護岸工事等で淀みなどが消失したり、落ち葉等の有機物が溜まる場所が失われたりすると生息できなくなります。市内では、緑地の減少に伴う湧き水の枯渇や水温上昇により、ほぼ絶滅に近い状態に追い込まれています。



(名古屋市内, 2007-9, 谷口義則 撮影)

タモロコ コイ目 コイ科

Gnathopogon elongatus elongatus (Temminck et Schlegel)

田んぼの周りで見なくなったタモロコ

【形態】

最大 10 cm 程度。モツゴに似るが、体はやや太く、1 対の口ヒゲがある。吻が丸く、口が下方にあり、尾ビレの付け根に黒い点がある。体色は褐色がかった銀白色で、体側に太い暗色縦帯がある。

【分布と生態】

静岡県、新潟県以西の本州全域、四国・九州の一部に自然分布する。河川の中・下流域で、川岸の流れの緩やかな所や、河川に繋がる用水路、溜め池に生息し、水生昆虫や藻類を食べる。4～7 月に抽水植物の根や水草に粘着卵を産む。

【さがすポイント】

速い流れにはいない。少々大きめの川なら岸沿いの植物の陰も狙い目。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

本種は、環境省が毎年実施する「田んぼの生き物調査」でよく見られる魚の上位種に名を連ねる魚です。田諸子とも書かれ、ミゾバエという地方名も持つことから、昔から水田周辺水路に多くいたことがうかがい知れます。しかし、ほ場整備が進み、水路のコンクリート化とともに水草が減り、産卵の場を失った本種は水田周辺で見られなくなってきました。本種は、水域間で異なる「顔立ち」の個体が取れることが多く、驚かされます。集団間で遺伝的な差が大きいという研究もあり、地域集団の保全が必要です。



(長久手町, 2010-8, 谷口義則 撮影)

モツゴ コイ目 コイ科

Pseudorasbora parva (Temminck et Schlegel)

都市河川に適応するおちょぼ口で受け口の魚

【形態】

最大 10 cm程度。銀白色で体側に明瞭な黒色縦条が入るが、成長すると消失することが多い。完全な側線を持つ点で近縁なウシモツゴとは見分けられる。

【分布と生態】

関東以西の本州・四国・九州に自然分布するが、他の地域にも移入され定着している。河川の淀み、用水路、溜め池などに生息する。雑食性でユスリカの幼虫や動物プランクトン、付着藻類などを食べる。繁殖期は4~8月。1年で成魚となり、寿命は3年ほど。

【さがすポイント】

名古屋市内では公園の溜め池にも生息する。水面近くにいることが多い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外
愛知県：リスト外
全国：リスト外

クチボソ(口細)の別名でも知られます。水質汚濁等に強く、市内各所に生息します。砂利やコンクリート、プラスチックなどの硬い表面にも産卵でき、オスが卵を守るため、コンクリート張りの水路にも、天敵や餌の問題が無ければ比較的高密度で生息します。一方でブラックバス、ブルーギルが移入されると急速に個体数が減少する魚です。そのため、自然が豊かな地域のレッドリストに本種が掲載されることがあります。愛知県のある溜め池では、ブラックバスを駆除したところ急速に本種個体群が回復しました。

コラム：都市化で増える魚と減る魚

市内の河川には前頁のモツゴ以外にも様々な魚種が生息していますが、特に注目したい魚としてオイカワ(下図)とカワムツ(次頁図)があります。両種はコイ科魚類で、本州を中心とするほぼ全国の河川に生息するオイカワ属の近縁種です。オイカワは成魚で体長 15 cm ほどになり、背中が青灰色で、体側と腹が銀白色をしています。中・下流域の流れが速い瀬を好んで生息し、藻類食に近い雑食性です。一方、カワムツは全長 25 cm 以上に達することもある、背中が黄褐色で、体側に太い紺色の縦線が走る魚です。岸辺の植物が水面に覆い被さるような場所に多く、オイカワよりもややきれいな水を好みます。食性はオイカワよりも肉食性に近いといわれ、陸上から落下する昆虫もよく食べます。このような生態の違いを反映し、両種が同じ川にいる場合、オイカワは瀬に、カワムツは流れの緩い淵に「すみわけ」をすることが知られています。さらに興味深いことに、ここにアユがやって来て浅瀬で藻類を食べ始めると、オイカワは居たたまれずに深みに移動し、そこにいるカワムツを追い出してしまいます。そして、カワムツは瀬の中でもやや深い場所に移動し、水生昆虫などを食べながらアユと共存をはかるようになります。もっとも、これは川の中に多様な水深や流速などの自然環境が残されている場合の話です。名古屋のような大都市にある河川ではどうなのでしょう。



捕獲されたオイカワ（麻醉下）
（名古屋市内、2008-8、谷口義則 撮影）

じつは、オイカワはカワムツにくらべると水の汚染に強い上に、河川改修によって直線化されたり、河畔林が取り払われてコンクリート護岸化されたりして、流速が早くなった河川環境にも適応しているようです。春から夏にかけての繁殖期には、オイカワが浅瀬の砂礫に産卵する姿や瀬で体を横にして藻類をはむ姿が見られます。つまり、市内の河川は、ヘドロ化しているような特定の河川区間を除けば、オイカワが十分に生息・繁殖できる環境であるといえます。反対にカワムツは、河川工事が行われてできた、平瀬ばかりで流速が早く、休む場

所も隠れ場所も少ない単調化した河川では生活が困難です。事実、全国的にもオイカワが増え、カワムツが減る傾向にあります。

近年、市内の水域でタモ網と追い込み網で調査を行ったところ、オイカワは23以上の水域で確認され、単位努力量あたりの採捕数(100㎡の水域で1人が1時間で捕獲した個体数に換算)は平均でおよそ1000個体とはじき出されました。季節によっても若干違いますが、市内に生息する魚類全体の実に3分の1から4分の1位程度はオイカワであると推定できました。これに対して、カワムツはわずか4水域でのみ確認され、単位努力量あたりの採捕数は80個体弱となり、レッドリスト掲載直前といった危うい状況でした。

残念ながら、いつごろからオイカワが名古屋市内で増えたのか、そしてカワムツが減ってきたのか、正確にはわかりません。ただ、近年調査を行った市内と市外の河川群(矢作川などを含む19河川)で採れたオイカワの平均生



捕獲されたカワムツ(麻醉下)
(名古屋市内、2008-8、谷口義則 撮影)

息密度(100㎡あたりの個体数)を比較したところ、市内には市外のほぼ2倍の密度でオイカワが生息し、反対にカワムツは実に30分の1程度の密度でしかない状況が明らかになりました。このことから、名古屋市内を流れるいわゆる典型的な都市型の河川では、オイカワの生息数が格段に増えてきたものと見て間違いないでしょう。

オイカワは、昔からハエ、シラハエの名で釣り人にも親しまれ、食べると美味しい魚です。そして、清流にもたくさん生息する魚種ですから、市内の川に本種がいること自体に問題はありません。ただ、いびつなほど個体数が増えてしまっている点が気がかりです。背景として、生態系保全に無配慮な河川工事のみならず、都市化による河畔林の喪失と、それに伴って河床に直接届く日射の増大が、オイカワの好む温かい水温条件や餌となる藻類の多い条件をつくりだしてきたことも考えられます。今後の緊急課題は、まず水深や流れの速さが複雑な河川環境を再生すること、そして河畔林を増やすことでしょう。カワムツのみならず、レッドリスト掲載種を含む多様な魚類が数多く生息できるような自然環境をいち早く復元する努力が早急になされるべきです。



(守山区庄内川, 2008-7, 谷口義則 撮影)

メダカ メダカ目 メダカ科 *Oryzias latipes* (Temminck et Schlegel)

水田のほ場整備で姿を消してきた魚

【形態】

最大体長4 cm程度、体色は淡い黄色味を帯びた灰褐色を呈する。尾ビレが角張っている点でカダヤシと区別できる。

【分布と生態】

本州以南、琉球列島まで分布する。水田周辺水路、中小河川の淀み等に生息する。雑食性でケイ藻を中心に食べ、陸生の小動物も食べる。産卵期は長く春から秋。受精された卵は、しばらく雌の腹部に付着した後水草等に付着させられる。5~6月に孵化したものは、その年の夏には成熟し産卵する。

【さがすポイント】

水田周辺の水路。溜め池にもいる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類〈愛知県：準絶滅危惧、全国：絶滅危惧Ⅱ類〉

2008年に、市内で魚類の生息が確認できた117地点のうち、メダカは25カ所で生息し、ほとんどが水田周りの小さな水路でした。本種は、もともと水田と段差なしに接続する素堀りの用排水路に多く見られました。しかし、水田面積の減少、ほ場整備による水田-水路間の移動の制限、水路のコンクリート張りによる水草の減少により、市内でも急速に姿を消してきました。水田の減少に歯止めをかけ、メダカが水田-水路間を行き来できるように工夫しない限り、名古屋では幻の魚になってしまうかもしれません。



(守山区, 1990-9-8, 高崎保郎 撮影)

ハグロトンボ トンボ目 カワトンボ科

Calopteryx atrata Selys

翅が真っ黒なトンボ

【形態】

体長は63mm内外で、翅は光沢のある黒一色、雄の腹部は金緑色に輝き美しい。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。

幼虫は平地の中小の緩流や、大河の淀んだ岸に棲む。細長い体に細長い尾が3本ある。成虫は普通羽化した川の周辺にいるが、稀に遠くまで移動することがある。

成虫の出現期は5~10月である。

【さがすポイント】

守山区の庄内川の流域で、本流に小河川が流れ込む地点などによく見られる。日陰の墓地などにもいることもある。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

緩流にいる普通種でしたが、水質汚濁等により減少しています。

かつては千種区本山の交差点辺りでも普通に見られ、北区、西区などでの記録もありました。しかし最近では、庄内川や矢田川沿い及びその支流の限られた場所に生息しているだけです。

平地の比較的水質が良く、岸辺に植生も多い、良好な緩流域の指標種といえます。しかし名古屋市ではすでに絶滅した同属のアオハダトンボより汚染に強く、平野部の川に最後まで残ることができるのが本種です。



(守山区小幡緑地, 2000-7-9, 安藤 尚 撮影)

ウチワヤンマ トンボ目 サナエトンボ科 *Ictinogomphus clavatus* (Fabricius)

お尻にうちわをつけたようなトンボ

【形態】

体長は 80 mm 内外で、体は黒色の地に黄色の斑紋がある。腹部第 8 節の側縁が広がってうちわ状になっている。うちわの広がりは雄のほうが顕著である。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。

5 月から 9 月にかけて出現し、成熟した雄は、岸边や水中から伸びた草や小枝などの先端に、体を水平にして静止し、縄張りを見張っている。他の雄が近づくと飛び立って追い払い、また戻って静止する動作を繰り返す。

【さがすポイント】

平地や丘陵地の抽水植物が生育する、やや大きく開放的な池に生息する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

天気が良い日には、池の上を水面すれすれに飛び回ったり、少し上を悠然と飛んでいたります。また、ヨシなどの穂先や枯れ茎の先、ときには棒杭の先などに静止しています。

やや大形で、黒と黄色の体の模様が目立ち、腹部の先が広がってうちわのように見えるので、見つけやすいサナエトンボの一種です。

水がきれいで、ヨシやガマなどの水生植物が生える明るい池に生息するウチワヤンマは、良好な水辺環境の指標種です。



(名東区猪高緑地, 1991-5-26, 高崎保郎 撮影)

サラサヤンマ トンボ目 ヤンマ科 *Oligoaeschna pryeri* (Martin)

ハンノキの疎林を飛び回る

【形態】

小型のヤンマで、体長は 65 mm、体は黒色の地に黄緑色の斑紋がある。

【分布と生態】

日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。成虫の出現期は 5~7 月で、幼虫は湿地林内の小湿地、小水溜まりに棲む。雄は林内の空間や湿地上下を低く巡回飛翔し縄張りを形成する。生息に適した場所では個体数も多い。比較的分散性があり、名古屋市街を 6 km 程移動したと推定される 2 例がある。

【さがすポイント】

市東部丘陵の湿地とその周辺、とくにハンノキなどの植生に覆われた湿地内を、雄は低くパトロール飛行している。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧〈愛知県：リスト外、全国：リスト外〉

守山区、千種区、名東区などの丘陵に点在する林内湿地がある場所で見られます。生息地は限られますが、その場所での雄の個体数は少なくありません。

幼虫は、林内または林縁の湿地や水溜まりに生息し、成虫も同じ場所を生活空間としていることから、主として丘陵地の湿地と湿地林を含む、生物多様性に富む水辺の指標となります。

愛知県内では 50 年余前、千種区東山公園裏の桜池で採集されたのが最初の記録ですが、この産地は失われました。よい水辺環境の保全が望まれます。



(名東区猪高緑地, 1987-6-13, 高崎保郎 撮影)

ハッチョウトンボ トンボ目 トンボ科

Nannophya pygmaea Rambur

日本で一番小さなトンボ

【形態】

体長は 19 mm内外で、体長では国内最小のトンボである。雄は成熟すると真赤色になり、雌は黄色・茶色・黒色の斑模様である。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布する。成虫は 5～9 月に出現し、丘陵地を主として平地から低山地に分布する。

一般に発生地を離れないとされるが、移動・分散性もかなりあるらしい。

【さがすポイント】

市東部丘陵の、日当たりの良いモウセンゴケ、サギソウ、ミミカキグサが生育するような湿地や、浅い水溜まり、時には初期の廃田に生息する。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧〈愛知県：リスト外、全国：リスト外〉

市域東部に隣接する長久手町、瀬戸市などの丘陵には生息地が多くありますが、市内では減少しつつあります。守山区及び人為的に管理された東山公園(千種区)と島田公園(天白区)で見られますが、猪高緑地(名東区)の廃田跡の湿地は植生遷移*が進んだため絶滅し、昭和区、緑区の湿地でも姿を消した可能性があります。

地史を物語る多様な形状の湿地と、それを涵養する湧き水を供給する二次林*等背後の自然を合わせ、優れた環境の指標となる種で、多くの都府県がレッドリストに載せています。



(岐阜県輪之内町, 1998-1-11, 岡田正哉 撮影)

ケラ バッタ目 ケラ科 *Gryllotalpa orientalis* Burmeister

田んぼから「ジー」という鳴き声が聞こえたら

【形態】

大きさは30~35mm。色はこげ茶色。前脚はモグラの手のように扁平で太く、土を掘るのに適した形になっている。

【分布と生態】

北海道から琉球列島まで全国で見られる。雑食性で、水面も上手に泳ぐことができる。5~7月に産卵、初期幼虫は集まって棲み、9~10月に羽化して成虫越冬するものと、幼虫越冬して翌年羽化するものがある。春と秋に鳴き声が聞こえるのはこのためである。

【さがすポイント】

昼間は、湿った田畑の石や枯れ木の下などで見つかる。夜間よく飛び、灯火採集をするとよく集まる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

水田や湿地あるいは畑などの湿った土の中にトンネルを掘って生活し、「ジー」と低く続けて鳴きます。ミミズが鳴いているというのはケラの鳴き声です。

最近あまり見られなくなりましたが、水田が比較的多く見られる庄内川以西の港区、中川区や湿地の多い守山区、千種区などに生息しています。

農耕地周辺の畦や湿った草地を生息場所とすることから、鳴き声が聞かれる周辺には良好な二次草地*や田園環境が残されていることがわかります。



上:幼生 (千種区平和公園, 2002-8-18, 田中多喜彦 撮影)
右下:成虫 (千種区東山公園, 1992-9-11, 田中多喜彦 採集)

ヒメタイコウチ カメムシ目 タイコウチ科 *Nepa hoffmanni* Esaki

湧水のある湿地の住人

【形態】

体長 18 mm~22 mm、タイコウチよりかなり小さく、尾端の呼吸管は短い。

【分布と生態】

日本での分布は局限され、濃尾平野と兵庫県の南部、香川県高松市等で発見されている。国外では朝鮮、中国東北部、華北などに分布する。

年1化で、西尾市の記録では、越冬成虫の産卵は4月、幼生は5月から9月にかけて出現する。新成虫は8月から10月に出現するが年による差が大きい。

【さがすポイント】

丘陵の湿地の湧水付近のコケの間や、溝の落葉間、水草の根際などに棲み、ふつう池沼の水中には見られない。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類〈愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外〉

守山区、千種区、名東区、天白区などの市東部丘陵のシラタマホシクサやトウカイコモウセンゴケなどの生える小湿地で見られますが、市西部の沖積平野の低湿地や水田には見られません。

西尾市の発生地が愛知県の天然記念物になっています。





(知多半島, 1993-7-12, 岡田正哉 撮影)

ヘイケボタル コウチュウ目 ホタル科

Luciola lateralis Motschulsky

光を失った止水域の住人

【形態】

体長7~10mm。前胸背が淡紅色で、黒色の太い縦条がある。上翅は黒色で紫色を帯びる。腹部は7節あり、雄は5節、6節目が発光器になっており淡黄色。雌は5節目が発光器で淡黄色、6節目は淡紅色である。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布し、水田や小川周辺で生息している。6~8月に出現する。幼虫は水生で、水田や小川等でモノアラガイやカワニナを食べ成長する。

【さがすポイント】

現在市内では、守山区や緑区の一部の小川や池で発生しているにすぎない。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧 I B類 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

夏の夜を彩る風物詩として、ホタルはあまりにも有名です。かつては、川にはゲンジボタル、水田にはヘイケボタルと市内のほとんどの地域で見られました。しかし市街地が発展すると共に、いつの間にか姿を消してしまいました。

水田とその間を流れる小川のある風景が、ヘイケボタルの生息環境でした。今では、水田の水路や池の岸辺などはコンクリートで固められ、水中で生活していた幼虫が蛹になる土手もなくなってしまいました。



(千種区平和公園, 1994-6-24, 岡田正哉 撮影)

ミドリシジミ チョウ目 シジミチョウ科

Neozephyrus japonicus (Murray)

夕日に映える宝石の輝き

【形態】

前翅長 16~23 mm。翅の裏面は茶褐色。後翅中央部の白色条は細く鮮明である。雄の翅の表面は金緑色に輝き、雌は黒褐色で4つの斑紋のタイプが現れる。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州に分布し、平地から山地まで広く生息する。年1回6~7月に現れる。訪花性は弱いがクリやノリウツギの花で吸蜜する。幼虫は、カバノキ科のハンノキ、ヤマハンノキ、ミヤマハンノキ等を食べる。

【さがすポイント】

市東部丘陵の山間の湿地で、ハンノキの群生している所に多い。昼間は不活発で、近くの葉上に静止している。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 (愛知県：リスト外、全国：リスト外)

守山区や名東区にあるため池の奥には湧き水があり、湿地になっているところがあります。そんな場所にはハンノキの林があり、初夏の頃、夕方になると羽の表面が緑色の金属光沢に輝くミドリシジミが乱舞していました。しかし、このような環境は非常に少なくなっていました。

ハンノキはよく湿った環境に生える先駆的な樹木です。ハンノキを食べるミドリシジミは、人が関与して作られ管理することで維持されてきた、歴史のあるハンノキ林と湿地の申し子のような存在となっています。



左:雄,右:雌 (守山区,1993-8-10,須賀瑛文 撮影)

アシナガグモ クモ目 アシナガグモ科

Tetragnatha praedonia L. Koch

体も脚も細長く、棒のようなクモ

【形態】

雌の体長は13~15mm、雄は10~12mmで細長い。上顎は大きく、前方に突出し前開きとなる。腹部は銀色鱗で包まれ、背面には縦長の黒褐色斑が波形に走り、両側面と正中部は明るい。歩脚は長く、特に第1脚は体長の3倍ほどある。

【分布と生態】

北海道から九州まで広く分布する。水辺を好むが、草地、雑木林、公園などにも生息する。植物の茎や枝葉の間に30cmほどの水平円網を張る。普段は網の中央部で静止し、体にそって第1・2脚を前方に、第3・4脚を後方に延ばす。

【さがすポイント】

河川、水路・池沼などの周辺をさがす。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 愛知県：リスト外、全国：リスト外

アシナガグモは水辺に多く生息しています。市内で生息密度の高い地域は、小幡緑地、東谷山周辺、大高緑地、庄内川中流域などです。場所によっては、網どうしがくつつくように何十と並んでいます。普段は、網で餌が掛かるのを待っていますが、危険を感じると逃げだして枝や茎に静止します。そのときも、棒のような姿勢をとります。春から夏にかけて卵を産みます。このクモの生息している場所は、たくさんの小動物が生きている、環境の良好な水辺なのです。



右:背割堤のヨシ原 (港区庄内川河口, 2009-6, 天野 勲 撮影)
左下:雌 (港区庄内川河口, 2009-6, 天野 勲 撮影)

ウモレベンケイガニ 十脚目 イワガニ科 *Clistocoeloma merguense* De Man

ヨシ原の泥土にうずもれ動かないカニ

【形態】

雄の甲長 12 mm位、甲幅 20 mm位で長方形のカニ。全身黒色で、短毛でおおわれている。鋏脚の先が赤いのはベンケイガニの仲間であることをあらわす。

【分布と生態】

東京湾以南に分布。紀伊半島、四国、山口湾周辺、福岡、佐賀に生息する。名古屋市では、庄内川河口、ヨシ原周辺の石、漂着物の下の湿り気のある場所に生息する。半分位土にうずもれているので発見しにくい。

【さがすポイント】

河口、ヨシ原周辺。漂着物の下の湿り気のある場所。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：調査対象外、全国：リスト外）

かつては、庄内川河口右岸（背割堤）のヨシ原と天白川河口右岸のヨシ原の2カ所で観察されました。しかし、庄内川、天白川両岸の堤防工事や埠頭の埋め立て工事等により、生息地である河口の干潟・ヨシ原が減少しました。

2009年6月に庄内川の背割堤のヨシ原で徐々に生息が確認されました。このような干潟、ヨシ原にはクシテガニ、ユピアカベンケイガニも生息しています。

ウモレベンケイガニは、各地で絶滅危惧種に指定されています。生息地である干潟、ヨシ原をこれからも残していきたいものです。



(港区藤前干潟, 2004-9, 天野 勲 撮影)

ヤマトオサガニ 十脚目 スナガニ科

Macrophthalmus (Mareofis) japonicus (De Haan)

水中から眼をだし、食事中

【形態】

雄の甲長 23 mm位、甲幅 36 mm位の四角いカニ。甲面に顆粒が散在し、長い眼柄をもつ。雄の鋏脚は強大。

【分布と生態】

青森湾以南・沖縄諸島、台湾まで分布。市内では、藤前干潟、庄内川河口干潟に生息。泥底干潟を好む。

【さがすポイント】

干潮時の泥底干潟で観察できる。

【よく似た種類】

ヒメヤマトオサガニはやや小型で、ウェイピングも違いがある。ヤマトオサガニは鋏脚を内側から外側に回し、ヒメヤマトオサガニは鋏脚を上下に動かす。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：調査対象外、全国：リスト外）

藤前干潟などの泥底干潟に深さ 15 cm くらいの巣穴を掘って生息しているカニで、干潮時・満潮時に眼柄を水面に立てて警戒しながら摂食します。干潮時には干潟上で、ゆっくりした動きのウェイピングを観察できます。

ヤマトオサガニは広い泥底干潟ではたくさん生息し、野鳥の餌となっています。抱卵回数が他のスナガニ類に比べて多く、1回の繁殖期間中に3、4回抱卵します。

名古屋港には昔から生息していたようで、かつての埋立工事の時には、化石がたくさん見つかりました。



(庄内川河口域, 2009-9-18, 木村昭一 撮影)

ヒロクチカノコ アマオブネガイ目 アマオブネガイ科 *Neritina (Dostia) violacea* (Gmelin)

干潟の泥の上の半球形の黒い貝

【形態】

殻径約 2 cm の半球型平巻きで螺塔が現れない。名前の通り殻口は広がる。蓋は半円形で、石灰質。

【分布と生態】

東京湾(絶滅)、三河湾、伊勢湾、琉球列島等に分布する。中国大陸南部からオーストラリア北部にかけても分布するが、日本本土産は独立種の可能性が高い。

【さがすポイント】

庄内川河口部周辺のヨシ原湿地周辺の、直接河川水の当たらない淀んだ泥干潟を好み、朽ち木や転石の下面に集まる。

【よく似た種類】

護岸等にみられるイシマキガイ(右下図)は殻が球形に近い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類<愛知県：絶滅危惧Ⅱ類、全国：絶滅危惧Ⅱ類>

藤前干潟の干潟上部の転石地、庄内川下流から河口域にかけてのヨシ原湿地内の泥底に割合多く棲んでいます。拾い上げると殻の口の方はつやがあり、サザエのように石灰質でできた半円形の厚い蓋が見えます。名前の通り殻の口が広いので、他種との区別は簡単です。

この場所は、愛知県内で最も簡単にこの貝を観察できる場所で、庄内川の水量が割合豊かで水質がよく、ヨシ原が比較的よく保存されているからだと思います。





左:貝殻 (庄内川河口, 2009-9-13, 木村昭一 撮影)
右:保全されたヨシ原湿地では足の踏み場もないほどに群生 (庄内川河口, 2009-9-13, 木村昭一 撮影)

カワザンショウガイ 盤足(二ナ)目 カワザンショウガイ科 *Assiminea japonica* Martens

潮の影響を受ける場所にいるサンショウの実のような貝

【形態】

殻高5~9mmの小さなタニシ型の貝で、殻表は褐色の殻皮で覆われる。殻には黒色の色帯があり、殻の先端が通常欠ける。

【分布と生態】

市内では庄内川下流域~河口域、藤前干潟のヨシ原湿地に多く、ヨシ原のない護岸や石の周辺にも付着する。ヨシ原湿地と上部の陸上植生が護岸工事などで荒らされ、生息地が減少している。

【さがすポイント】

庄内川河口の保全されたヨシ原湿地。

【よく似た種類】

よく似た種が多いが(次頁参照)、カワザンショウガイ類では最も大きく、殻の先端が通常欠ける点で区別できる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市:リスト外<愛知県:リスト外、全国:リスト外>

名前は川に棲んでいるサンショウの実に似た貝という意味で、河川の下流域から河口域の湿地に主に棲んでいます。河口域のヨシ原が発達した塩性湿地に棲んでいる貝の多くは、ヨシ原がなくなると生きていけないのですが、この貝だけは比較的環境の変化にも強く、護岸や水辺の石組み、捨て石の周辺にも生息します。ただし、堰などによって、海水の影響を全く受けなくなってしまった河川では、この貝も棲むことができません。この貝が見つかる場所は、多少なりとも海水の影響がある水辺だと言うことができます。

コラム：庄内川河口のヨシ原湿地の貝類とその保全



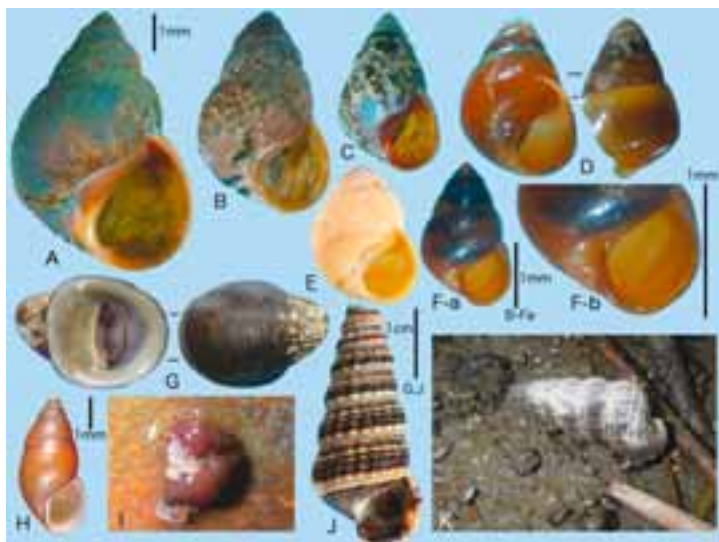
昭和9年熱田区で採集された
オカミミガイ（原田一夫氏所蔵）

庄内川河口のヨシ原湿地には、カワザンショウガイの他にも多くの貝類が生息しています。その中で特に注目されるのはオカミミガイです。オカミミガイは殻長3~4 cmの紡錘形の巻貝です。殻口は耳状に厚くなり、白色で、若い個体の殻は褐色の厚い殻皮でおおわれていますが、はがれている個体も多く見られます。干潟の陸側のヨシ原内に生息していて、細いゼラチン状の卵を泥上に生み、フ化した幼生は海でプランクトン生活をします。生息には陸上植生まで良く保存されたヨシ原内に、朽ち木や落ち葉などが堆積した環境が不可欠です。また、親貝は肺呼吸をしているので、常に海水につかる場所では生きていけません。そのため、本種は名古屋市で



2009年9月に名古屋市庄内川河口より採集されたオカミミガイ
 A：オカミミガイ(生貝) B：朽ち木の下に集まっていたオカミミガイ
 C：a.底質に潜りかけている個体 b.オカミミガイと同所的に見られることの多いウモレベンケイガニ c.表面を歩行しているオカミミガイ d.オカミミガイの糞
 D：オカミミガイの生息するヨシ原

絶滅危惧ⅠA類、愛知県で絶滅危惧ⅠB類、国で絶滅危惧Ⅱ類にランクされています。平成21年の調査で、市内では昭和9年以来75年ぶりに、健全な個体群を庄内川の河口背割堤(中堤)の非常に狭い範囲(六畳間ほど)で発見しました(前頁下図)。比較的長い間改変を受けなかったヨシ原湿地で何とか生き残ったと考えられます。このような、環境の保全されたヨシ



名古屋市庄内川河口ヨシ原湿地の貝類

A: ヒラドカワザンショウ B, C: クリイロカワザンショウ D: ムシヤドリカワザンショウ E: ツブカワザンショウ F: ヨシダカワザンショウ G: ヒロクチカノコ H, I: ワカウラツボ J: フトヘナタリ K: フトヘナタリとカワザンショウガイ類

原湿地だけをすみかとする貝類は多く、市内でも多様な貝類(上図: A 以外は全て名古屋市、愛知県、国いずれかの絶滅危惧種)が生息しています。

市内ではもう1種のオカミミガイ科、キヌカツギハマシノミガイ(右図: 名古屋市で絶滅危惧ⅠA類、愛知県で絶滅危惧ⅠA類、国で絶滅危惧Ⅱ類)の生息記録がありますが、記録されたヨシ原湿地は堤防工事で荒らされてしまいました。ヨシ原湿地の陸側に生息するオカミミガイ科貝類は特に堤防工事の影響を受けやすい仲間です。新たに発見されたオカミミガイの生息地はもちろん、多くの希少種が現在もお



キヌカツギハマシノミガイ
(早瀬, 1998)

生息している庄内川河口周辺のヨシ原湿地を保全する努力が必要です。



(守山区, 1990頃, 木村昭一 撮影)

マルタニシ 盤足(ニナ)目 タニシ科 *Cinpangopaludina chinensis laeta* (Martens)

昔は食べるほどいた田螺 (たにし)

【形態】

成貝では殻高6cm。各螺層は丸く膨れ、縫合は深くくびれる。殻の表面に縫い跡のような微小なくぼみの列がある。

【分布と生態】

市内では北区、守山区の限られた場所に生息しているようである。かつては食用にするほど多産し、最も親しみのある淡水貝であった。

【さがすポイント】

里山*に隣接した水田や用水路の砂底に見つかるかも知れない。

【よく似た種類】

オオタニシ(右下図)は殻が角張り、さらに大きくなる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧 I A 類<愛知県：準絶滅危惧、全国：準絶滅危惧>

タニシ科の貝類は名古屋市内にヒメタニシ、オオタニシと本種が生息しています。田螺と漢字で書かれるように、水田の周辺にごく普通に生息する大型の淡水産巻貝で、貴重なタンパク源として利用されました。

里地の淡水貝の代表といえるかもしれない、そのマルタニシが絶滅危惧種とは、我々の身近な水辺の変化、荒廃ぶりを端的に示しているといえるでしょう。





(守山区, 1990頃, 木村昭一 撮影)

イシガイ イシガイ目 イシガイ科

Unio douglasiae nipponensis (Martens)

池や川に普通にいた細長い二枚貝

【形態】

殻長7cm程度であるが、湖沼産は大型になる傾向がある。殻長に比べて殻高が小さく輪郭は細長い方形。殻頂部分には弱いさざ波状の彫刻がある。蝶つがいの部分には歯がある。

【分布と生態】

市内では北区、守山区の河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥で水質の良い限られた場所に生息しているようである。

【さがすポイント】

流れの緩やかな河川下流域や用水路の砂泥底にいるかも知れない。非常に稀であるが、ヨシノボリ類が多く棲む環境のよいため池に生息している場合がある。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠA類<愛知県：絶滅危惧ⅠA類、全国：リスト外>

淡水に生息しているシジミ類より大型で黒い二枚貝がイシガイ科の貝類です。イシガイ科の貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥で水質の良い場所に生息しています。市内だけでなく愛知県全域でもこのような場所はほとんど破壊され、1960年代には、多くいたイシガイ科の貝類全体の生息は危機的状況にあります。

現在、市内にはイシガイとドブガイが生息していますが、イシガイはため池よりも河川下流域の小川や用水路を好むため、ため池に比較的多く生息するドブガイに比べて、生息状況はさらに危機的です。



(港区, 2001-6-9, 木村昭一 撮影)

ドブガイ イシガイ目 イシガイ科 *Anodonta woodiana* (Lea)

ため池にいる大きな二枚貝

【形態】

河川に生息する個体は殻長 10 cm 程度であるが、湖沼産は大型で殻長 20 cm を越える個体も稀でなく、生息場所によって殻の大きさや形態が大きく変異する。

【分布と生態】

市内では北区、守山区などの河川、ため池に生息している。本種を含むイシガイ科の貝類は、河川の下流域や平野部の用水路などの緩やかな流れで、底質が砂泥で水質の良い場所に生息している。

【さがすポイント】

ドブガイは、ヨシノボリ類が多く棲む環境のよいため池には生息している場合がある。池干しなどの機会に探すと見つかるかもしれない。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧<愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外>

ドブガイは市内で観察されるイシガイ科の貝の中でも特に大型の貝殻を持ちます。大きくて黒いため、カラスガイと混同されることも多いのですが、カラスガイには蝶つがいの部分に歯があるのに対して、ドブガイには歯がありません。

イシガイ科全体の生息は危機的状況ですが、その中でため池に多く生息しているドブガイは最も生息場所が残っている種です。しかし、どんなため池にも生息出来るわけではなく、幼生の宿主となるヨシノボリなどの淡水魚が豊富な池にしか生息できません。

【形態】

多年生草本。地下に球茎があり、そのまわりに子球がつく。葉は毎年1枚だけ出て、高さ40～50cm、葉身は鳥足状に11～17の小葉に分かれる。花は葉の下につき、本体は小さく目立たないが、葉が変化した紫色の仏焰苞に包まれ、これが花のように見える。花のつく軸の先は一度曲がって仏焰苞の外に出、再び曲がって立ち上がり、先は長く伸びて糸状に垂れる。

【分布と生態】

北海道南部、本州、四国に分布し、愛知県では海岸に近い丘陵地の常緑樹林下に多い。大株は雌花、小株は雄花をつける。

【さがすポイント】

下の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：リスト外、全国：リスト外）



（緑区, 2001-4-14, 芹沢俊介 撮影）

ウラシマソウ 単子葉類 サトイモ科

Arisaema thunbergii Blume ssp. *urashima* (Hara) Ohashi et J. Murata

長い釣り糸を垂らした変わった花

「草なんてみんな似ていて区別できない」と思っている人でも、一度見たらすぐわかる植物の一つが、ウラシマソウです。花は葉の陰に咲くのであまり目立ちませんが、よく見ればとても奇抜な格好をしています。ただし有毒植物ですから、その点は注意してください。

愛知県では知多半島に行けば普通にみられますが、名古屋市内では少なく、市街地に残存する自然度の高い林の指標となる植物です。熱田神宮の森の中にも生えています。



(港区, 2004-4-11, 近藤洋一朗 撮影)

ハハコグサ 合弁花類 キク科

Gnaphalium affine D. Don

優しい名前の春の草

【形態】

越年生の草本。茎は束生してひろがり、高さ 15~40 cmになる。葉は互生し、倒披針形*で長さ 2~6 cm、柄はなく、基部はやや広がって茎を抱く。茎や葉に密に白い毛がある。花は 3~5 月に茎の先につき、黄色。総苞は長さ約 3 mmで、花弁は目立たない。若芽は春の七草のオギョウ(御形)として食用にされる。

【分布と生態】

日本全国の路傍、畑地、庭などに見られる雑草で、国外では朝鮮半島、中国大陸からマレーシアやインドまで分布する。夏~秋にも花をつけることがある。

【さがすポイント】

右の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

植物の名前には、よく意味のわからないものがあります。この母子草もその一つで、本当はほうける（綿のようになる）草だとも言われますが、はっきりしません。しかし、語源はどうであれ、母子草の名はこの優しい草にぴったりです。

全国の道ばたや畑などに普通にみられる植物で、名古屋市でもまだあちこちに生えています。しかし、それでも市街地では次第に少なくなっており、かわって帰化植物のチチコグサモドキやウラジロチチコグサが増加しています。



(港区, 2004-4-11, 近藤洋一朗 撮影)

ニホンタンポポ 合弁花類 キク科

Taraxacum platycarpum Dahlst.

誰でも知っている春の野の花

【形態】

多年生草本。ちぎると乳液が出る。葉は株のもとから出て放射状に広がり、長さ8~35cm、くし状に切れ込むこともほとんど切れ込まないこともある。花期は3月末~5月、花は黄色で直径3.5~5cm、総苞片は上を向いて重なり合い、その先端に突起がある。外来のタンポポは、総苞片が下向きに反り返る。

【分布と生態】

東北地方南部から九州北部にかけて分布し、平野部、丘陵地などの人里周辺の草地に多い。

【さがすポイント】

次頁の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

タンポポには、昔から日本にあったものと、明治になってヨーロッパから入ってきたものがあります。日本の大都市はほとんどどこも外来のタンポポばかりになってしまいましたが、その中で名古屋市は、ニホンタンポポがまだかなり見られる数少ない都市の一つです。

ニホンタンポポは、安定した草地を指標する植物です。ニホンタンポポが生き続けることができる環境を、名古屋市内にもずっと残していきたいものです。

樹林地
草地
水辺
都市部
植物
哺乳類
鳥類
は虫類
両生類
魚類
昆虫類
クモ類
カニ類
貝類

コラム：外来タンポポとニホンタンポポ

タンポポには、前頁でも説明したように、昔から日本にあったニホンタンポポと、明治時代になってヨーロッパから入ってきた外来タンポポがあります。外来タンポポには2種類あって、わた毛の下の実が黄褐色のものがセイヨウタンポポ、赤褐色のものがアカミタンポポです。

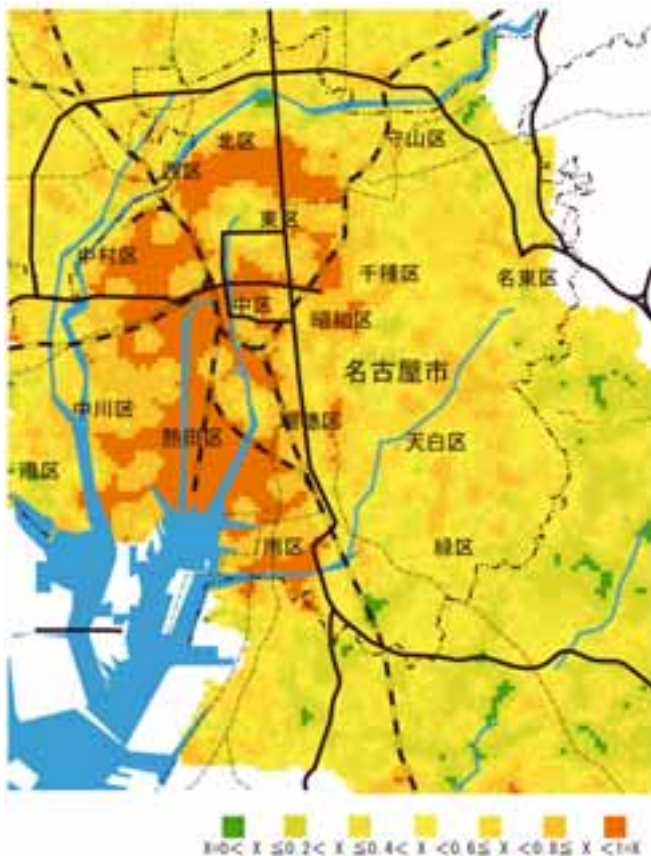
外来タンポポは、花が咲き花粉もできますが、実はその花粉は役に立っていません。子房の中の胚珠は、受精しなくても無性生殖を行って種子になります。一つの頭花にある花弁（実際は1枚の花弁が本当の花にあたる）は数が多く、一つの花弁につき1個のわた毛ができるので、わた毛の数も多くなります。わた毛についている実は小さくて軽く、遠くに飛んで行きます。そして飛んでいった先に仲間がいなくても、どんどん増えていくことができます。一方ニホンタンポポは普通の有性生殖を行い、しかも花粉が同じ株の花のめしべについても受精しないという性質を持っています。一つの頭花にある花弁は数が比較的少なく、わた毛につく実はやや大きめです。だからわた毛はあまり遠くに飛ばず、飛んでいったとしてもそこに仲間がいなければ殖えることができません。要するに、人間が土地をかき乱してそこに生えていた植物をなくしてしまうと、外来タンポポはあまり困らないのですが、ニホンタンポポはなかなか戻れません。

ところが、タンポポが生える場所には他の植物も生えてきます。ニホン



総苞片が反り返るセイヨウタンポポの花
(刈谷市, 1985-4-22, 芹沢俊介 撮影)

タンポポは夏の間休眠し、他の植物が枯れた冬に葉を上げるといった性質を持っています。一方外来タンポポは、一年中葉をつけています。他の植物がなければいつも光合成できて都合がよいのですが、他の植物があるとその陰になり、枯れてしまいます。つまり、人間が土地をしばしば改変する都市では、外来タンポ



名古屋市とその周辺のタンポポ地図(1995～1996年調査)

ポは増加し、ニホンタンポポは消えてしまいます。土地の改変が少なく他の植物が多い郊外では、ニホンタンポポは生き続けることができますが、外来タンポポは衰退します。名古屋市内では圧倒的に外来タンポポが多く見られますが、名古屋城、熱田神宮、東山公園、庄内川堤防のような安定した緑地にはニホンタンポポが生育しています。近くにあるタンポポの種類を確認して、ニホンタンポポと外来タンポポの割合を示す地図（タンポポ地図）を作ってみましょう。上のタンポポ地図では、赤い場所ほど外来タンポポが多く生えています。



(千種区東山公園, 2006-5-27, 小笠原智子 撮影)

アオバズク フクロウ目 フクロウ科 *Ninox scutulata* (Raffles)

ホッホを聞けば、明日は晴れ？

【形態】

全長 27~31 cm。ズクと付くが耳のような羽角があるミミズクではない。頭部から体の背面は黒褐色。腹面には白地に黒褐色の太い縦斑がある。尾はフクロウ類にしては長め。目は黄色。

【分布と生態】

ほぼ全国に夏鳥*として渡来し、低地から低山の自然林のほか、大木のある社寺林等に生息する。樹洞に産卵してヒナを育てるが、巣箱や鉄塔の隙間なども利用する。主にガヤカナブン、セミ等大型の昆虫類を捕食する。

【さがすポイント】

神社の大木の多い所。夜鳴き声を聞いた近くで、昼間姿が見られることも。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧Ⅱ類（愛知県：準絶滅危惧、全国：リスト外）

青葉の頃渡来するのでこの名があります。フクロウ類特有の顔盤が無く尾も長めなので、頭の大きいタカという感じもします。ホッホ、ホッホと二声ずつ鳴く声をフクロウ（ゴロスケホーホーと鳴く）の声と思っている人も多いようです。フクロウが鳴いた翌日は晴れになるという言い伝えも、多分この鳥のことでしょう。市内では随分減ってしまいましたが、神社や寺の森等、まだ来る所が少し残っており、東山動物園でも毎年子育てをしています。夏の宵の風物詩とも言えるこの声をこれからも聞き続けたいものですね。



(中区錦三, 1970-5-24, 小笠原昭夫 撮影)

コシアカツバメ スズメ目 ツバメ科 *Hirundo daurica* Linnaeus

天井に張り付けた徳利形の巣

【形態】

全長 17~20 cm。背面は藍色光沢のある黒で、腰は赤褐色。目の後ろ~頭側も赤褐色。下面は淡褐色で、黒褐色の細い縦斑がある。尾はツバメよりやや長い。

【分布と生態】

ツバメよりひと月余り遅れて渡来し、低地~低山で繁殖する。巣は建造物のひさしに、横にした徳利を押しつけたような形に作るため、“とっくりつばめ”の別名がある。ツバメより滑翔が多く、尾羽は後ろへ並行に伸ばしている。ジュビッと濁った声で鳴く。

【さがすポイント】

泥で作った徳利型の巣。お椀型の巣を作るツバメとは腹と腰の色も違う。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

ツバメと同様、カヤハムシ、カメムシ等を空中で捕食しますが、繁殖習性は単独性のツバメと集団性のイワツバメの中間で、数つがい接近して営巣します。1970年頃までは名古屋駅前や栄周辺のビルにも営巣していましたが、巢材の泥も餌も都心では得にくくなったためか、まもなく都心部から姿を消し、最近では、周辺部でもあまり見かけなくなりました。現在、主に市の東部や北部で観察され、守山区、天白区、北区では繁殖も記録されています。

ツバメとの微妙な違いに注意して観察してください。



(西区庄内緑地, 2008-3-9, 後藤悠輔 撮影)

ウグイス スズメ目 ウグイス科 *Cettia diphone* (Kittlitz)

名古屋市全域に棲む日本一の鳴鳥

【形態】

全長雄約 16 cm、雌約 14 cm。全身ほぼ茶褐色で淡色の肩斑があり、下面は上面より淡色。メジロより尾が長い。

【分布と生態】

低地～亜高山で繁殖し、北方や高地で繁殖したものは、暖地へ移動して冬を越す。市街地で見られるのは、秋冬が主で、早春に囀り（さえずり）始めるまでは、チャツ、チャツ（＝笹鳴き*という）としか鳴かないため、都会でホーホケキョが聞ける期間は短い。ホトトギスに托卵*されることがある。

【さがすポイント】

下生えのある所で、鳴声を頼りに。冬、水浴び場や餌台に来ることもある。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

メジロとウグイスの写真を見せ、「どちらがウグイス？」と訊くと、多くの方がメジロの方を指します。ウグイスは、いわゆるうぐいす色ではないのです。しかしさえずりを聞いて間違える人はいません。

“ホーホケキョ”を聞いたなら、日付と場所を記録しておいてください。2009年現在、市内全区にウグイスはいますが、今後なくなる区があるかもしれません。囀り始める日も変わるかもしれません。聞き流さず、こまめに記録することが、生き物や環境の変化を知るきっかけになるのです。



(名東区花園町, 2007-9-17, 来田亨子 撮影)

ニホンヤモリ 有鱗目トカゲ亜目 ヤモリ科 *Gekko japonicus* (Dumeril et Bibron)

夜、出没する忍者

【形態】

全長 100~140 mm、頭胴長 50~72 mm。頭部は扁平である。体色は灰褐色で暗色の不規則な斑紋があるが、周りの環境に合わせて変化する。指趾の先に密生するごく小さい鉤状突起で、ガラス面や天井に止まることができる。

【分布と生態】

本州、四国、九州、対馬に分布する。夜行性で、民家や神社、寺に生息する。雌は5月下旬~7月下旬に1~2回、2~3個の卵を天井裏、戸袋、壁の隙間等に産卵する。

【さがすポイント】

夏の夜、電灯に集まる昆虫を食べに家の壁や窓に現れる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

民家や社寺といった人間の生活圏に生息する、人類依存型野生動物です。害虫を食べるので家を守るとされ、漢字では「守宮」あるいは「家守」と書きます。

古くから人間の生活の身近な存在となっている彼らは、かつては木造の家屋の割れ目や隙間で産卵したり冬眠したり日中隠れたりしていました。しかし近年の住宅は、アルミサッシやタイル、合板が使われるようになって、身を隠す隙間がなくなり、ニホンヤモリにとっては棲みにくい環境になってしまいました。



(犬山市, 1973-10-19, 佐藤正孝 撮影)

ニホンアマガエル 無尾目 アマガエル科

Hyla japonica Günther

庭木の上で天気予報

【形態】

体長 25~40 mm。体色は周囲の色に合わせて変えることができるが、鼻前から側頭部、体側にかけて暗色の帯状の模様がある。

【分布と生態】

北海道から九州まで分布し、平野部~低山地の草地や樹林地に広く生息する。日中は葉陰などでじっとしていることが多い。餌は昆虫類やクモ類で、夜間光に集まる虫を求めて街路灯などに登ることもある。かわいいカエルだが、皮膚に毒があるので、触った手で目をこすらないよう注意すること。

【さがすポイント】

右の説明参照。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外 <愛知県：リスト外、全国：リスト外>

庭などにいる小さなカエルです。指先に吸盤があって木登りが得意で、雨が降り出す前に木の上でクワツ、クワツと大きな声で鳴くことから、アマガエルと呼ばれています。葉の上にいるときは緑色ですが、土や石の上では体色が変わり、灰色で黒斑のある姿になります。

初夏の繁殖期には水田に集まり、トノサマガエルやヌマガエルとともに「カエルの合唱」をします。どこにでもいたカエルですが、近くに繁殖場所がない都市部では次第に減少しています。



(豊田市猿投山, 1989-11-2, 岡田正哉 撮影)

オオゴキブリ ゴキブリ目 オオゴキブリ科 *Panesthia angustipennis spadica* (Shiraki)

温暖化で拡がる森の住人、名古屋では？

【形態】

体長 37~41 mm、体は黒色で光沢がある。前腿節には鋭い棘が 2~3 本ある。後翅は老熟した成虫では、両翅とも先端部が擦り切れていることがある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布し、暖地の森林に生息する。照葉樹林との係わりが強いがマツなどの針葉樹も食べる。一生活ち木の中で暮らしているが、夏季の気温の高いときには、夜間外に出て樹液を舂めに来ることもある。

【さがすポイント】

鎮守の森のような照葉樹林の倒木の中に生息するが、倒木を崩すのはよくなく、夜間樹木に糖蜜をぬれば集まる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：準絶滅危惧（愛知県：情報不足、全国：リスト外）

照葉樹林*の中へ入って、朽ちた倒木を崩してみると、そこにツヤのある黒い成虫と幼虫が坑道を歩いていることがあります。これがオオゴキブリで、朽ち木を食べて家族生活をしています。元々熱帯系の遺存種で、昨今の温暖化によって分布を広げています。市内では熱田神宮のような規模の大きな社寺林に生活しています。

自然のよく保たれた森林（暗い照葉樹林等）が必要であり、林床にある倒木、落枝、落葉などをきれいに片づけてしまうと、もうオオゴキブリは生活できなくなってしまいます。



(豊田市中金町, 1983-7, 岡田正哉 撮影)

タマムシ コウチュウ目 タマムシ科

Chrysochroa fulgidissima (Schönherr)

梢上に輝く宝石

【形態】

体長 25~40 mm。上翅は金緑色で角度により紫藍色に見える。体下面も金緑色だが、腹端部ほど金銅赤色に変わる。

【分布と生態】

本州、四国、九州、屋久島、奄美大島、沖縄本島等に分布する。7~8月頃エノキやケヤキ、サクラの大木の梢を飛翔し、これらの生葉を食べる。交尾のすんだ雌は、これらの太い枯れ枝に産卵をし、幼虫は、枯れ木にトンネルを作りながら木質部を食べ成長する。2~3年後蛹になり、また夏に羽化脱出する。

【さがすポイント】

市街地の公園や緑地の、エノキ、サクラなどの古木の樹上を飛び交っている。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

夏の暑い日、エノキ、ケヤキ、サクラなどの大木の梢をキラキラと光り輝きながら飛翔している虫を見つけることがあります。これがタマムシです。手に取ってみると翅は硬くて、金緑色で赤い条線のある美しい昆虫です。

昔は、タマムシをタンスに入れておくと着物が増えるということで、その中に大事にしまっていたこともありました。

エノキ、ケヤキ、サクラなどの大木や古木の存続できる安定した自然環境が、タマムシの生息にとっては必要になります。



(千種区平和公園, 2004-10-16, 田中多喜彦 撮影)

アオスジアゲハ チョウ目 アゲハチョウ科

Graphium sarpedon nipponum (Fruhstorfer)

南国の香りいっぱい・青い稲妻

【形態】

前翅長 32~45 mm。翅は黒色の地色に青色斑列がある。春型は夏型より青色斑が大きい。雄は後翅の表面の内縁が折り返し、その部分に茶灰色の毛がある。

【分布と生態】

本州、四国、九州、南西諸島に分布し、都市の公園から山地の照葉樹林*まで広く生息している。年2~3回、5~9月に発生する。幼虫は、クスノキ科のクスノキを主に、タブノキ、アブラチャン、ヤブニッケイ等を食草としている。

【さがすポイント】

敏速に飛び、トベラ、ネギ、ヤブガラシ、ランタナなどの花によく集まる。雄は地表に吸水に集まる。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

市内の社寺林のある場所ならば、たいてい見ることができますが、樹林のないところでは見られません。花から花へ素早く飛翔し、春型はトベラ、夏型はヤブガラシに好んで吸蜜にきます。路上に打ち水すると、吸水に来ることもよくあります。

幼虫の食べ物となるクスノキは、名古屋市の「市の木」でもあり、社寺林に豊富にあり、街路樹にも多く使われています。本種は、都市の中に広く点在する食樹に密着して、安定した発生を続けています。

コラム：日本列島を北上する昆虫たち

現在、名古屋の市街地で最も個体数が多いチョウの1つが、以前は見られなかった南方系のツマグロヒョウモンです。名前のように雌は前翅の先に黒と白の大きな紋があってよく目立ちますが、これは体内に毒があるので鳥が食べないといわれる、カバマダラという蝶に似せて身を守っているといわれています。飛び方も雌は他のヒョウモンチョウよりはるかにゆるやかで、カバマダラに似せています。

写真は、食草であるスミレ類の近くの地面に腹部を曲げて産卵中の雌と、食草を求めて歩く終齢幼虫です。



上：産卵するツマグロヒョウモン雌
(千種区平和公園, 2004-11-13,
田中多喜彦 撮影)

下：ツマグロヒョウモンの幼虫
(千種区平和公園, 2004-9-7,
田中多喜彦 撮影)

1991年愛知県農地林務部発行の「愛知県の昆虫」という本には、ツマグロヒョウモンは記録が少なく、「県内では散発的な記録がある暖地性の蝶」と書かれていました。愛知県では1990年代後半に急速に分布を広げたようです。以前は関西以西に定着していましたが、今では名古屋を飛び越え関東地方でも増加しています。

このように日本列島を北上している原因は、食草となるスミレが市街地で近年増加していること、サンシクスミレ（パンジー）も家庭や公園などで長期間植栽されるようになり、発生の条件を良くしていることと、何とんでも都市部の気候温暖化により、特に越冬が容易になったことが最大の原因でしょう。

最近名古屋市の緑地とその周りの市街地の庭で、ナガサキアゲハの姿をよく見かけるようになりました。ナガサキアゲハも以前は関西以西に分布していましたが、愛知県下では1992年、名古屋市では1997年に初めて採集され、今世紀に入って平和公園や相生山緑地、小幡緑地などの周辺で周年発生が見られるようになりました。2010年現在では、関東地方にも分布が広がります。栃木県、群馬県以南で確認されています。

ナガサキアゲハの幼虫は、栽培のミカン類やユズ、カラタチなどを食べます。右の写真は木陰のカラタチに産卵中の夏型の雌とカラタチに産卵された卵です。卵は日本産のアゲハチョウの仲間では最大でよく目立ちます。愛知県下でも食樹の関係から山地よりは平野部に多く広がっています。

このチョウは江戸時代後期にシーボルトが長崎で発見して、先輩で日本の植物を調査したツンベルグの名を記念してパピリオ・ツンベルギイと命名しましたが、のちにパピリオ・メムノンの亜種とされました。

他に比較的近年に市内で発生が確認された南方系の昆虫には、クロコノマチョウ、ムラサキツバメ、ハマオモトヨトウ、ナカグロクチバ、アオドウガネ、タイワンクツフムシなどがあります。これらは現在、日本列島を北上している昆虫たちですが、いずれも分布拡大は気候温暖化の影響を受けていると思われます。



上：カラタチに産卵するナガサキアゲハ夏型雌
(守山区吉根, 2009-8-22, 田中多喜彦 撮影)
下：カラタチに産み付けられた卵
(守山区吉根, 2009-8-22, 田中多喜彦 撮影)



(天白区相生山, 2003-9-15, 岡田正哉 撮影)

クマバチ ハチ目 コシブトハナバチ科

Xylocopa appendiculata circumvolans Smith

風貌に似合わずおとなしい性質のハチ

【形態】

体長約 23 mm。体は頑丈で黒色。胸部背面及び腹面に黄色毛を密生するが、他の部分の毛は黒い。

【分布と生態】

北海道、本州、四国、九州、対馬、屋久島に分布する。

春から秋にかけて現れ、枯れ枝などあまり硬くない木に孔を彫り営巣する。幼虫は、花粉と花の蜜を混ぜた団子状の餌を食べて成長する。羽化した新成虫は母バチから餌をもらう。

【さがすポイント】

緑地や樹木の多い公園で、アブラナやフジ、ニセアカシアなど季節の花に集まる。空地でよく停空飛翔*している。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：リスト外（愛知県：リスト外、全国：リスト外）

初夏の頃、フジの花見に行くとき、胸だけが黄色で他は黒い毛むくじゃらで大きなハチが、ブンブンと羽音をたてて蜜を求めてやってきています。姿に似合わずおとなしくて、人を襲うことはありません。

枯れ木に孔を掘り、そこに巣を造り、花粉や蜜を集めて幼虫を育てます。このような生活をしているため、市街地であっても花があり、樹木のある環境であればいいので、社寺林を中心に生息しています。最近では、上記のような環境が減少し、姿を見かける機会が少なくなっています。



左：(中区, 1999-4-25, 緒方清人 撮影)
 右下:住居の扉を開いたところ (岡崎市, 1985-5-29, 須賀瑛文 撮影)

キシノウエトタテグモ クモ目 トタテグモ科 *Latouchia swinhoei typica* (Kishida)

住居の入り口に開き戸をつけるクモ

【形態】

体長は雌 10~15 mm、雄 9~12 mm。
 頭胸部は褐色でつやがある。腹部と歩脚は茶褐色である。腹部に斑紋のあるものとないものがある。

【分布と生態】

本州、四国、九州に分布している。比較的明るい場所の地中に縦穴や横穴を掘って住居(巣)をつくる。穴の内側は、糸で裏打ちされている。また、穴の出入口に片開きの扉を付ける。

【さがすポイント】

古い神社、寺、公園、城跡などの土の詰まった石垣の間、崖地の斜面、飛石の横などをさがし、住居を見つける。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧ⅠA類<愛知県：絶滅危惧ⅠB類、全国：準絶滅危惧>

キシノウエトタテグモは都市部やその近郊の社寺、城(城跡)、旧家などの庭などに見られるクモです。市内東部丘陵の崖地にも横穴式住居を作って住んでいます。穴の扉には周辺にあるコケや土粒を付けてカモフラージュしています。このクモの扉がたくさん見られる崖地の上部は、ふつつ二次林*で覆われています。近年、こんな崖地は開発によって削られてなくなり、残ったものもコンクリートで固められたところが多くなってしまいました。このため市内では、ここ30年くらいの間に激減しました。

樹林地
 草地
 水辺
 都市部
 植物
 哺乳類
 鳥類
 は虫類
 両生類
 魚類
 昆虫類
 クモ類
 カニ類
 貝類

コラム：トタテグモの仲間

名古屋市には、前頁のキシノウエトタテグモのほか、カネコトタテグモ（カネコトタテグモ科）とキノボリトタテグモ（トタテグモ科）の3種のトタテグモの仲間が生息しています。いずれの種も地中や樹幹に糸で住居を作り、入り口に扉をつけるのが特徴ですが、住居の形、生息環境、生態等には、3種の間に違いがあります。

キシノウエトタテグモは主に市街地に局地的に分布しています。市内では、お城や丘陵地に広く分布していましたが、近年は開発などの影響で減少しています。尾張地方では犬山市、知多半島では東海市、西三河地方では岡崎市・豊田市・安城市の、それぞれ限られた場所に生息しています。東三河では、豊橋市で徘徊中の雄が発見されましたが、まだ住居は見つかっていません。石垣の隙間の土の部分、崖地、庭園などに深さ 10 cm ほどの住居を作り、入り口に円形の扉をつけます（下図）。普段、扉は閉じていますが、よく見るとわずかな隙間を空けています。その隙間から、眼の前に近づいた多足類や昆虫類などの獲物に飛びかかり



扉が円形になっているキシノウエトタテグモの住居（昭和三十九年六月十八日、緒方清人撮影）



扉が両開きになっている
カネコトタテグモの住居
(岡崎市, 2009-5-1, 緒方清人 撮影)

捕食します。この捕獲方法は3種類に共通です。雌の成体は一年中見られますが、雄は10月～4月ごろに成体になり、雌を求めて徘徊します。体色は濃紫褐色で腹部に縞模様があるのが特徴ですが、ときどきないものもいます。

カネコトタテグモは市街地から山地まで分布していて、1000 m級の温帯林でも生息しています。赤土の崖地や樹木の根元などに深さ10 cmほどの住居を作り、入り

口に両開きの扉をつけます(左上図)。雌の成体は一年中見られますが、雄は11月～4月ごろに成体になり、雌を求めて徘徊します。体色は褐色で、他の2種より淡い色をしているので容易に識別できます。

キノポリトタテグモも市街地から山地まで分布しています。名前にキノポリと付いているように、住居はスギやケヤキなどの大木の幹の表面につくりますが、石垣や崖地にも作ります。糸で作った長さ3～4 cmの袋状の住居は、円筒形に盛り上がっていますが、入り口には円形の扉をつけ、また表面にコケや砂粒などを付着させて、見事にカムフラージュします(右下図)。雌の成体は一年中見られますが、雄は5月～7月ごろ成体になり、雌を求めて徘徊します。体色は黒褐色で3種の中では最も濃い色です。

3種類とも特殊な環境に生息しているので、宅地開発、道路工事、樹木の伐採など環境破壊の影響を受けやすいクモです。調査がなされず、生息記録のないような場所では、気づかれないままに滅びている可能性もあります。



奥 : コケでカムフラージュされた円筒状の住居
手前 : スギの皮に乗せたキノポリトタテグモ
(守山区中志段味, 2002-3-7, 須賀瑛文 撮影)



左下:住居から出した雌 (守山区,2003-8-31,家股幸子 撮影)
右:住居 (昭和区,1993-10,須賀瑛文 撮影)

ジグモ クモ目 ジグモ科 *Atypus karschi* Dönitz

母子で仲良く冬を越す！袋の家は楽しい我が家

【形態】

体長は雌 17~20 mm、雄 10~17 mm、上顎が突きだしているのが、雌は 23~26 mm に見える。体全体は黒色だが、個体によって濃淡の差がある。腹部は頭胸部より淡い。頭胸部は逆台形に近い形。

【分布と生態】

北海道から南西諸島まで広く分布。地表から地中にかけて細長い袋状の住居(巣)を作る。地上部は 5~10 cm、土の粒やゴミなどを付着、地中部は地上部より少し長い。住居の大きさはクモの体長によってさまざまである。

【さがすポイント】

人家、社寺、公園などの樹木、塀、石垣等が接する地面にある巣をさがす。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市:リスト外 (愛知県:リスト外、全国:リスト外)

ジグモの雄は成体になると住居を出て、雌の住居を訪れて交尾します。雌は、住居の中で産卵、9~10月頃にフ化した子ジグモと翌春まで一緒に暮らします。ジグモは、かつては熱田神宮、名古屋城、都市公園などで普通に見られるクモでしたが、最近は少なくなりました。激減した原因はよく分りませんが、除草剤の影響と掃除が行き届きすぎたため、餌の昆虫などが少なくなったことが考えられます。ジグモの袋を見かける場所は、都市部の中でもたくさん的小動物が生きているところです。



(熱田区熱田神宮, 2002-8-17, 木村昭一 撮影)

ヒルゲンドルフマイマイ マイマイ目 オナジマイマイ科 *Trishoplita hilgendorfi* (Kobelt)

熱田の森の小さなカタツムリ

【形態】

殻高約 1 cm、殻径約 1.5 cm の低円錐形で体層は丸く膨らみ、周辺に弱い角がある。殻の色彩は淡黄色から黄褐色で、産地によって殻の色彩、周辺角の強さなどの貝殻の形態は変異する。

【分布と生態】

市内では熱田神宮、断夫山古墳に生息する。愛知県内では知多半島の一部、石巻山、高山などに分布する。

【さがすポイント】

春から秋の活動期にはよく茂った二次林*内の低木の葉の上にいることが多い。

【よく似た種類】

移入種のおナジマイマイ（右下図）は殻が低く、へそ穴が狭い。

【レッドリストの評価区分】

名古屋市：絶滅危惧 I B 類<愛知県：準絶滅危惧、全国：準絶滅危惧>

市内に生息するカタツムリの仲間は元々種数、個体数とも多くありません。その中で茂った森の指標種である本種が生息しているのは、熱田神宮と断夫山古墳の森だけで、市内には古くから保存されてきた森がなくなったということかもしれません。最近では本種をあまり見かけませんでしたが、2002年8月に徐々に生息が確認されました。熱田神宮の参道に近い低木の上に姿を見かけるかもしれませんが、貴重な生き物ですのでそっとしておいてください。



4. 生物の移入とその問題点

日本には外国から多くの人を訪れます。人だけでなく他の動物や植物も、人に運ばれて、あるいは荷物などにこっそりついて外国から入ってきます。その中には日本で新たな生活の場所を見つけ、勝手に増えていくものがあります。そのような生物を帰化生物といいます。厳密に言えば、大昔稲作文明が日本に入ってきた時、それとともに渡来したと思われる生物も帰化生物に含まれます。しかし一般には、外国から来たことが記録などで確かめられる江戸時代中期以降に入ってきた生物だけを帰化生物と呼びます。

それでは、どのような帰化生物が私たちの身の回りに生息・生育しているのでしょうか。

植物では、都市の路傍や空き地に生育している雑草は、種類数で見ても量で見ても、半分くらいが帰化種です。春の道ばたでかわいい青い花をつけるオオイヌノフグリは、ヨーロッパ原産の植物です。代表的な春の野の花であるタンポポも、市街地で見られるのはほとんどがヨーロッパから来たセイヨウタンポポかアカミタンポポです。夏の夜に黄色の花を咲かせるマツヨイグサの仲間も、すべて帰化植物です。秋の空き地を黄色に埋めるセイタカアワダチソウは、アメリカ原産の植物です。牧草として輸入されたオニウシノケグサ、カモガヤ、ネズミムギ、もともとは観賞用に持ち込まれたフランスグク、オオキンケイギクなどもあちこちにひろがっています。池や水路では、ホテイアオイが水面を覆います。

動物のうち哺乳類では、ハクビシン、ヌートリア、アライグマなどの外来種が日本に帰化しています。鳥類では、チョットコイ、チョットコイと大きい声で鳴くコジュケイが中国原産です。もともと飼い鳥だったドバトも、あちこちの建物や橋の下などで繁殖しています。は虫類ではペットとして輸入されたミシシippアカミミガメ(ミドリガメ)が逃げ出して、あるいは捨てられて汚れた水路などに棲みつき、両生類では食用に輸入されたウシガエルが逃げ出して池や沼を占領しています。その餌として一緒に輸入されたアメリカザリガニも、あちこちの水路などで、はさみをふりがざしています。魚類では釣りなどの目的で放流されたオオクチバス(ブラックバス)、ブルーギルが有名です。メダカがいると思ったら、実際には外来のカダヤシということもしばしばです。昆虫類では、チョウの代表選手であるモンシロチョウが、実際には帰化動物だといわれています。一時都会の街路樹を丸坊主にしたア

メリカシロヒトリは最近少なくなりましたが、ヒロヘリアオイラガ、ブタクサハムシ、イネミズゾウムシ、シバツトガなどが新たに繁殖しています。中国原産のアオマツムシは、秋の夜、木の上でやかましいくらい鳴いています。

このように聞くと、「外国の珍しい生物が身近に見られるようになるなんて、とてもよいことだ」と思う人がいるかもしれません。しかし、帰化生物の増加は、実際に多くの困った問題を引き起こします。例えば、水面をホテイアオイが覆うと、他の水草は光が不足して、みな消えてしまいます。池に放されたオオクチバスは、その池にもともといた魚を食べてしまいます。日本の川や湖には水底にすむナマズ以外に魚を食べる魚がないので、日本の魚は水中を泳ぐオオクチバスに対して、身を守る術を知りません。昔から共存していれば、生物はお互いに何らかの対抗手段を発達させます。ところが突然思わぬ強敵が入ってくると、手の打ちようがないのです。このように外国から生物が入ってくれば、在来種は多かれ少なかれ圧迫されます。その結果絶滅、あるいは激減してしまうものも出てきます。

人間生活に対する被害もあります。セアカゴケグモは、かまれると生命の危険さえあります。イネ科の牧草やブタクサは、花粉症の原因になります。庭木の手入れをしてヒロヘリアオイラガの幼虫に刺され、痛い思いをした人もいるでしょう。イネミズゾウムシはイネの大害虫ですし、マツノザイセンチュウは日本中のマツを枯らせています。

一度野生化した外来種は、なかなか根絶できません。日本は世界有数の生物輸入国で、ペットショップではさまざまな外国産の動物が販売されています。中には、原産地では保護対象となり、捕獲が禁止されているものまで含まれています。従来は輸入が禁止されていた外国のクワガタムシ、カブトムシなども、最近ではあちこちで販売されています。このような生物はできるだけ購入しないこと、それを絶対に野外に出さないことが重要です。オオクチバスの放流、あるいは外国産の植物の種子を野外にまくなど、外来生物が分布を拡大する手助けをすることも絶対に避けなければなりません。外国からだけでなく、国内の他地域から生物を持ち込むこともよくありません。ゲンジボタルの光り方には地域性があるのですが、他地域から持ち込まれたものは野外に放されると在来の個体と交雑し、その純粋性を失わせてしまいます。何よりもまず、身近な自然が重要であること、生物の移入がその身近な自然に悪影響を与えていることについて、多くの人が正しい知識を持つことが必要です。131～135 頁に、最近問題になっている代表的な移入生物を紹介します。

移入種、帰化種、外来種

外国から来た生物に対しては、移入種、帰化種、外来種など、さまざまな言葉が使われます。これらはよく似た意味ですが、厳密に言うと微妙に意味が違います。

移入種は英語で言うと introduced species で、ある場所に人間によって移し入れられ、放された種という意味です。「移し入れられ」というのは、人間が意図的に移し入れたものだけでなく、人為に伴って非意図的に入ってきてしまったものも含まれます。どこから移動させられたかは問いません。外国からはもちろんのこと、国内の他地域からでも、すぐ隣の場所からでも「移入」です。広い意味では、ある場所から持ち出し、人工的に増殖させて元の場所に戻した場合も含まれます。飼育・栽培状態のものは含みませんが、移し入れられた場所で定着し繁殖しているかどうかは問いません。

帰化種は英語で言うと naturalized species で、移入種の中で特に外国から来て日本に定着し、人間の手を借りずに自然状態で繁殖している種を意味します。3つの中では最も狭い意味になります。多少繁殖しているが十分定着しているとは言い難い種は、一時帰化種と呼ばれます。

外来種は外から来た種、英語で言うと alien species です。「外」は「内」に対する言葉ですから、使う立場によって範囲が異なり、国が使えば外国、県が使えば県外、名古屋市が使えば名古屋市域外、ある池の保護活動をしている人が使えばその池以外の場所という意味になります。本来の意味では、外からどのようにしてきたかは問いません。人間によって移動させられたものだけでなく、自力で入ってきたものも含まれます。英語の alien も「よそ者」という意味で、向こうの意志で侵略してきた者も alien です。入ってきて自然状態で定着し繁殖しているかどうかとも問いません。飼育・栽培されている生物も、その地域にもともといた／あったものでなければ「外来種」です。

環境という面で現在問題になっているのは、人為による自然分布の攪乱です。またワニガメやカミツキガメのように、まだ完全に定着しているとは言い難い生物も問題になっています。一方飼育・栽培生物は論議の対象外です。その意味では「移入種」が最も適切な言葉で、愛知県条例ではこの言葉が使われています。しかし「移入」は「移り入る」という意味にもとれます。実際生態学では、「移入」をしばしばその意味で使います。国は、はじめ「移入種」と呼んでいたのですが、この点が紛らわしいということで、現在の法律では「外来種」を使っています。

○オオフサモ

離弁花類 アリノトウグサ科

Myriophyllum aquaticum (Vell.) Veldc.

ブラジル原産の多年生水生植物で、観賞用の水草(パロットフェザー)として日本に持ち込まれたものが野生化し、現在では日本各地の湖沼・河川などに生育しています。水たまりの底などから生え、水面から20 cm程度の高さになり、粉白緑色をしています。水中ではあまり葉をつけません、空気中では3~7枚の糸状に裂けた葉を風車の羽のように輪状につけます。絶滅危惧種のおグラノフサモ(名古屋市VU)は水中にたくさんの葉をつける点で本種と異なります。市内でも水田脇や公園の水路や池などで確認されていて、水面いっぱい隙間なく広がり、他の水生植物が生育する場所を奪ってしまいます。2005年に特定外来生物*に指定され、市内では市民による除去活動などが行われています。



オオフサモ

(港区西茶屋, 2010-7-24, 花井隆晃 撮影)



アライグマ

(守山区茶臼前, 2009-8, 藤谷武史 撮影)

○アライグマ

哺乳類 食肉(ネコ)目 アライグマ科

Procyon lotor (Linnaeus)

北米原産の動物で、飼育されていたものが逃げ出して繁殖しています。独特の縞模様のような大きな尾を持ち、体重は12 kgに達するものもいます。名古屋市内では北部の9区で平成17年から20年までに122個体(幼獣が60%)が捕獲され、その80%は守山区内でした。南部の瑞穂区、緑区でも捕獲例がありますが、相対的に自然度の高い地域で生息数が多いようです。何でも餌にする食性の広さ、夏をピークとして春から秋への旺盛な繁殖力、生息環境への強い適応力により個体数増と分布域拡大がみられます。トウモロコシ、スイカといった農作物やサンショウウオ、昆虫類等動物の食害、民家や神社への侵入、天井裏での出産子育てによる糞尿が問題になっています。

○ドバト

鳥類 ハト目 ハト科

Columba livia Gmelin.

アジア・ヨーロッパ・アフリカ原産のカワラバトが家禽化されて、多くの品種に分かれました。そのうちイエバトやレースバト(昔はその強い帰巢性を利用して手紙を運ばせたため伝書バトと呼び、江戸時代の1780年代にはすでに日本に輸入されていました)と呼ばれる品種が再野生化したのがドバトです。

全長約 33 cm。灰色に黒が混じる原種に近いものから、全身黒っぽいもの、茶色を帯びたもの、純白のものまで様々な色変わりがあります(日本古来のキジバトは翼に茶色のうろこ模様があります)。

公園や人家の周辺に群れて棲み、増えすぎの傾向があります。伝染病を運ぶおそれもあり、あまり餌を与えないことが大切です。



ドバト

(あま市, 2010-6-7, 後藤悠輔 撮影)



ホクベイカミツキガメ

(北区名城公園, 2006-6, 矢部隆 撮影)

○ホクベイカミツキガメ

は虫類 カメ目 カミツキガメ科

Chelydra serpentine (Linnaeus)

北アメリカのミシシッピ川下流域から五大湖まで広く自然分布し、亜種フロリダカミツキガメを含む種です。1990年代には年間数千頭もペットとして日本に輸入されていましたが、体重が 40 kg 近くに成長するため、飼育困難となった個体が各地の河川や池に放され、千葉県や東京都では野外繁殖しています。市内では北区名城公園、中区名古屋城外堀、港区、守山区、天白区で捕獲されています。大型で大食のため、地域生態系への食物連鎖を攪乱する危険があります。また、噛みついたり引っかいたりする力が強いので、不用意に接触した人がけがをする恐れもあります。2005年に特定外来生物^{*}に指定され、流通や飼養が制限されています。また日本のワースト 100 外来生物にも挙げられています。

コイ

魚類 コイ目 コイ科

Cyprinus carpio (Linnaeus)

コイは、昔から日本人に親しまれてきた魚です。しかし、現在日本で見られるコイのほとんどは 1905 年以降にヨーロッパ等から移入されたもので、ニシキゴイも含めて在来種ではありません。在来のコイは、もともと日本に広く分布していたと考えられますが、移入コイに駆逐され、現在では琵琶湖にわずかに生き残っている集団があるだけです。移入コイは市内各地の大きな河川や水路の中の流れの緩やかな場所に生息し、特に水底を好んで索餌行動をします。



ゲンゴロウフナ(上)とコイ(下)の幼魚
(守山区, 2008-8, 谷口義則撮影)



コイの成魚(45 cm)
(守山区, 2008-8, 谷口義則撮影)

コイには、よく見ると口ヒゲが 2 対あり、一対は上あご後方、もう一対が口角にあります。フナ類(ゲンゴロウフナ、ギンブナ等)とは、これらの口ヒゲがあること、背びれの基底(付け根)が長いことで見分けられます。幅広い温度環境、低溶存酸素に耐えられ、水質汚染にも強い、タフな魚です。自然条件下で 20 年以上生きる個体もいると見られ、大型化すれば天敵もほとんどいません。

底泥を掘り起こして水を濁らせたり、排泄で富栄養化を起こしたり、水草、底生昆虫の幼虫、貝類、甲殻類、魚類、両生類を捕食するなど、生態系に悪影響を及ぼします。絶滅危惧種ハリヨの巣を壊すことも報告されています。これらの影響を鑑み、国際自然保護連合(IUCN)は本種を「世界の侵略的外来種ワースト 100」に選定しています。「環境教育」や「環境浄化」と称してコイを放流する行為は厳に慎む必要があります。日本では現在、コイヘルペスウィルス(KHV)蔓延の危険性もあるため、コイの放流は原則として禁止されています。

○ヒロヘリアオイラガ 昆虫類 チョウ目 イラガ科 *Parasa lepida* (Cramer)

中国南部、インドから東南アジア原産で、1979年頃から東海地方以西で大発生し、現在関東平野以西に広く分布するようになりました。名古屋市では年2回、6月上中旬と9月上中旬に成虫が発生します。幼虫は市街地に多く見られ、街路樹や庭園に植栽されたサクラ、カエデ類等、樹種をあまり選ばず広く食害します。幼虫、成虫ともアオイラガによく似ており、幼虫の背中中央には細く暗色の縦筋があります。卵はかためて産み付けられ、若齢幼虫は群生する性質があります。在来のイラガとは比較にならない発生量の多さと、幼虫の背面にある多数の毒針により深刻な被害をおよぼすため、街路樹の枝の刈り払いや殺虫剤散布等の対策が行われています。



ヒロヘリアオイラガ
(千種区平和公園, 1995-9, 田中多喜彦 撮影)



セアカゴケグモ雌
(愛西市, 2008-6-6, 須賀瑛文 撮影)

○セアカゴケグモ クモ類 クモ目 ヒメグモ科 *Latrodectus mactans hasseltii* Fabricius

オーストラリアなどが原産地で、日本では1995年に大阪府や三重県で大量に見つかり、「毒グモ」として報道されて大騒ぎになりました。名古屋市内でも、2005年に緑区の大高緑地で発見され、2008年には港区の名古屋港塩見埠頭や金城埠頭で大量に見つかりました。雌は体長7.0~10.0mm、腹部は黒色~灰褐色で背面の中心に細長い赤い模様があります。また、腹部の裏側には、砂時計の形をした赤い斑紋があるのが特徴です。雄は雌より小さく、体全体の色は雌よりも淡く、褐色がかったいます。側溝や排水溝の中・石垣の隙間や排水用パイプの中など、人工的な場所に好んで生息します。2008年には特定外来生物*に指定され、殺虫剤散布などの対策が行われています。

○チチュウカイミドリガニ カニ類 十脚目 ガザミ科

Carcinus aestuarii Nardo

地中海原産で、内湾の低塩分海域に生息しています。東京湾、相模湾、伊勢湾、大阪湾、洞海湾などに分布を広げており、名古屋市では名港・埠頭海岸、各河川の中・下流域、藤前干潟でも見られ、特に汽水域で多く確認されました。日本の各湾に拡散した方法は、「地中海の海産物に混入してきた」「大型艦船のバラスト水槽の中に稚ガニが混入し運ばれてきた」の二つがあげられています。甲長 30 mm 位、甲幅 40 mm 位。体色は暗緑色。繁殖力に優れ、食性は魚類、アナジャコ、ゴカイ、アサリなど動物性の餌が主体で、海藻も食べる雑食性です。生育が早く、個体数が増加すれば、底生生物に与える影響が大きいと思われるので、生息状況に注意する必要があります。



チチュウカイミドリガニ雌
(港区堀川, 2003-7, 天野勲 撮影)



コウロエンカワヒバリガイ
(港区藤前干潟, 2008-8, 木村昭一 撮影)

○コウロエンカワヒバリガイ 貝類 イガイ目 イガイ科

Xenostrobus securis (Lamarck)

オーストラリアやニュージーランドが原産で、淡水の影響の強い富栄養化した内湾や河口域の転石やコンクリート護岸にびっしり付着します。1972年岡山県児島湾で初めて確認されたあと、1990年代には西日本から伊勢湾、相模湾の各地に分布を広げています。名古屋市では名古屋港全域、藤前干潟で最も多く見られます。殻長約 4 cm のムラサキイガイ（ムール貝）を小型にしたような二枚貝で、中川運河ではこの貝の群集の中にメキシコ湾原産の移入種イガイダマシやアメリカ原産移入カニ類のミナトオウギガニが多産します。各地に定着しており、今後も分布を広げる可能性があるため、海岸域のモニタリング体制を強化する必要があります。

5. 観察記録をつけようーフィールドノートの使い方

この冊子では、名古屋の環境を考える上で重要な 100 種類の生物を取り上げて紹介しました。しかし野外で生物を観察しても、少し時間が経つと、記憶があいまいになってしまいます。何か生物を観察したときには、139 ページのフィールドノートを使って観察記録をつけておきましょう。

観察記録で重要なのは、いつ、どこで、何という生物を、どのくらい、どのような状態で見たかということです。以下に、それぞれの項目についてどのように記録したらよいか説明します。

【いつ】多くの動物は 1 日の中でも時間によって行動が異なりますから、年月日と時刻を記録します。植物のように 1 日の中で状態があまり変化しないものは、年月日だけでよいでしょう。年は忘れがちですが、移入種のように経年変化が激しいものはこれが特に重要になります。

【どこで】観察記録は、他人にもわかるように書くことが重要です。「うちの庭」では、他の人にはどこかさっぱり分かりません。名古屋市〇〇区〇〇町〇〇丁目のように書くのが普通です。外に出かけて地名が分からないときは、地図上に位置を記録しておき、あとで町名を調べます。池の名前などは地図に載っていないことがあるので、近くに人がいたら聞いておくとういでしょう。最近は GPS を使い、緯度経度で記録する人も多くなりました。同時に、その場所のおよその環境も記録します。

【何という生物を】生物の観察では、これが一番の難問です。図鑑などで調べるのですが、生物にはたくさんの種類があり、正確に見分けるのは容易ではありません。「××を見た」と記録しても、その人が××と思った生物がいた／あったのは確かでしょうが、その生物が本当に××であったかどうかは別問題です。

139 ページのフィールドノートは小中学生用で、学習として観察する場合には、この点はできるだけいねいに調べるといってよいでしょう。しかし、環境情報として意味のある観察をしたければ、特に植物と無脊椎動物では、観察したら原則として必ずその一部を採集し、裏付けの標本を作成します。写真を撮影した場合も、趣味での撮影なら別ですが、資料として使おうと思うならば原則として撮影後被写体を採集して標本にしておきます。そうしないと、あとで何を撮影したか検証できなくなり、資料として役に立たなくなります。野山を歩けば、いかに注意してもその分自然は荒れます。

だから自然を観察しようとする人は、何か重要なことを観察したときには必ず採集して標本を作成し、どうしても採集できない場合は他の適切な裏付け資料を作成して、観察した事実を公共の資産として共有する責務があります。必要なときに採集しない人は、自然を踏みつぐだけの山荒らしです。同じ生物を何回も観察したときには、代表的なものを選んで標本にします。標本には番号と採集地、採集年月日、採集者を書いたラベルを付け、観察記録にその番号を書いて、どの標本がその記録の裏付けかわかるようにしておきます。

しかしそうは言っても、何でもどんどん採集してよいというわけではありません。自然は公共の資産です。同じ採集でも、家で飼う、庭に植えるなど自然を私物化するための採集は許されません。採集が禁止されている生物もありますし、法的に禁止されていなくてもやたらに採集したらなくなってしまいうものもあります。すでに他の人が知っていることを確認しただけなら、一般的に言えば採集する必要はありません。ただし移入種は、他の場所でも出現する可能性がありますから、自分が知るための資料としても大いに採集してください。判断に迷う場合は専門家に連絡するとよいのですが、名古屋では自然系の博物館がなく、一般の人はどこに連絡したらよいか分からないのが困ったことです。また、標本の作成は情報の共有化が目的ですから、作った標本は私蔵せず公的な機関で保管しないといけないのですが、名古屋ではその体制も十分できていません。採集・標本作成が困難な脊椎動物の場合は、できるだけ特徴がよくわかる写真を撮影しましょう。

【どのくらい】 基本的には個体数を数えて記録します。多すぎて数え切れない場合、あるいは動きが速かったりして正確に数えられない場合は、およその数でよいでしょう。植物でどこまでが1個体が判断がつかない場合は、およそ $0m \times 0m$ の群落というように記録します。

【どのような状態で】 対象の生物の状態を記録します。大きさ、目立った特徴、いた／あった場所の環境、動物ならばどのような行動をしていたか、植物ならば何分咲きだったかなど、できるだけ詳しく観察して書いておきます。他にどのような生物がいたかも記録します。図書などで調べたことがあれば、メモ欄に記入します。

観察記録がたまってきたら、まとめて整理します。一人で観察した情報を整理するだけならあまり問題は起きませんが、複数の人の観察をまとめると、まとめた記録全体の信頼性は、その中で最もいい加減な記録の信頼性で決まってしまう。ある生物を観察したという2人の記録をまとめた

き、片方の人が生物の名前を間違っていると、正しい観察記録の方もむだになります。種名の確認は、慎重の上にも慎重に行う必要があります。また、この場合は「誰が」確認したというのも重要な情報になりますので、観察者名をはっきり記録することを忘れないでください。

【記入例】

※コピーして使ってください

◆フィールドノート No (1) 観察者 やまとまこと

2010 年 7 月 20 日 10~11 時 天気 (はれ)

場所 名古屋守山 市 小幡緑地
町 村

まわりの環境 町の中の緑地 東側に山が続いている

見つけた生きもの マオスジアゲハ

その量 30分で17匹きた

生きものようす (メモやスケッチ)

青い

黒い

ヤブガラシの花 →

林のへりの明るい場所にある
ヤブガラシの花のまわりを飛ん
どいる
次々と飛んでくる

ヤブガラシの花

のぼした口

氷たまりの
水ものんでいる

同じ場所で見た生きもの	メモ	写真
<p>ナミアゲハ</p> <p>ツマグロヒヨモン</p> <p>ハラビロカマキリ</p> <p>キリシナガバチ</p>	<p>幼虫は、クサキ、 ツリギなどの葉 を食べます。 成虫は、ヤブガラシ、 クサキなどの花の 蜜を吸います。</p>	<p>撮った写真を 貼りましょう</p>

！ フィールドノートは、観察したすべての生きものについて書く必要はありません。1種類でも2種類でも、じっくりと観察して記録してみましょう。

◆フィールドノート No ()

観察者

年 月 日 時 天気 ()

場所 市・区
町・村

まわりの環境

見つけた生きもの

その量

生きものようす (メモやスケッチ)

同じ場所で見た生きもの

メモ

写真

撮った写真を
貼りましょう

6. 植物画を描く

観察した植物を画像として記録する時には写真を撮る人が多いのですが、植物画を描くという方法もあります。植物画は細密に描くため、描こうとする植物をしっかり観察することができます。いつも見慣れた植物でも、実際にスケッチを始めると次々に新しい発見があり、描く前にはその植物のほんの一部分しか見ていなかったことに気がきます。特に拡大図を添える場合は、ルーペで拡大すると、今まで知らなかった植物の巧みな仕組みや模様、色の美しさに驚かされることがよくあります。また、写真は大きさのイメージが捉えにくいことがあります。植物画は通常実寸大で描くため、一般的には知られていない植物を紹介する手段や記録としても役立ちます。

植物画は植物のありのままの姿を描きます。そのため、描く植物はその種の平均的な大きさ、色合いで、その植物らしい特徴を備えているものを選ぶことが重要です。例えば、トゲのある植物はたまたまトゲの無いところを描いてしまわないよう気を付けなければなりません。

野生の植物を描く場合の苦労はモデルを入手することにつきます。野生植物は、花期が短いものが多く、その上、年ごとに気候に左右され易く、早く咲いたり、遅かったり、全く花を付けない年もあります。実際に描けるまでに何年もかかってしまうこともあります。

花と果実を一枚の画に描く場合は、同じ個体から採集することが望ましいのですが、春先に出会った花の実を採集するため同じ場所を訪れても、背丈ほどに伸びた草に阻まれて近づけなかったり、川辺では増水して目指す植物が流されて無くなったりもします。入手できても、描き上げるまで生き活きた状態を保つ工夫もしなければなりません。

科学的でしかも美しい構図となるように工夫し、細かく鉛筆でスケッチしていきます。彩色することで立体感や質感を表現し、画用紙の上へとモデルの植物を置き換えるような気持ちで描きます。一枚また一枚と描いていくうち、植物への愛情と興味が一層深まっていきます。貴重な植物は描き終えてから、押し葉標本を作り資料としても活用します。

植物と対峙してじっくり描くことは、少し描き方を練習すれば、植物好きな人にとってはとても楽しい作業です。描きあげた植物画は、きっと思いのこもった宝物となるでしょう。



マメナン 描画：鳥居ちよ子
(守山区, 花：2002年3月28日, 果実：2001年9月10日)

資料

用語解説：原則として、各頁の右側または下側の説明文中の用語を取り上げましたが、一部縁枠内の用語についても解説しました。

二次林（にじりん、p.11, 92, 123, 127）：山火事や伐採などで本来の自然林が破壊されたあとにできるアカマツやコナラの林。

里山（さとやま、p.11, 13, 15, 21, 26, 27, 32, 33, 104）：人里の近くにあり、人間に日常的に利用されてきた林地。

広葉樹林（こうようじゅりん、p. 15, 18, 27）：広く平たい葉を持つ樹木の林。針葉樹林に対してこのように呼ばれる。

マント群落（マントぐんらく、p.26）：林のヘリにできるつる性植物を中心とした群落。

照葉樹林（しょうようじゅりん、p.31, 117, 119）：西南日本にみられるシイ、カシ等の常緑広葉樹を主とした林。

谷戸田（やとだ、p.39, 79）：丘陵地の小さい谷につくられた水田。

披針形（ひしんけい、p.39, 56, 58, 108）：針を広げた形という意味で、先端が尖り、中程より下が幅広くなっている形。

留鳥（りゅうちょう、p.43, 66, 68）：季節的移動を行わず、一年中、ほぼ同じ地域に棲む鳥類（例：スズメ、ムクドリ等）。

湧水湿地（ゆうすいしっち、p.55, 56）：湧き水によって水が供給されてできる湿地。通常肥料分が極めて少ない。

夏鳥（なつどり、p.65, 67, 74, 112）：春に南方から渡来して日本で繁殖し、秋に再び南方へ渡る鳥類（例：コアジサシ、ツバメ等）。

冬鳥（ふゆどり、p.66, 69）：秋に北方から渡来して日本で越冬し、春に再び北方へ渡る鳥類（例：マガモ、ツグミ等）。

停空飛翔（ていくうひしょう、p.67, 72, 122）：羽ばたきながら空中の1カ所に留まる飛び方。

托卵（たくらん、p.74, 114）：カッコウのように自分で子育てはせず、他の鳥に卵を預け子育てをまかせること。

特定外来生物（とくていがいらいせいぶつ、p.77, 131, 132, 134）：特に生態系等への被害が認められるものとして、外来生物法(2004)によって規定された生物。

要注意外来生物（ようちゅういがいらいせいぶつ、p.77）：現時点では外来生物法の規制対象とはなっていないが、生態系や人の生命に対する被害が指摘され、取り扱いに注意が必要な生物。

植生遷移（しょくせいせんい、p.92）：植物群落が時間の経過に伴って裸地→草地→樹林地と変化していく現象。

二次草地（にじそうち、p.93）：森林が破壊された後に二次的にできた草地。

笹鳴き（ささなき、p.114）：繁殖期の囀り（さえずり）とは異なり、日常的に「チャッチャツ」と鳴くウグイスの鳴き声のこと。

名古屋市版レッドリスト2010

・植物

科の範囲、名称、配列は「日本の野生植物」（平凡社）に準拠した。科内の配列については、学名のアルファベット順とした。県ランクの「国リスト」、旧ランクの「リスト外」は国リストに掲載されているが、県リストおよび旧市リストでは絶滅危惧種に該当しないと評価された種である。

絶滅(EX)

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	デンジソウ	デンジソウ	EN	VU	EX
2	サンショウモ	サンショウモ	EN	NT	EX
3	コミソノバ	タデ	NT		
4	タニソバ	タデ			EX
5	ハマアカザ	アカザ	VU		EX
6	クロモジ	クスノキ			
7	クサボタン	キンボウゲ	VU		EX
8	オキナグサ	キンボウゲ	EN	VU	EX
9	オトコゼリ	キンボウゲ			EX
10	オニバス	スイレン	CR	VU	EX
11	ヒメコウホネ	スイレン	EN	VU	CR
12	ヒツジグサ	スイレン			EX
13	ナガバノイシモチソウ	モウセンゴケ	CR	VU	EX
14	チダケサシ	ユキノシタ			EX
15	キジムシロ	バラ			
16	ナガボノワレモコウ	バラ			EX
17	キハギ	マメ			EX
18	タカトウダイ	トウダイグサ			EX
19	クロウメモドキ	クロウメモドキ			EX
20	ハマボウ	アオイ	VU		EX
21	コガンピ	ジンチョウゲ			EX
22	アリマグミ	グミ			EX
23	ミズスギナ	ミソハギ	EX	EN	EX
24	ギンリョウソウ	イチヤクソウ			EX
25	レンゲツツジ	ツツジ			EX
26	クサナギオゴケ	ガガイモ	NT	VU	EX
27	コカモメヅル	ガガイモ			EX
28	ヤマムグラ	アカネ			EX
29	ホタルカズラ	ムラサキ	VU		EX
30	ケブカツルカソウ	シソ	EN	EN	EX
31	ミストラノオ	シソ	VU	VU	CR
32	オオヒナノウスツボ	ゴマノハグサ			EX
33	ノタヌキモ	タヌキモ	VU	VU	EX
34	フサタヌキモ	タヌキモ	EX	EN	EX
35	ミカワタヌキモ	タヌキモ	EN	VU	EX
36	コタヌキモ	タヌキモ	EX		EX
37	ヒメミミカキグサ	タヌキモ	EN	EN	EX
38	タニウツギ	スイカズラ			EX
39	オミナエシ	オミナエシ			EX
40	オトコエシ	オミナエシ			EX
41	ツルニンジン	キキョウ			EX
42	ヒメシオン	キク	VU		EX
43	アキノハハコグサ	キク	VU	VU	EX
44	ヤマジノギク	キク	CR		
45	カセンソウ	キク	VU		EX
46	オナモミ	キク	EN	VU	
47	マルミスブタ	トチカガミ	EN	VU	EX
48	スブタ	トチカガミ	VU	VU	EX

49	ヤナギスブタ	トチカガミ			EX
50	トチカガミ	トチカガミ	EN	NT	EX
51	コウガイモ	トチカガミ	VU		EX
52	ホッスモ	イバラモ			EX
53	オオバギボウシ	ユリ			EX
54	ナルコユリ	ユリ			EX
55	ミズアオイ	ミズアオイ	CR	NT	EX
56	ヌカボシソウ	イグサ			EX
57	オオホシクサ	ホシクサ	EN		EX
58	ヒナザサ	イネ	VU		EX
59	コゴメカゼクサ	イネ	VU		EX
60	アオウシノケグサ	イネ			EX
61	コメガヤ	イネ			EX
62	オオアブラスキ	イネ			EX
63	イトハナビテンツキ	カヤツリグサ			EX
64	ミクリガヤ	カヤツリグサ	CR	EN	EX
65	ノグサ	カヤツリグサ	EN		EX
66	シズイ	カヤツリグサ	VU		EX
67	カガシラ	カヤツリグサ	CR	VU	EX
68	コシンジュガヤ	カヤツリグサ			EX
69	ギンラン	ラン			EX
70	サワラン	ラン	CR		EX
71	ツチアケヒ	ラン			EX
72	ミズトンボ	ラン	VU	VU	EX
73	トキノウ	ラン	EN	NT	EX
74	ヤマトキノウ	ラン	VU		EX
75	クモラン	ラン			EX

絶滅危惧 I A 類 (CR)

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ミズニラ	ミズニラ	NT	NT	CR
2	ツクシヤワラシダ	ヒメシダ	VU		
3	カヤ	イチイ			CR
4	ミヤコミズ	イラクサ	CR	VU	CR
5	ダンコウバイ	クスノキ			CR
6	ヒメクロモジ	クスノキ			
7	カザグルマ	キンボウゲ	VU	NT	CR
8	スハマソウ	キンボウゲ	NT	NT	CR
9	ヒメイカリソウ	メギ			CR
10	コガクウツギ	ユキノシタ	EN		CR
11	シモツケ	バラ			CR
12	イヌハギ	マメ	VU	NT	CR
13	ヒトツバハギ	トウダイグサ			CR
14	コケリンドウ	リンドウ	VU		
15	シマジタムラソウ	シソ	NT	VU	CR
16	リュウノウギク	キク			CR
17	カタクリ	ユリ			CR
18	ヤマユリ	ユリ			CR
19	コオニユリ	ユリ			CR
20	ヒナノシヤクジョウ	ヒナノシヤクジョウ	VU		CR
21	クロホシクサ	ホシクサ	VU	VU	CR
22	ハマアオスゲ	カヤツリグサ			EN
23	ウマスゲ	カヤツリグサ			VU
24	セイタカハリイ	カヤツリグサ	VU		CR
25	キンラン	ラン	NT	VU	CR
26	シュスラン	ラン	VU		
27	オオミヤマウスラ	ラン	EN		

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ヤマドリゼンマイ	ゼンマイ			EN
2	ウスヒメワラビ	メシダ			EN
3	シロヤマンダ	メシダ			EN
4	ヤマネコヤナギ	ヤナギ			EN
5	ナガバノウナギツカミ	タデ	NT	NT	EN
6	シデコブシ	モクレン	VU	NT	EN
7	イシモチソウ	モウセンゴケ	VU	NT	EN
8	ミズタガラシ	アブラナ	NT		CR
9	ウメバチソウ	ユキノシタ			EN
10	ヤブサンザシ	ユキノシタ	VU		EN
11	イワガラミ	ユキノシタ			EN
12	カワラサイコ	バラ	NT		EN
13	マメナシ	バラ	CR	EN	EN
14	カラメドハギ	マメ			EN
15	コクサギ	ミカン			EN
16	ヒメミソハギ	ミソハギ			EN
17	タチモ	アリノトウグサ	NT	NT	EN
18	リンドウ	リンドウ			EN
19	スズサイコ	ガガイモ	国リスト	NT	EN
20	キクムグラ	アカネ	NT		EN
21	ヤブムラサキ	クマツヅラ			EN
22	ミズネコノオ	シソ	VU	NT	EN
23	オカカタツナミソウ	シソ			EN
24	マルバノホロン	ナス			EN
25	コシオガマ	ゴマノハグサ			EX
26	ムラサキミミカキグサ	タヌキモ	NT	NT	EN
27	イナカギク	キク			EN
28	コヤブタバコ	キク			EN
29	ミズギク	キク	NT		EN
30	カシワバハグマ	キク			EN
31	シバナ	シバナ	NT	NT	EN
32	ヒルムシロ	ヒルムシロ	NT		NT
33	ノカンソウ	ユリ			EN
34	ササユリ	ユリ			EN
35	ミヤマナルコユリ	ユリ			EN
36	ノハナショウブ	アヤメ			EN
37	ツクシクロイヌノヒゲ	ホシクサ	NT	VU	EN
38	ミクリ	ミクリ	VU	NT	EN
39	ヤマトミクリ	ミクリ	NT	NT	EN
40	センダイスゲ	カヤツリグサ	VU		
41	アズマナルコ	カヤツリグサ			EN
42	ニシノホンモンジスゲ	カヤツリグサ	VU		VU
43	ヒメアオガヤツリ	カヤツリグサ	EN		EN
44	ヒメガヤツリ	カヤツリグサ	VU		
45	イガクサ	カヤツリグサ			EN
46	マツカサススキ	カヤツリグサ			EN
47	ミカワシンジュガヤ	カヤツリグサ	VU	VU	EN
48	ムヨウラン	ラン			EN
49	コバノトンボソウ	ラン			EN

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ウチワゴケ	コケシノブ			VU
2	イシカグマ	コバノイシカグマ	NT		VU
3	チャセンシダ	チャセンシダ			VU

4	コモチシダ	シシガシラ			VU
5	ウスバシケシダ	メシダ	VU		VU
6	キヌヤナギ	ヤナギ	NT		VU
7	カワラハンノキ	カバノキ			VU
8	フモトミズナラ	フナ	NT		VU
9	ウラジロガシ	フナ			VU
10	ウナギツカミ	タデ			VU
11	サクラタデ	タデ			VU
12	アキノミチヤナギ	タデ			VU
13	コギシギシ	タデ	国リスト	VU	VU
14	ウマノアシガタ	キンボウゲ			VU
15	オオバウマノスズクサ	ウマノスズクサ			VU
16	マタタビ	マタタビ			VU
17	サワオトギリ	オトギリソウ			VU
18	コイヌガラシ	アブラナ	国リスト	NT	VU
19	ハタザオ	アブラナ			VU
20	ツメレンゲ	ベンケイソウ	NT	NT	VU
21	オオウラジロノキ	バラ			VU
22	ホドイモ	マメ			VU
23	タヌキマメ	マメ			VU
24	ハマエンドウ	マメ			VU
25	ヒナノカンザシ	ヒメハギ			VU
26	ニガキ	ニガキ			VU
27	タマミズキ	モチノキ			VU
28	ガンビ	ジンチョウゲ			VU
29	ウスゲチョウジタデ	アカバナ	国リスト	NT	EN
30	アギスミレ	スミレ			VU
31	オグラノフサモ	アリノトウグサ	VU	VU	VU
32	ホザキノフサモ	アリノトウグサ			VU
33	ノダケ	セリ			VU
34	ムカゴニンジン	セリ			VU
35	ギンリョウソウモドキ	イチヤクソウ			VU
36	イヌセンブリ	リンドウ	NT	VU	VU
37	ガガブタ	ミツガシワ	NT	NT	NT
38	ホソバナセジュズネノキ	アカネ			VU
39	ホソバノヨツバムグラ	アカネ			VU
40	オドリコンウ	シソ			VU
41	ヤマハッカ	シソ			VU
42	タツナミソウ	シソ			VU
43	イガタツナミ	シソ			VU
44	シソバタツナミ	シソ			VU
45	ニガクサ	シソ			VU
46	オオアブノメ	ゴマノハグサ	NT	VU	VU
47	イヌノフグリ	ゴマノハグサ	国リスト	VU	VU
48	オオカメノキ	スイカズラ			VU
49	サウギキョウ	キキョウ			VU
50	タニギキョウ	キキョウ			VU
51	キキョウ	キキョウ	NT	VU	VU
52	ヌマダイコン	キク			EN
53	オクモミジハグマ	キク			VU
54	キッコウハグマ	キク			VU
55	カワラハハコ	キク			VU
56	ウラギク	キク	国リスト	VU	VU
57	オケラ	キク			VU
58	オグルマ	キク			VU
59	ムラサキニガナ	キク			VU
60	ヘラオモダカ	オモダカ			VU

61	オオトリゲモ	イバラモ	NT		VU
62	ウバユリ	ユリ			VU
63	チゴユリ	ユリ			VU
64	キスゲ	ユリ			VU
65	コバギボウシ	ユリ			VU
66	キヨスミギボウシ	ユリ			VU
67	アマナ	ユリ			VU
68	ヒメドコロ	ヤマノイモ			VU
69	ヒメコウガイゼキショウ	イグサ			VU
70	シラタマホシクサ	ホシクサ	VU	VU	VU
71	アズマガヤ	イネ			VU
72	ヌマカゼクサ	イネ			VU
73	ウンヌケ	イネ	NT	NT	VU
74	コウボウ	イネ			VU
75	ウキシバ	イネ	NT		VU
76	ワセオバナ	イネ			EX
77	シダミコザサ	イネ	VU		VU
78	スルガテンナンショウ	サトイモ			VU
79	ナガエミクリ	ミクリ	国リスト	NT	VU
80	イセウキヤガラ	カヤツリグサ			NT
81	ツクバスゲ	カヤツリグサ			
82	ケタガネソウ	カヤツリグサ			VU
83	ピロードスゲ	カヤツリグサ			VU
84	イソヤマテンツキ	カヤツリグサ			EN
85	サイハイラン	ラン			VU
86	カキラン	ラン			VU
87	クロヤツシロラン	ラン			VU
88	ミヤマウスラ	ラン			VU
89	サギソウ	ラン	VU	NT	VU
90	ジガバチソウ	ラン			VU
91	クモキリソウ	ラン			VU

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	オオハナワラビ	ハナヤスリ			VU
2	コハナヤスリ	ハナヤスリ			NT
3	トキワトラノオ	チャセンシダ			NT
4	タニヘゴ	オシダ			NT
5	サクラバハノキ	カバノキ	国リスト	NT	NT
6	カワラナデシコ	ナデシコ			NT
7	ホンバハマアカザ	アカザ			NT
8	カゴノキ	クスノキ			NT
9	シロダモ	クスノキ			NT
10	ヘビノボラス	メギ	NT		NT
11	ジュンサイ	スイレン			NT
12	スズカカンアオイ	ウマノスズクサ			NT
13	モウセンゴケ	モウセンゴケ			NT
14	マンサク	マンサク			NT
15	コアジサイ	ユキノシタ			NT
16	ワタゲカマツカ	バラ			NT
17	カワラケツメイ	マメ			
18	マキエハギ	マメ			NT
19	ケイリュウタチツボスミレ	スミレ			NT
20	ミスユキノシタ	アカバナ			NT
21	イチヤクソウ	イチヤクソウ			NT
22	クサレダマ	サクラソウ			NT
23	クロミノニシゴリ	ハイノキ			NT

24	ネナシカズラ	ヒルガオ			NT
25	ハッカ	シン			NT
26	ミゾコウジュ	シン	国リスト	NT	NT
27	イヌゴマ	シン			NT
28	ナンバンギセル	ハマウツボ			NT
29	イヌタヌキモ	タヌキモ	国リスト	NT	NT
30	ミミカキグサ	タヌキモ			NT
31	ホザキノミミカキグサ	タヌキモ			NT
32	カワラニンジン	キク			NT
33	キセルアザミ	キク			NT
34	アギナシ	オモダカ	国リスト	NT	NT
35	イトトリゲモ	イバラモ	国リスト	NT	NT
36	ヤマラッキョウ	ユリ			NT
37	ヒメコヌカグサ	イネ	国リスト	NT	NT
38	ウラシマンソウ	サトイモ			NT
39	ショウジョウスゲ	カヤツリグサ			NT
40	シオクグ	カヤツリグサ			NT

国リスト

No.	種名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ニッケイ	クスノキ	国リスト	NT	リスト外
2	ミズマツバ	ミソハギ	国リスト	VU	リスト外
3	カワヂシャ	ゴマンハグサ	国リスト	NT	リスト外
4	シラン	ラン		NT	リスト外

哺乳類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「The Wild Mammals of Japan」(日本哺乳類学会, 2009)に準拠し、新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	オオカミ	食肉(ネコ)	イヌ	EX	EX	
2	イノシシ	偶蹄(ウシ)	イノシシ			
3	ニホンジカ	偶蹄(ウシ)	シカ			

絶滅危惧 I A 類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	キクガシラコウモリ	翼手(コウモリ)	キクガシラコウモリ	NT		CR
2	ニホンノウサギ	ウサギ	ウサギ			CR
3	ニホンリス	齧歯(ネズミ)	リス			CR
4	ムササビ	齧歯(ネズミ)	リス	NT		CR
5	アカギツネ	食肉(ネコ)	イヌ			CR
6	ニホンテン	食肉(ネコ)	イタチ	NT		CR
7	ニホンアナグマ	食肉(ネコ)	イタチ	DD		CR
8	スナメリ	クジラ	ネズミイルカ	NT		

絶滅危惧 I B 類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ニホンジネズミ	トガリ(モグラ)	トガリネズミ			VU
2	ヒミズ	トガリ(モグラ)	モグラ			EN
3	ハタネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	NT		EN
4	カヤネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ	VU		EN

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	コウベモグラ	トガリ(モグラ)	モグラ		LP	

2	アカネズミ	齧歯(ネズミ)	ネズミ			VU
3	ニホンイタチ	食肉(ネコ)	イタチ			VU

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	タヌキ	食肉(ネコ)	イヌ			VU
2	カモシカ	偶蹄(ウシ)	ウシ			DD

情報不足(DD)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ニホンザル	霊長(サル)	オナガザル			DD

・鳥類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本鳥類目録改訂第6版」(日本鳥学会, 2000) に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	クロツラヘラサギ	コウノトリ	トキ			
2	ヨタカ	ヨタカ	ヨタカ	VU	VU	CR

絶滅危惧 I B 類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ヨシゴイ	コウノトリ	サギ	EN	NT	EN
2	ミソゴイ	コウノトリ	サギ	EN	EN	DD
3	ツルシギ	チドリ	シギ	VU		EN
4	コノハズク	フクロウ	フクロウ	CR		EN

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	トモエガモ	カモ	カモ	VU	VU	VU
2	ハチクマ	タカ	タカ	VU	NT	VU
3	サシバ	タカ	タカ	VU	VU	VU
4	チュウヒ	タカ	タカ	EN	EN	VU
5	ハヤブサ	タカ	ハヤブサ	EN	VU	VU
6	ヒクイナ	ツル	クイナ	VU	VU	VU
7	タマシギ	チドリ	タマシギ	VU		VU
8	ウスラシギ	チドリ	シギ	VU		VU
9	タカブシギ	チドリ	シギ	VU		NT
10	オグロシギ	チドリ	シギ	VU		VU
11	ホウロクシギ	チドリ	シギ	VU	VU	VU
12	オオジシギ	チドリ	シギ	CR	NT	VU
13	ズグロカモメ	チドリ	カモメ	EN	VU	NT
14	コアジサシ	チドリ	カモメ	NT	VU	VU
15	アオバズク	フクロウ	フクロウ	NT		VU
16	フクロウ	フクロウ	フクロウ	NT		VU
17	コシアカツバメ	スズメ	ツバメ			NT
18	コイカル	スズメ	アトリ			VU

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	チュウサギ	コウノトリ	サギ		NT	NT
2	ミサゴ	タカ	タカ	NT	NT	NT

3	オオタカ	タカ	タカ	NT	NT	NT
4	ツミ	タカ	タカ	NT		NT
5	ハイタカ	タカ	タカ		NT	NT
6	クイナ	ツル	クイナ	NT		NT
7	イカルチドリ	チドリ	チドリ	VU		
8	シロチドリ	チドリ	チドリ	NT		VU
9	メダイチドリ	チドリ	チドリ			
10	コオバシギ	チドリ	シギ	NT		
11	オバシギ	チドリ	シギ	NT		
12	アカアシシギ	チドリ	シギ	NT	VU	NT
13	オオソリハシシギ	チドリ	シギ	NT		VU
14	ダイシャクシギ	チドリ	シギ	NT		NT
15	ヤマシギ	チドリ	シギ	DD		DD
16	セイタカシギ	チドリ	セイタカシギ	VU	VU	NT
17	カッコウ	カッコウ	カッコウ			VU
18	オオコノハズク	フクロウ	フクロウ	DD		DD
19	サンショウウクイ	スズメ	サンショウウクイ	NT	VU	VU

情報不足(DD)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ウズラ	キジ	キジ	VU	NT	DD
2	シベリアオオハシシギ	チドリ	シギ	CR	DD	DD
3	ノジコ	スズメ	ホオジロ	VU	NT	DD

・は虫類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録一本邦産野生動植物の種の現状－(脊椎動物編)」(環境省編, 1993)を基に、「日本爬虫両生類標準和名(改定案)」(日本爬虫両生類学会2009)の新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

(該当種なし)

絶滅危惧 I B 類(EN)

(該当種なし)

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ニホンスッポン	カメ	スッポン	DD	DD	DD
2	シロマダラ	有鱗	ナミヘビ	DD		

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ニホンイシガメ	カメ	イシガメ		DD	NT
2	クサガメ	カメ	イシガメ			NT
3	ジムグリ	有鱗	ナミヘビ			NT
4	シマヘビ	有鱗	ナミヘビ			NT
5	ヒバカリ	有鱗	ナミヘビ			NT
6	ヤマカガシ	有鱗	ナミヘビ			

情報不足(DD)

(該当種なし)

・両生類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動物植物の種の現状－(脊椎動物編)」(環境省編, 1993)を基に、「日本爬虫両生類標準和名(改定案)」(日本爬虫両生類学会2009)の新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	カスミサンショウウオ	有尾	サンショウウオ	EN	VU	CR
2	アカハライモリ	有尾	イモリ	DD	NT	CR
3	ナゴヤダルマガエル	無尾	アカガエル	VU	EN	CR
4	シュレーゲルアオガエル	無尾	アオガエル			CR

絶滅危惧 I B 類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ツチガエル	無尾	アカガエル	DD		
2	ニホンアカガエル	無尾	アカガエル			EN

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	トノサマガエル	無尾	アカガエル			VU

準絶滅危惧(NT)

(該当種なし)

情報不足(DD)

(該当種なし)

・魚類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動物植物の種の現状－(脊椎動物編)」(環境省編, 1993)に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	スナヤツメ	ヤツメウナギ	ヤツメウナギ	VU	VU	CR
2	スジシマドジョウ小型種(東海)	コイ	ドジョウ	NT	EN	

絶滅危惧 I B 類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	サツキマス	サケ	サケ		NT	
2	イチモンジタナゴ	コイ	コイ	VU	CR	EN
3	シマドジョウ	コイ	ドジョウ			VU
4	ホトケドジョウ	コイ	ドジョウ	VU	EN	
5	アカザ	ナマズ	アカザ	NT	VU	
6	ドンコ	スズキ	ドンコ	NT		EN
7	カマキリ(アユカケ)	カサゴ	カジカ	VU	VU	
8	ウツセミカジカ(カジカ小卵型)	カサゴ	カジカ	VU	EN	

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ゼゼラ	コイ	コイ			VU
2	ヤリタナゴ	コイ	コイ	NT	NT	
3	メダカ	ダツ	メダカ	NT	VU	VU
4	カワアナゴ	スズキ	カワアナゴ	DD		
5	チチブ	スズキ	ハゼ			
6	ウキゴリ	スズキ	ハゼ			

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ウナギ	ウナギ	ウナギ		DD	NT
2	アユ	サケ	アユ			NT
3	ナマズ	ナマズ	ナマズ			

情報不足(DD)

(該当種なし)

・昆虫類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動物植物の種の現状—(無脊椎動物編)」(環境省編, 1995) を基に新しい知見を加え整理した。

絶滅(EX)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ヒヌマイトトンボ	トンボ	イトトンボ	EN	CR+EN	EX
2	コバネアオイトトンボ	トンボ	アオイトトンボ	CR	CR+EN	EX
3	アオハダトンボ	トンボ	カワトンボ			
4	マダラニワトンボ	トンボ	トンボ	EN	CR+EN	EX
5	タガメ	カメムシ	コオイムシ	EN	VU	EX
6	カワラハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ	CR	VU	EX
7	ゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	EN	NT	EX
8	コガタノゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	CR+EN	EX
9	マルガタゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	CR	NT	EX
10	スジゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	CR+EN	EX
11	マダラシマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	EX	CR+EN	EX
12	シルビアシジミ	チョウ	シジミチョウ	EX	CR+EN	EX
13	オオウラギンヒヨウモン	チョウ	タテハチョウ		CR+EN	
14	ヒメヒカゲ	チョウ	ジャノメチョウ	CR	CR+EN	EX

絶滅危惧ⅠA類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ムカシヤンマ	トンボ	ムカシヤンマ			CR
2	キイロヤマトンボ	トンボ	エソトンボ	NT	NT	CR
3	ベッコウトンボ	トンボ	トンボ	CR	CR+EN	CR
4	オオキトンボ	トンボ	トンボ	CR	CR+EN	CR
5	コバンムシ	カメムシ	コバンムシ	CR	VU	CR
6	カワラゴミムシ	コウチュウ	カワラゴミムシ	NT		CR
7	オオヒョウタンゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	VU	NT	EX
8	フタモンマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	CR	NT	CR
9	ケベリマルクビゴミムシ	コウチュウ	オサムシ	CR	NT	CR
10	ムツボシツヤコツプゲンゴロウ	コウチュウ	コツプゲンゴロウ	NT		CR
11	コクロマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ			
12	クロゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	VU		
13	オオクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ	CR	VU	
14	ヨツボシカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ	EN	VU	CR

15	オオシロカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ				CR
16	ミヤマチャバネセセリ	チョウ	セセリチョウ	EN			
17	ギフチョウ	チョウ	アゲハチョウ	NT	VU		CR
18	ウラナミジャノメ	チョウ	ジャノメチョウ	VU	VU		CR

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ベニイトトンボ	トンボ	イトトンボ	VU	VU	CR
2	キイロサナエ	トンボ	サナエトンボ	NT		VU
3	ホンサナエ	トンボ	サナエトンボ			EN
4	エソトンボ	トンボ	エソトンボ	EN		DD
5	キトンボ	トンボ	トンボ	EN		NT
6	アカジマアシブトンカ	カメムシ	マルウンカ	NT		EN
7	オオアメンボ	カメムシ	アメンボ	NT		EN
8	エサキアメンボ	カメムシ	アメンボ	NT	NT	
9	ホンハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ	VU	NT	EN
10	マダラコガシラミズムシ	コウチュウ	コガシラミズムシ	EN	NT	
11	ヤマトモンシデムシ	コウチュウ	シデムシ	VU	NT	VU
12	アカマダラハナムグリ	コウチュウ	コガネムシ	NT	DD	VU
13	クロマダラタマムシ	コウチュウ	タマムシ	VU		
14	ゲンジボタル	コウチュウ	ホタル			EN
15	ヘイケボタル	コウチュウ	ホタル			EN
16	ウラギンヒョウモン	チョウ	タテハチョウ			CR
17	ウラギンスジヒョウモン	チョウ	タテハチョウ	NT	NT	EN

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	フタスジサナエ	トンボ	サナエトンボ	VU	NT	VU
2	オグマサナエ	トンボ	サナエトンボ	VU	VU	VU
3	ネアカヨシヤンマ	トンボ	ヤンマ	VU		VU
4	アオヤンマ	トンボ	ヤンマ	VU		NT
5	トラフトンボ	トンボ	エソトンボ	NT		NT
6	チツチゼミ	カメムシ	ゼミ			VU
7	ヒメタイコウチ	カメムシ	タイコウチ	NT		VU
8	ハンミョウ	コウチュウ	ハンミョウ			VU
9	シマゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	NT		
10	コナガミズスマシ	コウチュウ	ミズスマシ	NT		VU
11	ガムシ	コウチュウ	ガムシ			
12	ミツノエンマコガネ	コウチュウ	コガネムシ			DD
13	マメハンミョウ	コウチュウ	ツチハンミョウ			EN
14	ベーツヒラタカミキリ	コウチュウ	カミキリムシ			VU
15	ゴマフツトガ	チョウ	ツトガ			
16	エンスイミズメイガ	チョウ	ツトガ	DD		
17	ミヤマセセリ	チョウ	セセリチョウ			EN
18	ウラクロシジミ	チョウ	シジミチョウ			
19	イチモンジチョウ	チョウ	タテハチョウ			
20	オオチャバネヨトウ	チョウ	ヤガ	NT		

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ムスジイトトンボ	トンボ	イトトンボ			NT
2	オオイトトンボ	トンボ	イトトンボ	VU		
3	モートンイトトンボ	トンボ	イトトンボ	NT	NT	
4	ナゴヤサナエ	トンボ	サナエトンボ	NT	NT	NT
5	メガネサナエ	トンボ	サナエトンボ	NT	NT	NT
6	マルタンヤンマ	トンボ	ヤンマ			VU
7	コシボソヤンマ	トンボ	ヤンマ			NT

8	サラサヤンマ	トンボ	ヤンマ			NT
9	ハッチョウトンボ	トンボ	トンボ			NT
10	オオゴキブリ	ゴキブリ	オオゴキブリ	DD		VU
11	ヒメカマキリ	カマキリ	ヒメカマキリ			NT
12	コロギス	バッタ	コロギス			NT
13	クツムシ	バッタ	クツムシ			NT
14	ヤマトフキバッタ	バッタ	バッタ			NT
15	セグロイナゴ	バッタ	バッタ			NT
16	トゲナナフシ	ナナフシ	ナナフシ			NT
17	ナナフシモドキ	ナナフシ	ナナフシ			NT
18	ハウチワウンカ	カメムシ	ガンバイウンカ		NT	
19	ハルゼミ	カメムシ	ゼミ			NT
20	タイコウチ	カメムシ	タイコウチ			
21	ミスカマキリ	カメムシ	タイコウチ			NT
22	オオミススマシ	コウチュウ	ミススマシ			NT
23	ヤマトエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ			
24	ヒラタクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ			
25	コカブトムシ	コウチュウ	コガネムシ			NT
26	ヒメボタル	コウチュウ	ホタル			NT
27	ジャコウアゲハ	チョウ	アゲハチョウ			EN
28	ツマグロキチョウ	チョウ	シロチョウ		VU	EN
29	ウラゴマダラシジミ	チョウ	シジミチョウ			NT
30	ヒオドシチョウ	チョウ	タテハチョウ			NT
31	ジャノメチョウ	チョウ	ジャノメチョウ			EN
32	イボタガ	チョウ	イボタガ			VU
33	ガマヨトウ	チョウ	ヤガ			
34	ヌマベウスキヨトウ	チョウ	ヤガ			
35	アトジロキリガ	チョウ	ヤガ			
36	トビイロアカガネヨトウ	チョウ	ヤガ			
37	フシキキシタバ	チョウ	ヤガ			

情報不足(DD)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ハネビロエゾトンボ	トンボ	エゾトンボ	VU	VU	
2	アリツカコオロギの一種	バッタ	アリツカコオロギ			DD
3	ハネナガイナゴ	バッタ	バッタ			NT
4	タイワントビナナフシ	ナナフシ	ナナフシ			DD
5	コオイムシ	カメムシ	コオイムシ		NT	DD
6	シロヘリツチカメムシ	カメムシ	ツチカメムシ		NT	
7	トダセシゲンゴロウ	コウチュウ	ゲンゴロウ	NT	NT	DD
8	ヤマトホソガムシ	コウチュウ	ホソガムシ	NT		DD
9	シウムネマルドROMシ	コウチュウ	マルドROMシ			
10	ヒメシジミガムシ	コウチュウ	ガムシ			
11	クロエンマムシ	コウチュウ	エンマムシ	DD		
12	マダラクワガタ	コウチュウ	クワガタムシ			
13	ヤマトヒメダカカッコウムシ	コウチュウ	カッコウムシ			
14	カギアシソウムシ	コウチュウ	ソウムシ	DD		
15	トウカイツマキリアツバ	チョウ	ヤガ			
16	アカマエアツバ	チョウ	ヤガ			

クモ類

目及び科の範囲、名称、配列は原則として「日本産クモ類目録 Ver. 2010R2」(谷川明男, 2010: インターネット上にて公表)に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ワスレナグモ	クモ	ジグモ	VU	NT	CR
2	カネコトタテグモ	クモ	カネコトタテグモ	VU	NT	CR
3	キシノウエトタテグモ	クモ	トタテグモ	CR	NT	CR
4	ムツトゲイセキグモ	クモ	コガネグモ	EN		CR
5	カコウコモリグモ	クモ	コモリグモ			VU
6	テジロハリゲコモリグモ	クモ	コモリグモ	EN		CR

絶滅危惧 I B 類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	キノボリトタテグモ	クモ	トタテグモ	VU	NT	EN
2	ミナミコモリグモ	クモ	コモリグモ	VU		EN
3	ハヤテグモ	クモ	キシダグモ			VU

絶滅危惧 II 類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	シロオビトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	VU		VU
2	アカイトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	VU		VU
3	ゲホウグモ	クモ	コガネグモ	NT		VU
4	エビチャコモリグモ	クモ	コモリグモ			VU
5	クリチャササグモ	クモ	ササグモ			VU
6	ヤギヌマフクログモ	クモ	フクログモ			VU
7	オビジガバチグモ	クモ	ネコグモ	VU		
8	オビボンカニグモ	クモ	カニグモ	VU		VU

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ギボシヒメグモ	クモ	ヒメグモ			NT
2	ピジョオニグモ	クモ	コガネグモ			NT
3	コガネグモ	クモ	コガネグモ	NT		NT
4	トリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	NT		NT
5	オオトリノフンダマシ	クモ	コガネグモ	NT		NT
6	スズミグモ	クモ	コガネグモ			NT
7	ハマキフクログモ	クモ	フクログモ			NT
8	ヒゲナガツヤグモ	クモ	ワシグモ			NT

情報不足(DD)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	シロスジグモ	クモ	カニグモ			
2	ムロズミンレグモ	クモ	スオウグモ	DD		DD

・カニ類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録－本邦産野生動物種の現状－(無脊椎動物編Ⅱ)」(環境庁編, 1998) に準拠した。

絶滅(EX)

(該当種なし)

絶滅危惧 I A 類(CR)

(該当種なし)

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	ハクセンシオマネキ	十脚	スナガニ		VU	
2	サワガニ	十脚	サワガニ			

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	アカテガニ	十脚	イワガニ			
2	クシテガニ	十脚	イワガニ			
3	ウモレベンケイガニ	十脚	イワガニ			

準絶滅危惧(NT)

No.	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	サメハダヘイケガニ	十脚	ヘイケガニ			
2	モクスガニ	十脚	イワガニ			
3	コメツキガニ	十脚	スナガニ			
4	チゴガニ	十脚	スナガニ			

情報不足(DD)

(該当種なし)

貝類

目及び科の範囲、名称、配列は、原則として「日本産野生生物目録—本邦産野生動物植物の種の現状—(無脊椎動物編Ⅱ)」(環境庁編, 1998) に準拠した。

絶滅(EX)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	淡水	カワネシガイ	モノアラガイ(基眼)	ヒラマキガイ	EX	CR+EN	EX
2	内湾	ハイガイ	フネガイ	フネガイ	EX		EX
3	内湾	イチヨウシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	EX		EX
4	内湾	アゲマキガイ	マルスダレガイ	ナタマメガイ	EX		EX

絶滅危惧ⅠA類(CR)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	淡水	イシガイ	イシガイ	イシガイ	CR		CR
2	淡水	マルタニシ	盤足	タニシ	NT	NT	CR
3	淡水	マメタニシ	盤足	エゾマメタニシ			CR
4	内湾	イボキサゴ	古腹足	ニシキウス	CR		CR
5	内湾	ウミニナ	盤足	ウミニナ	NT	NT	CR
6	内湾	イボウミニナ	盤足	ウミニナ	EN	VU	CR
7	内湾	ヘナタリ	盤足	フトヘナタリ	NT	NT	CR
8	内湾	カワアイ	盤足	フトヘナタリ	EN	VU	CR
9	内湾	サザナミツボ	盤足	サザナミツボ	DD		
10	内湾	ヨシダカワザンショウ	盤足	カワザンショウガ	VU	VU	
11	内湾	タクミナ	異旋	タクミナ	CR		
12	内湾	インチドリ	異旋	インチドリガイ	CR		
13	内湾	オカミミガイ	基眼	オカミミガイ	EN	VU	
14	内湾	キヌカツギハマシノミガイ	基眼	オカミミガイ	CR	VU	CR
15	内湾	マゴコロガイ	マルスダレガイ	カワホトトギス			
16	内湾	イセシラガイ	マルスダレガイ	ツキガイ	CR		
17	内湾	ヤチヨノハナガイ	マルスダレガイ	バカガイ	CR		
18	内湾	アオサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	CR		
19	内湾	ハナグモリガイ	マルスダレガイ	ハナグモリガイ	CR	VU	
20	内湾	ウラカガミ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	CR		
21	内湾	ハマグリ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	CR		
22	内湾	ヒメマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	CR		

23	内湾	クシケマスオガイ	オオノガイ	オオノガイ	CR		
24	内湾	ウミタケ	オオノガイ	ニオガイ	CR		

絶滅危惧ⅠB類(EN)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	陸	ナミギセル	マイマイ(柄眼)	キセルガイ			
2	陸	ナガオカモノアラガイ	マイマイ(柄眼)	オカモノアラガイ	NT	NT	EN
3	陸	ヒルゲンドルフマイマイ	マイマイ(柄眼)	オナジマイマイ	NT	NT	CR
4	淡水	モノアラガイ	モノアラガイ(基眼)	モノアラガイ	NT	NT	EN
5	内湾	オリイレボラ	新腹足	コロモガイ	EN		
6	内湾	サビシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	EN		EN

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	淡水	マジジミ	マルスダレガイ	シジミ	VU	NT	
2	内湾	ヒロクチカノコ	アマオブネガイ	アマオブネガイ	VU	VU	VU
3	内湾	フトヘナタリ	盤足	フトヘナタリ	NT	NT	CR
4	内湾	ワカウラツボ	盤足	ワカウラツボ	VU	VU	VU
5	内湾	ムシロガイ	新腹足	オリイレヨウバイ	CR		
6	内湾	ヌカルミクチキレ(未記載種)	異旋	トウガタガイ	VU		
7	内湾	イヨスダレガイ	マルスダレガイ	マルスダレガイ	VU		

準絶滅危惧(NT)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	淡水	オオタニシ	盤足	タニシ			NT
2	淡水	ドフガイ	イシガイ	イシガイ	NT		VU
3	内湾	カワグチツボ	盤足	ワカウラツボ	NT	NT	NT
4	内湾	クリイロカワザンショウ	盤足	カワザンショウガイ	NT		NT
5	内湾	ムシヤドリカワザンショウ	盤足	カワザンショウガイ	NT	NT	NT
6	内湾	ツツカワザンショウ	盤足	カワザンショウガイ	NT		NT
7	内湾	エドガワミスゴマツボ	盤足	ミスゴマツボ	NT	NT	NT
8	内湾	セキモリ	翼舌	イトカケガイ	NT		
9	内湾	クレハガイ	翼舌	イトカケガイ	NT		
10	内湾	タイラギ	イガイ	ハボウキガイ	NT		
11	内湾	ツキガイモドキ	マルスダレガイ	ツキガイ	NT		
12	内湾	ユウシオガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT		
13	内湾	サクラガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ	NT		
14	内湾	ゴイサギガイ	マルスダレガイ	ニッコウガイ			
15	内湾	ヒメシラトリ	マルスダレガイ	ニッコウガイ			
16	内湾	オオノガイ	オオノガイ	オオノガイ	NT		
17	内湾	ソトオリガイ	ウミタケモドキ	オキナガイ	NT		

情報不足(DD)

No.	区分	種名	目名	科名	県ランク	国ランク	旧ランク
1	陸	ミジンマイマイ	マイマイ(柄眼)	ミジンマイマイ			
2	内湾	ヒナツボ	盤足	シロネズミガイ			

索引

種 名	頁
アオスジアゲハ	119
アオバズク	112
アカネズミ	18
アカミタンボポ	111
アシナガグモ	97
アズマヒキガエル	25
アベマキ	11
アライグマ	131
イシガイ	105
ウグイス	114
ウチワヤンマ	90
ウナギ	82
ウモレベンケイガニ	98
ウラギク	63
ウラシマンソウ	107
ウラナミシジミ	50
エナガ	23
オイカワ	86
オオカマキリ	26
オオゴキブリ	117
オオスズメバチ	30
オオタカ	21
オオフサモ	131
オオヨシキリ	74
オカミミガイ	102
オギ	59
オグラノフサモ	62
カイツブリ	64
カスミサンショウウオ	24
カネコトタテグモ	124
カヤネズミ	42
カルガモ	66
カワザンショウガイ	101
カワセミ	72
カワヂシャ	57
カワムツ	86
キアゲハ	47
キジ	43
キシノウエトタテグモ	123
キヌカツギハマシイノミガイ	103
キノボリトタテグモ	125
クサガメ	75

種 名	頁
クズ	38
クマバチ	122
ケラ	93
ケリ	44
コアジサシ	67
コイ	133
コウベモグラ	16
コウロエンカワヒバリガイ	135
コオニタヒラコ	60
コガネグモ	52
コゲラ	22
コシアカツバメ	113
コバノミツバツツジ	13
コロギス	27
サツマノミダマシ	34
サトキマダラヒカゲ	33
サラサヤンマ	91
シグモ	126
シロチドリ	68
シロバナサクラタデ	58
スイラン	56
ススキ	41
スナヤツメ	83
セアカゴケグモ	134
セイヨウタンボポ	110
セグロセキレイ	73
タマムシ	118
タモロコ	84
チガヤ	37
チチュウカイミドリガニ	135
チュウサギ	65
ツブラジイ	10
ツマキチョウ	49
ツマグロキチョウ	48
ツマグロヒョウモン	120
ツリガネニンジシ	39
テングチョウ	32
トウカイコモウセンゴケ	55
トノサマガエル	79
ドバト	132
ドブガイ	106
トリノフンダマシ	35

種 名	頁
ナガサキアゲハ	121
ナゴヤダルマガエル	80
ニイニイゼミ	28
ニオイタチツボスミレ	14
ニホンアマガエル	116
ニホンイシガメ	76
ニホンスッポン	76
ニホントンボ	109
ニホントカゲ	46
ニホンヤモリ	115
ニホンリス	19
ノアザミ	36
ノコンギク	40
ハグロトンボ	89
ハッチョウトンボ	92
ハハコグサ	108
ハマシギ	69
ハルリンドウ	54
ヒバカリ	78
ヒバリ	45

種 名	頁
ヒミズ	15
ヒメジャノメ	51
ヒメタイコウチ	94
ヒルゲンドルフマイマイ	127
ヒロクチカノコ	100
ヒロヘリアオイラガ	134
フモトミスナラ	12
ヘイケボタル	95
ホクベイカミツキガメ	132
マイマイカブリ	29
マメナシ	53
マルタニシ	104
ミシシッピアカミミガメ	77
ミドリシジミ	96
ムササビ	20
ムラサキシジミ	31
メダカ	88
モツゴ	85
ヤマトオサガニ	99
ヨメナ	61

使い方のヒント

この本の内容は、以下の財三菱 UFJ 環境財団のホームページからもダウンロードできます。全体の複製はもちろん、必要な環境のページとフィールドノートのページだけを印刷して、観察会などの配布資料としても手軽にご利用いただけます。ぜひご利用下さい。

(財)三菱 UFJ 環境財団ホームページ

<http://www.h7.dion.ne.jp/~ufjef/>

執筆者、作成協力者

本書は、「名古屋市版レッドリスト 2010」作成に係る、名古屋市動植物実態調査検討会委員が中心となって編集しました。委員は次のとおりです。

天野勲、小笠原昭夫、織田銃一、木村昭一、須賀瑛文、芹沢俊介、
田中多喜彦、谷口義則、鳥居ちえ子、矢部隆 (氏名五十音順、敬称略)

第1、2、4(各種解説を除く)、5章は、芹沢俊介が中心になって執筆しました。

第3章の各種解説とコラム、第4章の各移入種の解説は次の者が担当して執筆しました。

【植物】芹沢俊介 【哺乳類】〔旧版〕高田靖司(一部修正:織田銃一)〔新規執筆頁〕織田銃一(p.15,16,17,131下) 【鳥類】小笠原昭夫 【は虫類】〔旧版〕佐藤正孝(故人)(一部修正:矢部隆)〔新規執筆頁〕矢部隆(p.76,77,132下) 【両生類】芹沢俊介 【魚類】谷口義則 【昆虫類】〔旧版〕安藤尚、岡田正哉、佐藤正孝(故人)、高崎保郎、田中蕃(故人)分担執筆(一部修正:田中多喜彦)〔新規執筆頁〕田中多喜彦(p.31,32,48,94,120,121,134上) 【クモ類】緒方清人、須賀瑛文 【カニ類】天野勲 【貝類】木村昭一 (氏名五十音順)

第6章の「植物画を描く」は鳥居ちえ子が執筆しました。

また次の方々には、写真の提供・情報の提供等で、ご協力を頂きました。

【植物】近藤洋一郎、芹沢俊介、高木順夫、花井隆晃、村松正雄、渡辺幸子、愛知県植物誌調査会、名古屋城管理事務所 【哺乳類】植松康、小木曾学、酒井栄一、猿渡樽秀、高田靖司、名和明、藤谷武史、宮尾嶽雄、山本雅人、大高緑地管理事務所、小幡緑地管理事務所、名古屋哺乳類研究会、東山総合公園事務局、守山リス研究会 【鳥類】小笠原昭夫、小笠原智子、後藤悠輔、後藤弘行、佐々木和治、高木清和、前田崇、森井豊久 【は虫類】荒尾一樹、岡田正哉、小野寺慎吾、長谷川道明、矢部隆、山上将史、來田亨子 【両生類】荒尾一樹、上原佳祐、岡田正哉、小野寺慎吾、佐藤正孝(故人)、芹沢俊介、山上将史 【魚類】谷口義則、名城大学環境創造学科水環境研究室 【昆虫類】安藤尚、鶴殿清文、岡田正哉、佐藤正孝(故人)、清水典之、須賀瑛文、高崎保郎、田中多喜彦、田中蕃(故人)、田中雄一、戸田尚希、福住和也、岡野隆裕、水野俊彦、森勇一、矢崎彦彦、山田芳郎、山本雅人、吉鶴靖則、吉富博之、名古屋昆虫同好会、名古屋市市政資料館 【クモ類】緒方清人、柴田良成、須賀瑛文、原穂、村上勝、家股幸子、吉村信紀、熱田神宮、名古屋城管理事務所 【カニ類】天野勲、池田等、木村昭一 【貝類】大島寛俊、河合秀高、河辺訓受、木村昭一、木村妙子、酒井類、佐藤達也、鈴木望海、西村俊明、原田一夫、早瀬善正、守谷茂樹、熱田神宮、豊橋市立自然史博物館、名古屋貝類談話会、名古屋城管理事務所、三重大学生物資源学部 (氏名五十音順、敬称略)

「三菱 UFJ 環境財団」の概要

(財)三菱 UFJ 環境財団は、三菱 UFJ フィナンシャルグループの社会貢献活動および環境への取組みの一翼を担う財団として、環境の保全や自然・生活・文化環境の整備向上を目的に、前身の2財団(1971年設立のサンワみどり基金、1975年設立の東海財団)以来の伝統を受け継ぎ、以下の様々な活動を行っています。

1. 環境保全整備事業

◇**植樹活動を支援**～みどり豊かな森や街づくりを目指し、水源・河川流域、学校や公園等公共施設を対象に植樹をしています。

◇**学校ビオトープづくりを支援**
～子供たちの環境学習の教材として活用してもらおうと、専門指導員がいる団体と提携し、生徒と先生、父兄、地域住民が協働してつくる学校ビオトープづくりを支援しています。

◇**里山保全を支援**～日本の文化と様々な生き物を育ててきた、いわば心の原風景ともいべき里山の保全活動を応援しています。

2. 環境教育事業

◇**「みどりの絵」児童画コンクールの開催**～すでに開催回数は35回を数え、毎年全国から約2万5千人の児童が応募してくれています。

◇**大学向け寄附講座の開講**～大学における環境教育の充実を目指して、平成6年より寄附講座「環境概論」を6校で順次開設。現在は東京学芸大学で開講しています。

◇**啓発図書の発行**～ポケットサイズの植物図鑑シリーズや自然についての各種ガイドブックなど多数の啓発図書を発行し、ご希望の方に配布しています。

◇**映画会「生きている地球の記録」の開催**～毎年夏、名古屋市科学館でアースビジョン地球環境映像祭の入選作品を2日間にわたり無料上映しています。

3. 体験活動事業

◇**「水源の森」事業**
首都圏の水瓶、利根川流域にある群馬県みなかみ町藤原に、国の分収育林制度を活用して「水源の森」を確保。水源の涵養を図るとともに一般市民・児童を対象に自然観察会、林業体験などを年間10回ほど開催し、自然ふれあい学習や保健休養の場として活用しています。毎年延べ約500名が参加されています。

◇**サマージャンボリー開催**
東海3県のみどりの少年団(隊)育成のために、毎年夏2泊3日の野外活動を実施しています。

「生き物から見た名古屋の自然」
— なごやの環境指標種100(改訂版) —

発行年月 平成22年10月
発行 財団法人 三菱UFJ環境財団
〒100-8114
東京都千代田区大手町1-1-1
三菱東京UFJ銀行大手町ビル
電話 03-3214-5553
URL <http://www.h7.dion.ne.jp/~ufjef/>
〒460-8660
名古屋市中区錦三丁目21番24号
名古屋市動植物実態調査検討会
名古屋市
編集協力
編集 株式会社テクノ中部



この冊子は環境に配慮し、再生紙、大豆インキを使用して印刷しています。